

罪背負いし影

砂利道

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

その罪人は友を持ち罪と向き合い、受け入れ、立ち向かった。そんな彼は自らと同じ罪で苦しむ少女と出会う。少女は過去と向き合い、彼はその隣で支え続ける。これはそんな二人の物語

目次

前語り	1
オリ主プロフィール	8
GGO編	
第一撃	11
第二撃	22
第三撃	31
第四撃	43
第五撃	59
第六撃	70
第七撃	82
第八撃	101

第九撃	118
第十撃	130
第十一撃	147
第十二撃	160
第十三撃	175
第十四撃	195
第十五撃	209
第十六撃	219
第十七撃	234
第十八撃	245
その涙は、 (終撃)	259
キャラバ編	
welcome to ALO!!	
上	

一
刀
目

w
e
l
c
o
m
e

t
o

A
L
O
!!

w
e
l
c
o
m
e

t
o

A
L
O
!!

343 323 下 305 中 288

前語り

世界はいつでも理不尽だ。

小学六年、12才の時俺は既にその考えを持つていた。同い年の子のように互いにゲームの話で盛り上がったたり、バカやって大人に怒られたりは無かった。いや、怒られることは常にあつた。やれ帰りが遅い、やれ夕飯が遅い、やれ無駄遣いするな。こんな少し躰が厳しい家なら当然なお叱りだがこの家では意味が違った。

まず帰りが遅い、皆ならどれぐらいと考えるだろうか？小学六年ならおそらくは七時ぐらいだろう。しかしこの家は「四時」だ。学校が終わつて帰路に着けばこの位は当然掛かるだろう。だがそれですら俺の親は遅いと罵つた。

次に夕飯が遅い、これはおそらく食卓に着くのが遅いと考えるだろう。だが違う。この意味は夕飯を「作るの」が遅いだ。この親は一切の料理をしないのだ。

最後に無駄遣いするな、これに至つてはまさしく理不尽だと思う。何故なら夕飯の材料を買つてこいと言われ買つて来れば一瞥してそう叫び散らすのだ。

そして上記三つに共通すること、それは「暴力」だ。それも巧妙に表面上には無傷に見えるように服で隠れる場所にのみだ。殴る蹴るは当たり前、火の付いた煙草を押し付

けたり、時にはナイフで薄く切られた事もある。

その中で周りの奴に家族の自慢を聞かされる度に思う。

“この世界はなんてどこまでも平等では無く理不尽なのか”

その日もいつもと変わらない日のはずだった。玄関の前でため息一つ、いつものように身構えながら扉を開ける。だけどいつまで待っても両親の怒号は聞こえなかった。おかしいと思いつながら奥へと進んでいく。両親は向かい合うように座っていた。そして真ん中には二本の注射器が転がっていた。すると父親がこちらを向いた。

―違う…

その目は瞳孔が開き切りいつも以上に危険な気配がした。俺は後ずさりしてしまった。奇声を上げながら父親が首を絞めにきた。母親は相変わらず何の反応も示さない。いや横目でこつちを見て薄く笑っている。相手はやせ細っているが大人の男だ。なす術もなく俺は首を絞められた。俺はその時、死への恐怖や諦めではなく両親に対する猛烈な殺意を持った。視界が赤く染まるほどに殺したいと思った。がむしやらに手を動かす子供ではありえない腕力で父親を突き飛ばした。俺はそばに落ちていた果物ナイフを手握った。そこからの記憶は俺にはない。

四年後、高校一年になり一人暮らしを始めた。里親の名義で部屋を借りバイトを始めた。あるゲームが欲しかったのだ。こことは違うもう一つの現実となりうる世界へ行きたくて。そのゲームの名は…

ソードアート・オンライン

後に悪魔のゲームやりアルデスゲームと言われるようになるソフトだ。俺はその世界に飛び込み、囚われた。ただ俺は歓喜した。あのくそつたれた現実と切り離され本当の意味で現実となったのだから。だが俺はここでも罪を重ねた。俺はあるギルドに所属していた。名は笑う棺桶^{ラフィン・コフィン}。最凶最悪の殺人ギルドだ。最初は知らずに入った。理由は単純、名前がかっこよかったから。ギルドの真の姿には入ってから気付いた。だが俺は当然なのかもしれないと思った。既に俺は人を殺しているのだから。俺に相応しいギルドだ。それでも人を殺す気には馴れなかった。俺はラフコフでありながら最前線で刀を振るった。誰とも関わりを持たずギルドでも浮き、ただひたすらモンスターを葬ってきた。

そんなある日、フィールドから帰る途中索敵スキルがプレイヤー反応を捉えた。数は四、何の気まぐれか様子を見に行つた。そこでは一人の白と赤の団服に身を包んだ少女

が三人のレッドに囲まれていた。少女は気丈に振る舞っていたがその細剣を人に向けてるのが怖がっていた。三人は颯り殺すぞと言いつつ合っていた。俺はその三人を見たことがあった。最初期のメンバーでありながら一度も殺しをしていない俺をバカにしていた奴らだ。対して強くもなくギルドの名に守られているだけの奴らだ、日頃から腹が立っていた。なにより何の罪の無い少女が目の前で殺されるのが気に食わなかった。だから俺は罪を重ねた。仮にも最前線で戦えるようなレベルに達しているのだ、三人をポリゴン片に変えるのは容易だった。俺は少女を一瞥するとその場から立ち去った。

それから一週間後にギルドの奴が攻略組がラフコフの討伐に乗り切つたと報告があった。Pohの奴は逆に返り討ちにしろとかなんとか言ってたな。俺は一度も殺しをしない奴は殺さない、そうザザとジョニーに伝え、俺はその場から立ち去った。殺しに来るかと思つたが如何せん実力差があるのでやめたようだ。それに俺には初めてこの世界で殺しをした際スキル欄に新しいスキルが出ていたのに気付いた。スキル名『暗殺術』、つくづく俺にぴつたりと思つた。俺の戦い方は卑怯に姿を見せず相手の死角に入り続け麻痺や毒のピックを使い弱らせ、一撃で決めるスタイル。相性が良すぎる。けど人相手には使わない。殺人者ではあるが殺人鬼にはなりたくなかった。

ラフコフ討伐戦当日、俺は奴らが潜むダンジョンの入り口で待つていた。やがて攻略組の面々が来た。先頭にはこの間助けた少女がいた。少女は目に見えて緊張していた。

俺はこう伝えた。『ばれている、気を付ける』それだけ言つて俺は立ち去つた。

一か月後、俺の元に一人の少年が来た。あつたと言つた方が正しいか。たまたまボス部屋の前であつたのだ。少年は何を考えているのか俺にお礼を述べやがつた。何でもあの時教えてくれなければ攻略組の被害はもつと大きかつたと。俺はその場から逃げないようにその場から立ち去つた。これが後に親友となる『キリト』との初めての対面だつた。

俺はそのあと何の神の悪戯か何度もキリトとあつた。その度にあいつは話しかけてきた。時にはあの時の少女、k o bのアスナともあつた。お礼がしたいと何度も言つてきた。その度に突き放した。ある日この三人があつた時アスナが訪ねてきた。『何故避けるのか』と。俺はこう答えた。『俺は人殺しだ、お前らみたいな綺麗な奴らという事はできない』するとキリトは『それは俺もだ』と言つた。耳を疑つた、どうやらあの討伐戦で仲間を助ける為に二人を殺したらしい。本来ならここで優しい言葉をかけるべきなのかもしれない。だが性根腐つた俺が言つたのは『それで殺したとかぬかすな』だつた。我ながら嫌気が差した。キリトは目を剥いた。それから顔が怒りに変わつていく。そこからは互いに怒鳴りあいだ。俺はそんな中で自分の過去と心を吐き出した。気付いたら涙を流していた。今まで溜め込んでいた全てを吐き出した。途中からは俺一人がしゃべつていた。

目が覚めた。どうやらあの後疲れて眠ってしまったらしい。子供かよと思った、恥ずかしい。周りを見渡すとキリトとアスナがいた。二人は俺に気づくとおはようと言ってくれた。初めて言われたと思った。キリトはあの後俺を安全地帯へと運んでくれたらしい。何でそんなことをしたのかと聞くと、「友達だから」と言った。俺は呆然としてしまった。”お互い本音を言い合ったんだ、心を晒したんだつたらもう友達だ”俺は泣いた。今までで一番泣いた。二人は俺が泣き止むまでずつと側にいてくれた。

あれから俺はキリトと共に行動をした。相性は正直とても良かった。キリトが引き付ける間に俺は敵の弱点を正確に攻撃していった。キリトの前では普通に『暗殺術』を使っている。驚いたのはキリトもユニークスキルを持つていたことだ。『二刀流』は派手なのでからかったりもした。俺は意外と人からかうのが好きなようだ。特にアスナの事だからかうと顔を真っ赤にするので面白い。

そんななかキリトとアスナが結婚したようだ。そこそこに長く二人を見てきた身としてはようやくかと言ったところだ。結婚祝いには溜めてたSランクの食材を3つあげた。二人とも口を半開きしたまま固まってしまった。ちなみにこつそりと写真を撮ってある。あとアスナの料理は三ツ星レストラン以上だと思う。料理出来る身からするとなんか悔しい。

俺は最前線では戦うが攻略には参加していない。人が多すぎる所は苦手だ。いつも

のように雑貨屋で冷やかしをしていると突然NPCが消えた。何かと周りを見渡すと空が赤く染まった。始まりの日を思い出す。そしてアナウンスが

ゲームはクリアされました：

アインクラッドが揺れた。天に手を掲げ喜んでいる。俺は即座に悟った。キリトがやったと。今の最前線は75層つまりまだまだあるはずなのだ。無茶無謀なアイツらしい。俺は現実世界でもあいつらに会えることを願いながら大切なものを見つけた世界から消滅した。

これが去年の話だ。

そして俺は今硝煙の匂い立ち込める世界に立っている。同じ罪を背負う、水色の髪のスナイパーの少女と肩を並べて：

オリ主プロフィール

名前

かんだ あらた
閑田 改

年齢 19

誕生日

11月11日

詳細

幼い頃から両親による虐待を受けながら育った。その時から他人に傷を見せないようにするために極力人と関わらないようにしていた為友好関係は極端に狭い（クラスでは空気レベル）。だがコミュニケーションという訳ではなく、話掛けられれば受け答えくらいはする。取り敢えず初期のキリトよりは全然大丈夫。小学六年の時両親が覚醒剤に手を出し錯乱、その際改を殺そうとするが極度の怒りによる脳の制限解除により返り討ちに。共に喉を果物ナイフで突き刺され絶命。改自身も筋繊維がズタズタになり回復に二週間かかった。その後突発的に制限が外れ他者に大怪我を負わせるようになってしまう。尚これに故意は無い。現在の里親は三回目て病により子を産めなくなってしまっ

る。改の過去を知っていてそれでも受け入れようとしているが、距離の取り方が分からず互いに嫌われていると勘違いしている。現在の義父はレクト本社幹部で結城家とも面識がある。特技は読心術と料理。趣味にサバゲーと少し変わっている？

アバターネーム

シン

容姿

肩甲骨辺りまでの白髪に紫色の目、コンバートによってM9000番台のもろ女の子な姿。身長は170。最近髪が鬱陶しいと言うことでもつぱらポニーテール。

スキル

コンバット ナイフ術 投擲 広範囲索敵

エクストラスキル

超消音 超隠密

ステータス

AGI—ACC—STR

7

2

1

(割合)

詳細

名前の由来は英語の罪による。ALOでアバターを取得したのちGGOにコンバートさせた。ALOにはカイという別アバターを残してある。GGOでの異名は影シャドウ、また彼をよく知るものは夜叉と呼ぶ（SAO時代の戦闘の際毒で苦しめながら一撃で葬る姿が正に悪鬼だった為）。戦闘スタイルは超高速移動での近接戦闘。速度は闇風を圧倒。常に相手の死角に入り音もなく近づき確実に急所に弾丸を叩き込む。また大振りのサイバルナイフも多用し相手はいつどこに攻撃を喰らったのか分からないまま倒される。非公式にGGO日本サーバー最強と噂されている。なぜ非公式かは本文中に。この世界での自慢は被弾回数ゼロとサイバルナイフのみでスコードロン1つ壊滅。使用している銃はスミス&ウエッソンのPC356。理由は一目惚れ。お金には困って無いのだがモンスターやプレイヤーをキルする度にレア物がドロップするほどの幸運体質。かつてその見た目から何回か告白を受けているが即座に断り、また告白した相手は二桁に上るほど謎のキルをされている。

GGO編

第一撃

おいおい聞いたかよ、今度のBobあの”シャドウ”がでるらしいぜ！

お前それマジか!?というか存在したんだな、てつきり噂の産物かと思ってたぜ。

俺もついこの間までそう思ってたさ、でもな実は俺……見ちゃったんだよ”シャドウ”を！

!?どこでだ教えてろ！

落ち着けよ、見たのは総督府のBobのエントリー受付だよ。フード被ってて分かりづらかったけどチラリと見えた顔から噂の容姿とピタリと合ったよ。

…どうだった？

…正直この世の美貌とは思えなかった…

ズリーぞ!!

………

………

………

「まさか見られていたとは……不覚」

明かりのついた少し狭いアパートの一室で少し長めの髪の青年は呟いた。全体的に細身だが弱々しさは感じない程度に体は鍛えられていて背もパツと見180はありそうだ。今青年は自前のパソコンの前でVRMMO“ガンゲイル・オンライン”の誰でも見れるコミュニティサイトを見ていた。そこには青年が操るアバターの目撃情報が書かれていた。青年が操るアバター“シン”はこのゲームの中では1つの都市伝説にまでなっていた。曰く誰も視界に捉える事は出来ない、曰くいつ殺られたのか気付かない程の早業、曰く1度も被弾したことは無い、等々真偽を疑うようなものばかりだ。

ーまつ、あながち間違っちゃないが。

恐ろしいのは噂のほとんどが事実ということだ。彼、閑田改はかつてデスゲーム“ソードアート・オンライン”で最前線に人知れず立ちその攻略に貢献していた。その時あった親友が付けた二つ名は“夜叉”。口では否定していたが内心気に入っていた。その二つ名通り彼は対モンスター戦、及び対人戦において圧倒的な強さと恐怖を持っていた。まさに悪鬼。その彼が忌避していた現実世界に戻り、リハビリを続け新たに始め

たのがアルブ Heim・オンライン、そしてガンゲイル・オンラインだ。最初は親友に誘われ以前のアバターを再取得しやっていた。しかしこのアバターは初めての親友を手に入れたアバターではあったが同時に罪に汚れたアバターでもあった。だから改は新しいきれいなアバター「カイ」をALLOに残しこの「シン」をGGOに移したのだった。その後この世界で暴れた結果都市伝説にまで昇華されたのだった。

「よし、今日も行くか」

改はパソコンを閉じアミュスフィアを被り合言葉を唱える。

「リンクスタート！」

その意識は銃声と硝煙の世界へと吸い込まれていった。

意識が低すぎるのではないか、私、朝田詩乃／シノンは今参加しているスコードロンに対して思っている。作戦前というのに緊張感のない会話、装備の点検すらしていない。元々次のBobの有力候補であるダインについて情報を得るために潜り込んだの

だが徒労だったかもしれない。

「おい、来たぞ」

「ようやくお出ましかい、貸せ」

私は愛銃ヘカートⅡのスコープを覗いた。

「確かにあいつらだが以前より一人多いな、補給兵か？まあいい、全員配置に着け」

ダインの言葉でメンバーが動き始める。

「シノン、動き始めたら俺達には奴等が見えなくなる、状況に変化があつたら知らせろ。

狙撃のタイミングは指示する」

「了解」

私はスコープに右目を当て移動中の七人を視界に入れる。

「にしてもあのマント野郎もしかして噂の《デスガン》じゃあ無いのか？」

メンバーの一人が微かに緊張の声で呟いた。

「ハッ、まさか。実在するかよ。第一死銃つてのは小柄のギリースーツ何だろ？あいつ

はどう見ても二メートルはありそうだ。バカ言つてないでさっさと配置につけ」

うーすと軽い返事が聞こえる。私はそれを意識から外した。集中力を高めながらダ

イン達が配置に着くのを待っていたその時、

「えっ？」

突然ターゲットの一人が身体をポリゴン片に姿を変えた。

「ツ!? ダイン緊急事態! ターゲットの一人が消滅、別のスコードロンがいる可能性あり!」

「何だと!? 現在の状況は!」

「全員が呆けているように見える、あつ! またやられた、今度は二人!」

「狙撃か? 射線は見えたか?」

「ダメ、見えない。でも…」

「でも何だ?」

「一瞬やられた二人の後ろに何か影のようなものが横切った気が…」

「影? ……まさか!」

「間違いねえ、アイツだ! 総員撤退! 今すぐ離脱しろ!」

「は? 何でグワツ!!」

「おい、ギンロウ!? くそ、もう見付かったか!」

「ちよつとダインどういう事!」

「聞いたことあるだろう」シャドウ「だよ! こつちから見えないがとくにターゲットトは全滅してるだろ!!」

私は慌ててスコープを覗いた。目に写ったのはターゲットが持っていた銃やアイテ

ムのみだった。

「うそ…」

「ちくしよ何でこんな時に…」

強すぎる、たったの1分で全滅させてしまった。しかも遠距離から全体が見渡せる私でも姿を捉えられなかった。しかも銃声も聴こえなかった。サプレッサーを着けているのかも知れないがそれでも一撃でHPを全損させるなんてどう考えても思い付かない。

「シャドウってマジかよ…姿を捉えられないんじゃないぞー！」

「だから逃げんだよ！」

「少しは戦おうと思わない訳？」

「戦う戦わないなんて問題じゃねえ！どうすれば少しでも長く生きられるかって問題なんだー！」

私はその言葉に腹が立った。いくら相手が圧倒的だからって少しも抗おうとしないことに。

「じゃあどうせ死ぬんだったら少しでも抗って意地見せてから死にやがれ!!」

私の鬼気迫る声に無線の向こうから息を飲む音がした。

「ダインは周囲に弾丸ばら蒔いてシャドウの行動範囲を狭めて、私が必ず捉える」

「お、おう了解…」

残りのメンバーも口々に了解と返してきた。既にこっちは私を含めて四人、三人はほぼ正三角形の陣形で待機している。一人一人の間隔はおよそ100メートル、ダインの撤退指示のあとすぐに動いたのだろう。おそらくシャドウは三人から等間隔の位置、つまり三角形の中心にいるはず。本来なら袋叩きの位置だがさっきの感じからして常に相手のど真ん中に立つようになっているのだろう。ならば…

「全員自分を中心に円を描くように撃て!!」

直後三人が立ち上がり時計回りに弾丸をばら蒔く。その瞬間予想した位置から1つのスタングレネードと2発の弾丸が三人を襲った。異常な命中精度だ。正確に二人の頭を貫いていた。あっちからは死角で見えることは出来なかっただろうが私からはかろうじて場所が読めた。私はその瓦礫の向こうにいるはずのシャドウに必殺の弾丸を放った。強烈な反動、稲光のようなマズルフラッシュ、そして音速を超える弾丸は寸分違わず狙った場所に大穴を空けた。

「どっただ!!?」

だがいくら待ってもアバターの四散する様子が見えない。

「まさか外した?」

私はスコープから目を離し顔を上げる。その瞬間私の目の前には一本のピックが

迫っていた。

「どこから!？」

ピックは頭を貫いた。人が投げたとは思えない威力だ。だがやはり銃には劣る。HPは数ドット残し止まった。私は慌てて体を起こそうとするが体が動かない。ステータスを見ると

「麻痺?! そんなのを使うプレイヤーがいるの!？」

この世界では敵の行動を縛るにはスタングレネードか電磁スタン弾が主流だ。その際のバッドステータスはスタン、回復手立ては時間経過による解除しかないのでよく使われている。しかし麻痺は近接系の武器、ナイフなどでしか付随しないので使う人はほとんどいない。今見たいにピックや投げナイフなどもあるがそれを使う前に銃で撃つ方が圧倒的に早いのでこれも使う人はほとんどいない。

「ちく…:しょう」

ポーチに念のためと解毒薬を入れてあるが手がノロノロとしか動かない。手を必死に動かしていると目の前に足が見えた。目だけでその人物の顔を見る。パーカーのような服で隠されているがその顔は

この世のものとは思えないような美少女だった。

シノンには半ば放心した。凜々しい顔立ちだがそのどこか守ってあげたくなくなるような愛嬌を感じる。十人いれば十人が美少女と言うだろう。その美少女はおもむろに手を出し中指と親指で輪っかを作り力を込めた。そしてそのまま「デコピン」をした。ピッ！と音が鳴り残り数ドットだったHPを削りきった。

ー私の最期がデコピンって…

シノンはそのままアバターを四散させた。

ーイヤー、危なかったわ。

つい先ほどスコードロン2つを被弾しないで壊滅させたシンは一人心で呟いた。

「まさか居場所がこうも簡単に割れるとは、キリト以来だな。」

おそらく最後の銃撃戦で指示を出していたのはさっきの少女だろう。この位置で場所を予測しなければさっきのような作戦は立てられない。実際あの瞬間俺は焦って止まった状態で攻撃をしてしまった。直後に殺気を感じて体を仰け反らしたのだ。一瞬遅れていたら今頃SBCグロツケンで蘇生していただろう。あのあとすぐに移動して姿が見えたから麻痺毒付きのピックを放って追撃を防いだ。

「着いたら女の子で驚いたよ。とりあえずナイフで止めは可哀想だったからデコピンで終わらせたけどまさかライフルがドロップしてしまうとは。何かすごく大事そうにしてたな。あつちで会ったら返すか。今回中々良いのがドロップしたから満足だし。にしてもあの子気になるな。あの目……」

まるで昔の俺だ。

第二撃

私は現在絶望の淵にいた。理由は簡単だ。1時間前、私は次のBobの有力候補ダインの情報を得る為彼のスコードロンに潜っていた。今回の彼らのターゲットはモンスター狩り専門スコードロン。待ち伏せからの襲撃とニュービーでも出来るような幼稚な作戦だ。内心軽い失望と呆れていたのだがいざ作戦開始というときターゲットがいきなり殺られたのだ。そこからは正に地獄。ターゲットは全滅、こっちのスコードロンも即座に殺られた。私は生き残った三人のメンバーと共にその襲撃犯に一矢報いようと戦ったのだが呆気なく三人が殺られ、私も追い詰められしかも最後にデコピンで終わらせられたのだ。いや、ここまでは良い。負けたのなら反省して次に活かせば良いのだから。最悪なのは

私の半身である愛銃、ヘカートIIがドロップとして相手に獲られてしまったのだ。

SBCグロツケンで蘇生してその事を知ったとき私は目の前が真っ暗になってし

まった。もうこの世の終わりかと本気で思っていた。そして今私はGGO内の酒場にてカウンターに突っ伏しながら最後の希望であるオークションを覗いていた。あれだけレアな銃なのだ、オークションに出される可能性が高いと思い既に一時間。…全く見付からない。

「フ、フフフフフ……」

もう私は強くなれないのかもしれない、一生過去に怯え続けるのだ。その時私の肩が叩かれた。

さて、さっきの女の子を探しているのだが全く見付からない。あのあと俺の出せる最高速でグロツケンに戻ったのだがその子とはとくにそこから離れていた。それからこれこれ一時間、人混みが苦手な俺にはそろそろ限界である。この酒場で最後にしようと思えば扉をくぐると妙に店内の雰囲気がいまいち暗いと感じた。心なしか客も異常に少ない。この時間帯はまだまだ潜っている人が多く賑わっているはずなのだが…そう思い店内を見渡すと一番奥のカウンターにその、なんというか…そこだけ奈落のような場所があった。

そしてそこにいたのは

「あつ、いた」

その子のあまりの落ち込みように物凄く罪悪感に苛まれながら近付いていき肩を叩いた。その水色の髪の子はゾンビのようにゆっくりと振り返った。

「あんた1時間前にスコードロンを襲おうとしただろ」

その子はフードに隠れた俺の顔を見ると目を見開き勢いよく立ち上がった。

「あ、あんた…あの時の！」

おお、すごい睨まれとる。

「返しなさい私の「返すよ、ほら」へカートをとってへっ？」

俺はメニューを開きそのへカートとやらを実体化させ渡した。その子はいきなり現れた恐ろしく長いライフルを空中でキャッチした。

「えっと…なんで？」

その顔は信じられないと如実に表していた。

「何だ、返して欲しくなかったのか？」

「そうじゃなくて！なんで返してくれたのかって事!!」

「…君が本気でその銃と強くなろうとしていたから」

「……」

「それと君の目が気になったから」

「目？」

「…気にするな、それじゃあ返したぞ」

俺はその場から立ち去ろうと踵を返した。

「ツ！待ちなさいよ！」

「…なんだ？」

「このままじゃ私の気が済まない、何か奢らせなさい！」

「…別にいいんだが」

「私が良くないのよ！」

これはめんどくさい事になったな…こういう時は素直に従うか。

「分かったよ、ご馳走になろう」

「そうして」

俺はカウンターのその子の隣に座った。ふとこの子を困らせて見ようと思った。直感でからかったりしたら面白いだろうなと思ったのだ。

「好きなの頼んで良いわよ」

「それじゃあ…」

俺はお店のメニュー画面の上から一番下までなぞった。

「はあ!? あ、あんた全部食べる気!?!」

「好きなの頼んで良いんだろ?」

「言ったけど普通相手の事を考えないの!?!」

「大丈夫だ、全部食える」

「そういう事じゃない! てか人間なのあんた!?!」

「これは思ったより良いぞ、クライン並みにからかいやすい。俺の隣で彼女は「ここ安さが売りだけど払えるかしら…」と呟いていた。

「別に良いよ、半分払うから」

「はっ? それじゃあ…」

「じゃあ払えるの?」

「……」

彼女は沈黙してしまった!

「代わりにあんたの名前を教えてください」

「…シノンよ」

一瞬教えるのを躊躇ったな。

「ねえ、あなたって噂のシャドウなの?」

俺は出された料理を口に含みながら頷き返した。

「そ、そう……」

どうやら俺の食べっぴりに少し引いているようだ。

「……一つ聞きたいんだけど」

「……ングッ、何？」

「あなたはどうかやってその強さを手に入れたの？」

「……強くはないぞ、確かに技術は周りより優れてるだろうけど」

「嘘」

俺はシノンを見返した。その目にはさすがる様な色が宿っている。その奥にはかつて俺も抱えていた、今も取り除けていない果てしない恐怖が宿っていた。

「……自分で考えろ」

「教えてよ！私はそれを手にするために……」

「なら聞くぞ、君は目の前で自分の知る人、もしくは大切な人が、自分が殺されかけていたら君は迷いなく引き金を引けるか？」

知っているのか？私はそう思い呼吸を忘れた。自分のあの血に濡れた忌々しい過去を知っていて聞いて聞いているのかと。

「その答えを出せたら教えてやるよ、ご馳走さま」

「えっ、あ…」

私はカウンターを見た。：優に一メートルを超える皿の柱が2つ。

ー本当に食べたのか…

「そうだ、ネームカードくれよ」

「えっ？うん…」

私はメニューからネームカードを選択し彼女に渡した。

「ん、ほら」

彼女もネームカードを渡してきた。

「基本木金土に潜ってる。用があるなら連絡しろ、じゃあな」

「あつ、ちよつと待って…」

彼女はそのままログアウトしてしまった。

私は伸ばした手を下げ手の中のネームカードを見た。

「……えっ？」

ー口が悪いなどは思ってたけど…

「あ、あれで男なの…?」

私は呆然としながら名前を見た。 sin:罪。

目を開ける、一つ大きな伸びをして立ち上がり冷蔵庫から作ってあったハンバーグを温め、お茶を含む。

「ふう…」

「なんなんだろうな、俺があいつら以外にこんなに話すなんて、というか関わるなんて。」

俺は自分自身驚いていた。俺を救ってくれたあいつらならともかく今日初めてあった、それも敵だった奴にここまで関心を持ったことに。

「それに何故か初めてあった気がしない…」

「あつ、そういやトイレットパーパーなかった」

しょうがないから食べた後買いに行くか。俺はさつさとハンバーグを食べ終え冬の寒空の下へ出た。三年前から暮らしているアパートを降りる。ふと隣の部屋の表札を

見た。手書きらしい字を横目で。

”朝田”

第三撃

ここはかつてリアルデスゲーム、SAOに囚われ本来の学業を全う出来なかった子供たちが通うSAO生還者サブイパーの為の学校。俺は現在こここの高校2年のクラスに通っている。最も既に俺は大学でやる範囲まで終わらせているが。

「おーい、改ー!」

俺は声の方を見た。中庭を挟んだ向かい側に俺の恩人にして親友、桐ヶ谷和人がいた。

「珍しいな和人、お前が呼び出すなんて」

「このあとここで明日奈と昼食べる予定なんだよ」

「なるほどつまり自分達のイチチャラブを見せ付ける為に呼んだと」

「ち、ちげえよ!」

「赤くなるな赤くなるな。お前らの夫婦っぷりは既に学校全体が知ってるから」

「だからそうじゃなくて!最近どうなのか気になったのと予定を聞きに来たんだよ」

最近どうなのか辺りから俺は顔をからかいの笑顔から心配してくれた親友へと向ける笑顔に変えた。

「安心しろ、今のところちゃんど制御出来るよ」

俺は七年前のあの日から脳が体に掛けている制限を無意識に外してしまう状態になっていた。お陰で日常の何気無い動作でも物を壊したり、人を傷付けてしまっていた。中学三年間丸々使つてある程度抑制出来るようにはなっていたのだが、あの世界に囚われてから悪化して瞬発的に限界を超えた力を出せていたのだが、その後その部位がしばらく動かせなくなるようになっていた。これも自分の意思で出来るならいいが無意識なので必要の無い時にやってしまったりして結果的に何度も死にかけて。現実世界に戻った後俺は再び制御する訓練を今現在も続けている。

「そうか、良かったな。それでもう一つの方なんだが…」

「予定が空いてるかかって話だったよな、何があるんだ？」

「あー…その」

「何だよ、ハッキリ言えよ」

「…菊岡から俺とお前に日曜日時間があるか聞かれたんだよ」

「あー…」

菊岡とやらは和人が目を覚ました時一番最初に会いに行つた総務省仮想課の人間らしい。和人が俺に連絡をくれたときこいつから聞いたらしい。そしてそれから度々俺と和人は呼び出され厄介事に巻き込まれていた。

「今度は何だって？」

「あることについて話合いたいだって」

「あること？」

「来てからのお楽しみだと、どうせ仮想世界の事件について聞きたい事があるんだろ」

「…それで俺もか」

「あ…すまん…」

「気にすんな。了解、その日は空いちまつてるからな…することも珍しく無いし。場所は後で送ってくれ」

「ああ、分かった」

「それじゃあ二人のリア充空間を満喫してきな」

「何だよそれ！」

最後にからかう事も忘れない。

その日の帰り道、近所の安いスーパーの特売のチラシを片手に向かってしていると路地裏から複数の女子の声が聞こえた。どこか聞き覚えがあるのでそこに行ってみると三人

のなんとも遊んでますよ的な女子が同じ制服を着た一人の女子を囲んでいた。

―あいつら確か…

俺は少し記憶の引き出しを引っ張りそれを探した。

―ああ、そうだ。五月に隣で耳障りに騒いでいた奴等だ。ということは囲まれているのはお隣さんの朝田さんか。

今年の五月、春に隣に引っ越してきた一人の女の子がいた。高校生で一人暮らしは中々珍しいので先駆者としてなにかあったら訪ねて良いと言つてあつた。しばらくしてお隣が賑やかになったので友達でも出来たのかと思つていたが更に少しして男の聲が聞こえてきたのだ。これは明らかにおかしいと思つているとそのお隣さんが訪ねてきて

「知らない人が入り浸つていて困つてる」

―と言つてきたので警察を呼んでこれ以上騒ぐなら訴えると言ひ強制退去させた。その時男と一緒に騒いでいた女三人だ。

―これ以上は流石にまずいか…

リーダー格らしき女子が背中の方で手を銃の形にしていた。朝田さんが銃に対して精神的ストレス障害を持っているのは知つている。強制退去させた時ほとぼり冷めるまで俺の部屋に入つてると言つた際全てを終え戻ると床に倒れていたので物凄く焦つ

たのだ。目を覚ましてから事情を聴くと趣味としてやっているサバゲーで使う電動ガンを見て発作を起こしたらしい。物凄く謝られたが知らなかったとは言えこちらの落ち度なので気にしなくて良いと言って帰らした。

「なにやってんだ」

俺はリーダー格の女子の後ろに回した手を掴みそう言った。

「ああん？ツ！」

どうやらあつちも覚えていたようだ。

「てめえ…」

「なにやってんだと聞いている」

「あんたには関係無いだろう！さっさと手を離せ！」

「悪いが警察を呼んだのでな、到着するまで待つてもらおうと思っている」

そう言うのと無理矢理俺の手を振りほどき盛大に舌打ちしてから逃げて行った。

「…大丈夫か？」

「は、はい…ありがとうございます」

「やりたくてやっただけだ。礼は良いよ」

幸い銃の形を作った手は見えてなかったようだ。

「家まで送るか？」

「あ、いえ。夕飯の材料買わなきゃいけないので……」

「そうか、なら丁度いいな。俺も本当は買いに行くところだったんだ、つとここまでいくと馴れ馴れしいかな?」

「正直言うと少し……」

「そうか、ならその彼にお願いしようかな?」

「え?」

俺がそういうと建物の影から細身の少年が出てきた。

「し、新川君!」

「やあ朝田さん、それにしてもよく分かりましたね」

「俺が出てきた時そこで見てただろ? どう出て行くかうか悩んでるようだったからな、もたついている余裕も無いから先に行かせてもらった。知り合いだろ?」

「はい、友達です」

「そうか、なら後は頼んだよ。報復が無いとは限らないからね」

俺はその新川君とやらに後を任せその場を後にした。道中自分は知人にはおせっかいを焼きやすいなどと新たに気付いた自分の一面について考えていた。

—また助けられたな、情けない…

私はお隣の閑田さんにまた助けられた自分に腹が立っていた。このぐらいの事を自分で対処できなければ過去に打ち勝つ事など出来はしない。

「朝田さん今の人は？」

「え？ああ、お隣の閑田さん。来たばかりの時に今通ってるスーパーとか教えてくれたの」

「そうなんだ…」

なんだろう、今新川君の目が鋭くなったような…

「それよりも朝田さん買い物の後時間ある？この間のスコードロンの話聞かせてほしいんだ。」

「あ…良いわよ、でも買い物付き合ってね」

「もちろん！」

朝田さんの買い物に付き合った後人が少ない喫茶店に入った。

「それでどうなったの？ やっぱり圧勝？」

「ううん、それがね……全滅したの。ターゲットも私達も」

は？ どういうことなのだろうか？ 朝田さんは僕の後から始めたにも関わらずメキメキと実力を身に着け今ではGGO最強の女スナイパーとしてそこそこの知名度がある。その朝田さんが負けたというのは僕にとってかなりの衝撃だった。

「えつと……それは相撃ちって事？ スコードロンのメンバーがミスでもしたの？」

「違うわ、確かにあいつらは調べるにも値しなかったけど……私達も相手も一人のプレイヤーに全滅させられたの」

「はあ!？」

スコードロン二つ、仮に片方が対モンスター専用スコードロンとしても全滅なんて絶対に無理だ。

「しかもそいつは一回も被弾してないのよ」

もう僕は声も出ない。

「じよ、冗談だよね……？」

そう言う朝田さんは本当に悔しそうに顔を歪めた。

「…本場の事なのか…」

「な、何者なの…?」

「…シヤドウって聞いたことある?」

「え…そりやもちろん、相手がいつやられたのか分からないほどの早業、そして誰もはつきりとその姿を見た人はいない。あまりの速さに影が通るように見える事からその名がついた生きた都市伝説!僕達A G I特化プレイヤーの憧れだよ!」

おっとつい熱くなつてしまった、朝田さんが若干引いてる。

「ん?この話を出すつてことは…」

「もしかしてシヤドウにやられたの…?」

朝田さんはこくと頷いた。

「か、顔見た!」

僕はつい乗り出してしまふ。

「え、ええ」

「どうだった!」

「…正直この世の理不尽を呪ったわ…」

あ、朝田さんが遠い顔をしている…噂ではものすごい美少女とされているがどうやら本場の様だ。

「いいなく、僕も見なかったよ」

「…会う？」

「え？」

会うとはどういう事だろうか？よく出るところでも見つけたのだろうか？

「実はあの後グロッケン¹の酒場であったのよ。それでネームカードを交換したの」

「ほ、本当!?すごいや!ぜひ!ぜひお願いします!」

僕はもう興奮を抑えられなかった。抑えられるはずもない。あのシャドウに会えるのだ、聞きたいことは沢山ある。

「わ、分かったわ、じゃあ次の木曜日だね」

「了解しました!」

もう楽しみすぎてしばらく寝れそうにないや!

あのあと私は新川君と別れ帰宅した。鍵を開けた時丁度閑田さんが隣の部屋から出てきた。

「あつ、閑田さん。バイトですか？」

「ん？ああそうだよ。勤労学生は大変だかね」

「分かります。ご苦勞様です」

「朝田さん、ご苦勞様は目上の方が使う言葉だ、俺は気にしないけど人によつちや氣分を害すから氣を付けなよ」

「…ご忠告ありがとうございます」

「ところであのあと何も無かつたかい？」

「はい、大丈夫でした」

「なら良いけど…君はもう少し周りに頼つたほうが良いぞ」

「…あれくらいは自分で出来る位に強くならなきゃいけないんです」

「何でそんなにこだわるのかは分からないが焦つても良いことないぞ、まあ俺も二年位前はそうだったけど…」

後半、閑田さんが言つたことは小さくて聞こえなかつたけど余計なお世話だと思つた。助けてもらつたりしたがいくらなんでもそこまで首を突つ込まなくても良いと思う。私は若干ムツとしながら言つた。

「大丈夫です、何でそこまで心配するんですか？」

「…君が昔の俺に似ているからかな」

「…あなたも昔なにかあつたんですか？」

「さあどうだろうね、気が向いて君が聞きたいなら話すよ」

そう言つて彼は私の横を通つていった。

「あつ、そうだ」

突然こちらを振り向き言つた。

「君の友好関係に口出しするつもりは無いけど……さっきの彼、気を付けた方がよいよ」

「え？」

「彼の目、危険な色があつたから」

それだけ言つて彼はバイトに向かつた。私はどういふ事かと思つたがあまり考えず部屋の中に入つていった。

第四撃

今日は和人に言われた日曜日だ。だが俺は予定より五分ほど遅れている。

「まさか目覚ましの電池が切れていたとは…」

本来ならゆっくりとしてから行くつもりで一時間前にセットしてあったのだが見事に寝坊、朝飯も食わず急いで向かっている。どうせ菊岡の事なので「呼び出した代わりに俺が驕るよ」とか言うに決まっている。その時は遠慮なく食べさせてもらおう。そして俺は高級そうな喫茶店についた。

「なんで話すだけでこんな所に呼び出すかな…」

ドアをくぐる。即座に完璧とも言えるような店員さんが対応してくる。凄いと思う反面、苦手だなあと身構えてしまう。

「おーい！シン君こっちこっち！」

「あのバカ…」

隣のおば様方が睨み利かせてんじゃねえか。ついでに和人も。

「わりいな、和人」

「珍しいなお前が遅刻なんて」

「目覚ましの電池が切れててな…」

「…なんでお前はゲーム中じゃ超が付くほどに幸運なのに現実じゃ地味に不幸なんだ？」

「言うな、虚しい」

「ねえ僕は置き去りかい？」

おつとそういやいたな。

「ああすまん。で、なんだっけ？何故高級官僚は信用されないかだったか？」

「それは僕に対する当てつけかな？」

「言ってるやんなよ改、高級官僚しかネームバリューが無いんだからさ。可哀想だろ？」

「…泣いていいかい？」

いい歳した大人が泣くとか気持ち悪さしかないぞ。

「で、好きなの頼んで良いんだよな？」

「無視した挙句言う言葉はそれかあ…ってそれは勘弁してくれ！全財産が吹き飛んでしまおう！」

「ははは何言ってるんですか菊岡さん、高級官僚ならこれぐらい払えなきや。どうせ国民の血税巻き上げてんだろ？」

「改、それもう言った」

「む、まじか」

「だからってメニュー全てを頼もうとする君はどうなんだい！」

「税は国民に戻ってくるべきだろ？」

「僕も国民だからね!？」

「ちつ、しょうが無いから十個にしといてやるよ」

「……このカード大丈夫だよな？」

信用は出来ないがやっぱりこの人いじるには最高だな、クライン以上だ。

「こんな事できるのはお前だけだよ」

お前はエスパーか？

「エスパーじゃない」

……エスパーじゃん。

「それでこんな話の為に俺達を呼んだんじゃないんだろ、菊岡さん」

「話を逸らしまくったのはそつちというのを忘れないようにね……そうだね、じゃあ早速本題に入ろうか」

菊岡は手を組み真剣な顔をする。

「君たち二人は仮想世界での現象が現実世界のプレイヤーの心臓を止める事が可能だと思ukai？」

俺と和人は二人して口を閉ざす。

「大分遠回りしたが今回の本題はこれなんだ」

「…どんな事件があった」

俺は気を張り詰め菊岡に問う。あの事件から俺は人命にかかわることに敏感になっ
ている。

「話が早くて助かるよ。先月十一月十四日、東京都中野区のアパートで掃除をしていた
大家がある一室から異臭がするのに気が付いた。インターホンを鳴らしても返事が無
いので電子ロックを解錠して中に入った。そこでこの男：茂村保二十六才が死んで
のを発見した。死後五日半でベッドに横たわり…」

「アミユスフィアを被っていた…か？」

俺と和人は菊岡にその男が載っているタブレットを渡された。

「その通り。変死ということで司法解剖が行われて急性心不全となっている」

「心不全？ ってのは心臓が止まったって事だろ？ なんで止まったんだ？」

和人が質問をする。そこは俺も気になっていた。

「解らない」

「……………」

「頼むからジト目で見ないでくれ」

おっと、つい何時もの反応で返しちまった。とりあえず俺はその茂村保氏に対して目を瞑り冥福を祈った。

「彼はどうかやらほぼ二日間何も食べないでプレイしていたらしい」

和人も同じ様に冥福を祈っていた。やがて口を開く。

「…確かに悲惨な話だけど…」

「ああ、でも珍しくは無いだろ？」

「そうだね、今やよくある話だ。こういう変死はニュースにはならないし、家族もゲームをしていて死んだなんて話さないから統計も取れない。これもある意味ではVRMMOによる死の侵食だが…」

「一般論はいい、何があるんだ？」

菊岡はチラリと端末を一瞥する。

「彼のアミューズフィアにインストールされたのは一タイトル、”ガンゲイル・オンライン”…知ってるかい？」

「そりやもちろん。日本で唯一プロがいるゲームだし、なにより…」

「俺もそのゲームのプレイヤーだ…なるほどな、あの噂関連か」

そう言うと菊岡は目を見開く。

「驚いたな、君がああゲームをやってるなんて。ALOよりずっと殺伐としてるんじゃない

ないか?」

「…まあな。そのぶん忘れにくくて済む」

そう言うのと和人は苦い顔をする。俺は和人をチラリと見て大丈夫だと目配りをする。

「それで、その保氏のキャラクター名は?」

「ゼクシード。知ってるだろ?」

「当然、前回のBobの優勝者だ」

「…俺だけ話が見えて来ないんだが」

しまった、菊岡と二人で進めてしまった。これではこいつが調子に乗ってしまう。

「今失礼な事を考えなかつたかい?」

「常にお前に対しては考えているが?」

「…もう隠す気も無いね」

何を当たり前な事を話しているのだろうか? まあそれはどうでもいいとして…

「ガンゲイル・オンライン…GGOって呼ぶな、GGOには今奇妙な噂があるんだ」

「奇妙な噂?」

「前のMストでゲストが落ちて番組中断ってあつただろ?」

「ああ、あれか」

「そう、それでその時GGOの首都であるSBCグロッケン酒場で変な事をしたプレ

イヤーがいたらしい」

「変な事？」

「何でも酒場のテレビに向かつて裁きを受けろ、死ねとか叫んで銃を撃つたらしい」

「…客観的に見れば意味無いよな、それ」

「そうだね、でも同一人物でもう一件あるんだ」

「何？」

「……」

菊岡が横から俺の言いたいことをかっ拐っていった。その目には仕返しだという色が見える。腹立たしい。

「今度は十日前にスコードロン…ギルドの事らしいね、その集会中にリーダーである…薄塩たらこ？合ってるのかなこれ」

「ちゃんとGGO最大のスコードロンのリーダーだよ」

「SAOに北海いくらつていたから親戚かもな」

「まあその薄塩たらこ氏が集会で激を飛ばしてる時に乱入して突然撃つたらしい。圈内で、だよ」

「もちろんノーダメ、でも」

「数秒後に落ちた。そして現実でも」

「ほぼ同時刻に死んでいた、と」

その場の空気が少し重くなる。

「偶然だろ」

「僕もそう思うよ、9割方ね。でも出来ないとは言いつれないかも知れないだろう？」

「…アミユスフィアは微弱な電気信号しか出せない、脳も焼き切れないしましてや心不全なんて無理だ」

「いや、でももしかしたら本当に弾丸が飛び出て撃ち抜いたかもしれないじゃないか」

「ありえねえよ！」

「…というか何でお前らはゲームの中限定で話してんだ？」

「え？」

「どういう事だい？」

二人は俺の発言に首を傾げた。

「和人、『人形殺人』って覚えてるか？」

「あ、ああ」

「なんだいその『人形殺人』というのは」

「昔SAOの中にあつた殺人事件の事だ。あるプレイヤーが突然衆人達の前で”この人形は本人と繋がっている、これを消滅させれば実際に死ぬ”って言ってその場で人形の

耐久値をゼロにさせたんだ。面白がって何人かが生命の碑を見に行くとその日の丁度その時間に本当に死んでいたってやつだ。そいつはその後パタリと姿を消したから特に広がる事もなく一部の人のみに記憶された」

「その人はどうなったんだい？」

「…そいつうちのギルドのメンバーでな、ジョニーが新しい新武器を試すつて殺した」

「……」

この話は俺の闇の1つだ。聞いていたのにその時既に俺はギルドメンバーを殺していたから何の説得も出来なかった。いや、しなかった。何も言うことは出来ないし勝手に思い行動に移さなかったのだ。

「改…」

「ツと濟まない、ぼーっとしてた」

「無理すんなよ」

「してないさ、それに…お前こそ顔色悪いぞ。討伐戦を思い出したか？」

「!!」

「凶星か」

和人もかつてのラフコフ討伐戦の際仲間を助ける為に二人手を掛けていた。こいつは酷く自分を責めているが俺自身は仕方がない事だと思っている。殺らなきゃ殺られ

ていた、それにあいつらは殺されてもしょうがない人間だ。一つ言える事があれば”済まない”だ。あの討伐戦は俺が一人でやるべきだった。来ると分かっていた、そして攻略組には攻略をしておけさせれば良かった。そうすればこいつがこんなに苦しむ事も……

「…済まなかった、嫌なことを思い出させたね」

菊岡が突然謝罪する。俺と和人は呆気にとられるがすぐに示し合わせた様に……

「全くだ、これはケーキを追加しないと割りに合わないな」

「すいませーん！メニユー追加したいんですけどー」

「悪いと思って謝ったのになんだいこの仕打ち!？」

俺と和人は二人して笑う。目の前では菊岡が頭を押さえる。本当に足りるかなあ”とボヤいていた。

「それで、その話が今回の話にどう繋がるんだい？」

「ああ、この事件のトリックは二人一組でやってたんだ。時間を予め決め決めといて片方が人形を壊すと同時に相手を殺すって具合にな。もしかしたら今回のもそうかも知れないと思ってる」

「つまり二人の犯行と……」

「まあ二人とは限らないけどな、それと外傷は無かったんだよな？ だったら薬物の可能

性が高い、細い注射器何か使えば分かりにくいだろうし」

「でもどうやって住所を割り当てたんだ？オンラインゲーム関係はそういうのにスゴク厳しいし」

「この二人はどっちもBob…最強決定戦に出たことがある。そしてその参加の際に賞品の受け取り関係で住所を入力するところがあるんだよ」

「現実での賞品があるのか？」

和人も菊岡も驚いていた。確かにネットゲームで現実の賞品があるというのはとても珍しい。

「ゲームでのアイテムと選択出来るけどな。でも住所を見るには接近するしかないしか」といって接近したらそいつ以外見れなくなるんだよな…」

「ふむ…それはこちらでもう少し調べてみるよ。」

「そうか。で、これで全部か？」

「最後にもう一つ」

…何だろ嫌な予感しかしない。

「二人にはこのプレイヤーに接触してもらいたいんだ」

はいの中一

「接触ねえ…はつきり言ったらどうだ菊岡さん、撃たれてこいつて事だろ？」

「ははは、うんまあ」

「嫌だよ！さつき改が危険性を示唆したばっかじゃないか！あんたが撃たれてろ心臓卜マレ」

「もしシン君が言つてたことが当たっていたら撃たれるって事は犯人がその場に居るって事じゃないか、そうすれば捕まえられるんだよ」

「例え捕まったとしてもこつちが死んだら本末転倒じゃないか！明日奈を残して死ぬなんて絶対嫌だぞ！」

「あつ、さりと惚けやがったコイツ」

「全くだね、羨ましい」

「話をずらすな！」

今のはお前が悪いぞ。

「てか何で改は反応が無いんだよ！」

「俺もう奴が出るであろうBobにエントリーしてるしもう遅いと思つて。それに流石にタダでやらせる訳じゃないだろ菊岡」

「もちろん、このGGOのトッププレイヤーが稼ぐであろう金額を報酬にするよ。ーこれくらいね」

そう言つて菊岡は指を3本立てた。これは三千元でも三万円でもなく、三十万円であ

る。

「それはもちろん一人にとって事だよな」

「え？」

菊岡が固まる。やっぱりかこのやろう。

「こちとら命掛けるんだ、そんなセコイことしないよな高級官僚様よ」

俺は思いつきり良い笑顔を作った。

「……分かったよ……」

「よろしい。という訳で和人、どうだ？」

「分かったよ……但し安全は確保しろよ」

「それは分かっている。そこは僕が責任を取って信頼出来る人と場所を提供させてもらう」

「なら良いよ」

「よし、これで話は全部か？なら帰らせてもらうぞ。ご馳走さま」

「ああ、呼び出して悪かったね」

「そう思うんだつたらこんな危険な事させんなよ。じゃあな」

「あ！待てよ改！」

俺は菊岡を残しその店を出た。途中背後で「嘘だろ!？」と聞こえたが気のせいだな。

「なあ改」

「うん？なんだ？」

「あの仕事を受けた本当の理由、何なんだ？」

「…気付いてやがったか」

確かにあの店で言ったのはほとんど建前だ。本音はもつと重い。

「聞いてどうする？」

「……」

「…分かったよ、降参だ」

今コイツの目撃らなかつたらぶん殴るって言ってたぞ。

「…はじめをつける為だよ」

「はじめ？」

「考えてみる、今回の件明らかに『人形殺人』に似ている。発案者は死んでるが誰か知っててもおかしくない。…ギルドメンバーならな」

「！それって…」

「恐らく犯人はラフコフの生き残りだ」

「……」

「あのギルドの最古参としてけじめはしっかりと取る。最後にはP o hを捕まえてやる
さ」

「お前…」

「止めるなよ」

「！」

「これは俺のせめてもの償いだ。罪は消えないが俺は立ち向かう」

「…無茶はするなよ」

「互いにな、それにいざとなったらお前らを頼るさ」親友」

「…ああ、任せろ！」

俺達は笑いあって互いの拳を合わせた。

「そう言えばそのプレイヤーの名前なんていうんだ？」
「そーいや言つて無かつたな。そいつの名前は…」

死銃…デス・ガン

第五擊

菊岡からの仕事の依頼のあと和人は明日奈とデートだとかで皇居に向かつていった。GGOにログインするのは明後日と言っていたのでその間にこちらでも準備を進めておこう。そして和人がいるときに頼めなかった事を話すために俺は菊岡に電話をした。コール二回で繋がる。

『もしもし?どうしたんだい?』

…何故だか幾分か声が沈んでいる気がする、だが気にしない!

「少し頼みたい事があつてな」

『キリト君がいるときに話せなかつたのかい?』

「あいつがいるときに話せば確実に止められるからな」

『…どんな危険な事かな?』

「なに、大したことないさ。ただ俺が困になるだけだ」

『…つまりこちらで用意した場所からでは無く、既に知られてるかもしれない君の自宅からログインすると?』

「話の早いあんたは好感持てるぜ」

『そんな危ない事をさせると思うかい?』

「ついさつき俺達に撃たれろって言つてた奴の言葉とは思えないな」

『分かつてるのかい? 君は自ら、それも僕の様な冗談じゃなく死に行こうとしてるんだよ?』

「俺の命であいつらの安全を確保できんなら本望だな」

『改君!』

「耳元で騒ぐなよ、鼓膜破れるだろうが」

『こつちは真面目だ!』

「こつちも真面目だよ」

菊岡は激しく、俺は淡々と、だが互いに譲らない。菊岡にも譲れない一線というものがあるのだろう、それはおそらく民間人の安全、さらに言えば罪ない人々の安全だろう。だから真つ先にSAOの対策本部を作つたのだろう。だがこれが罪の無い人々と言うならそれは俺には当てはまらない。だからこそ俺も譲らない。俺は受け入れ、前に進む事が出来るようになったとしても無かつたことにされる訳にはいかない。

『…どうしてもかい?』

「どうしてもだ」

『…分かつた、代わりにこちらから自宅周辺にSPを付けさせてもらおうよ』

「願ったり叶ったりだ。そんじや頼む『改君』…なんだ？」

『君はもつと自分の命の重さを考えた方がいいよ』

「……」

『それじゃあ予選の日から付けるよ、キリト君には誤魔化しといてあげるから。またね』
そう言つて菊岡は電話を切つた。

「…俺の命の重さ、ね…」

果たしてあるのか、それは俺にはまだ分からない。

「全く、君は自分の存在を軽く見すぎだよ」

彼のものぐさについて熱くなってしまった。僕は冷静でクールさが売りなのに。

「それでも無いですよ？」

「え？僕の考え駄々漏れ？」

「それにしても彼は自分の事をどう考えてるんですかね、死んでも構わないってセリフでしたが…」

「無視かい、そうなのかい？」

部下の態度に涙が出そうだよ…

「男の涙ほどむさ苦しいものは有りませんよ？」

「もう僕の心は読まないでくれ！」

「この職場もう辛いよ…」

「…それでさっきの質問の答えだけど」

「はい」

「別に彼は自ら死のうとは思って無いんだよ。ただ親友が危険なら自らの命はどうなるかが構わない、俺の命はそうでしか使えないと思っっているんだろうね」

「…ずいぶんと危ない考え方ですね」

「僕もそう思うよ」

自分で言いながら彼は本当に親友、いや、恩人を第一に考え過ぎている。彼の過去と周りの環境がそうさせたと僕は考えている。

「君は確かに命を奪ってしまったかも知れないけどその何倍も沢山の命を救っているんだよ？」

そんな言葉を心で唱え、彼の護衛に誰をつけるか頭の中で部下の名簿をめくっていた。

今日は日曜、本来ならバイトが入っているが店長が久しぶりの休みを入れてくれたのだ。そこで俺はキリトも後日始めるといふ事もあり普段は入らないこの日にGGOに潜ることにした。

「…普段入らない日に入ると何故か新鮮だな」

実際変わったところはないのだがほんの少し違和感があるのだ。慣れとはやはり怖いな…

「さて今日は何を狩ろうか…ん？」

どこに行こうかとマップを開いたときメールが届いた。この世界で俺にメールを送れるのはあのときの少女だけだ。内容は簡単、『今から会える?』とだけ書いてあった。ふむ…

「まあいいか、『いいぞ、前の酒場で待っている』と…」

俺はメールを送ると酒場へと歩き始めた。

正直期待はしていなかったけどフレンドリストを見ていたかいたがあつた。私は一刻でも早く彼に会いたかつたのだ。別に恋しくてという訳ではない、ただ彼といれば強さの意味が分かる気がする。それだけだ。

「…シン」

私は圧倒的な強さを持つ影シャドウの本当のアバターネームを口にする。

「…なんだ？」

「いひや!」

「いひや?」

いつの間にか彼が私の背後にいた。

ーど、どうやって…というかいつの間に…

「いつからそこに…」

「君がああ角を曲がってきた時あたりだ。索敵をある程度上げてあれば気付けたはずだが?」

「私も結構上げてるはずなんだけど…」

少なくとも半径五十メートルなら何人いるかはすぐに分かる、だがそれでも気付けない

かった。

「どれだけ隠密高いのよ…」

「とりあえずカンストはしている、加えてこの装備のおかげで姿は見えにくくなっている」

そうやって彼の装備をみる。初めて会ったとき同じパーカーのような黒い服、濃い紫のズボン。金属の類は見れない。ついでに言えばそこまで高価なものには見えない。

「高そうには見えないって顔だな」

「!?ま、まあね」

顔には出さないようにしていたつもりだが簡単に心を読まれてしまった。本当に何者なのか…

「この装備だが全部合わせれば三十万はするぞ」

「さ、三十万!?!」

高すぎる!…どんなトッププレイヤーでも精々十五万といったところだろう。

「…それは課金でもしたのよね?」

「いや、全てドロップだ」

「幸運過ぎるでしょ…」

あり得ない、というか信じたくない。こんな幸運なプレイヤーがいるなんて…

「それでなんの用なんだ？ただ呼び出したという訳では無いんだろう？」

そうだった、前の話が衝撃的すぎて忘れていた。

「そうね。話は二つ、一つはあなたの狩りに私も連れてって。もう一つはあなたに会いたって人がいるのだけど……」

「前者は君の実力次第、後者は却下だ」

「…前のはまだいいわ、実力差があるのは分かっているから。でもなんで会うのが駄目なの？」

「俺は基本的に特定の奴以外とはつるまないからだ。このゲーム以外にもう一つやっているがそれでも十人に満たない。それに俺は人が苦手なんだよ……」

後半彼は顔を逸らし小声で言った。自分でも気にしているのだろう。

「…だったら直せば良いのに……」

「そう簡単に直せたら苦労しないさ」

「あなたエスパー？」

「特技が読心術なだけだ」

「…それをアバター相手に使えるってどうなのよ？」

「便利だ」

「いやだから…じゃなくて！どうしても駄目なの？」

「…何故そこまで俺と会わせたいんだ？」

「…ちよつとその子がステ振りに詰まってね、同じAGI特化型なら有効な話が聞けるかもしれないって。それにただでさえ彼、あなたのファンだし」

そこまで言うとは彼はため息を一つついた。

「…会うのはダメだが次の出現場所なら教えといてやる、それで我慢しろ」

「ありがと、そう伝えるわ。それで狩りに同行したいんだけど…」

「さつきも言ったが君が付いてこれるかどうかな」

「誰を狩るつもりなのよ」

「今回はモンスターだ。ただしこのGGOで最凶のな」

「…まさか」

「そうだ、最高難易度ダンジョン、『怒りの戦艦』だ」

” 怒りの戦艦 ”

GGO内において攻略はほぼ不可能と言われている文句なしの最高難易度ダンジョン。トラップの多さとモンスターの凶暴性からステージとなっている戦艦が怒っているとなっている。今まで数々の猛者たちが挑み、挫折している。このダンジョンをクリアするには最低でも15人のベテランプレイヤーが必要とも言われている。さらに最

奥には“king of wrath” “怒りの王”という阿修羅に似たボスモンスターがいる。倒せば超がつくほどのレア装備やアイテムが入るとされているが倒せたものは誰一人としていない。

「ということよね？」

「そうだが誰に向けて話していたんだ？」

「それはもちろん読「メタいから止めろ」：そうね」

なんか口が勝手に動いたのよね、バグかしら？

「どうかそれをたった二人でいくの？自滅行為よ」

「一人でも最奥の部屋まで行けたんだから大丈夫だろ」

「……はい？」

「ん？どうかしたか？」

「あんた今一番奥まで行つたつて言った？あまりの難易度に何人も人がザスカーに意見書を出したダンジョンを？それも一人で？」

「ああ、言つたが？」

「……もうなにも言わないわ」

「それでどうするんだ、付いてくるか？」

私はその問いに少し悩んでしまった。普通にプレイヤーを襲うなら即断即決で行くと言っていたが相手はモンスター、しかもGGO最強クラス。

ーでも彼の戦いが見れるなら…

「行くわ、あなたの強さをもっと知りたいから」

「ボソツ（まだ拘っているのか）」

「?なにか言った?」

「いや、なんでもない。行くぞ」

「ええ」

私は彼の後ろをついて行く、その強さを知る為に。

第六撃

唐突だが俺、閑田改は読心術ができる。これは相手の仕草や視線の動きなどで相手の内心を知る為の技術だ。この特技から俺は相手の癖を意識的に覚えるようにしている。そして現在俺の後ろについて来ている水色の髪のスナイパーの少女、シノンはどうもリアルを知り合いと同一人物にしか思えないのだ。

「まさかだよな……銃が怖いつて言つてたし。でももし本人ならなんちゆう荒療治を……人の事言えんが」

俺もあの事件から朝田さん程ではないが刃物に対して苦手意識を持っていた。それもあの世界に飛び込んでからはほとんどそういう意識は無くなったが。

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ!」

「どうした?」

「どうしたじゃないわよ! あんたどういう神経してるわけ!? そこの中ボスクラスのm o bがうようよいある所に突っ込んでいくなんて! しかもサバイバルナイフと体術とピックで全部倒してるし!」

「欲をいえばナイフはもう少し長いのが良いんだけどな、それに君も倒したじゃないか」

「一体だけね！その間にあなたは何体倒したのよ！」

「六体だが？」

「かわいらしく首傾げんなー！ー！！」

「……同一人物、なのかな？不安になってきた。てかかわいい言うな、俺は男だぞ

「それより大声は控えろ、他のmobが来るかもしれないしプレイヤーがいないとは限らないんだからな」

そう言うのと彼女は慌てて口を塞いだ。その耳が赤い。スナイパーとしての鉄則である隠密行動を堂々と破ったからだろう。ちなみに俺達は現在“怒りの戦艦”の入り口付近の最初の大空間にいる。このダンジョンは巨大な戦艦の残骸であり内部は二百近い小部屋と二つの大空間、そして最奥の“機械化生体兵器実験室”に大きく分かれている。小部屋にはかつて船員の物だったであろう無数のアイテムや大空間にいる中ボスの情報がある。最初の大空間には七体の狼型のモンスターがいる。俺達が今戦っているのはこいつらだ。このモンスターの特徴は“視覚共有”である。小部屋にあった情報によると普通の狼型モンスターの脳の視覚野に通信装置を埋め込まれていて更に薬品で身体強化されている。視覚を共有するため死角がほぼ存在しない、が、共有しているのは視覚のみである。ならば簡単、潰せばいい。俺は七匹のうち五匹の目をピックとPC356で全て潰し、二匹の口の中にグレネードを突っ込み頭を吹き飛ばし、一匹

は足の腱を全て切り行動力を奪った状態で猛毒のピックを五本突き刺しじわじわと殺し、残りの三匹はサバイバルナイフと体術で倒した。この間およそ三分。彼女の方も三分半で中ボスクラスを倒したのだから大したものだろう。

「ほら、次行くぞ。ここから少し入り組んでいるからな、離れるとすぐ迷う」

「…さつきから思ってたけどまるで何回も潜った事のあるような言い方ね」

「既に二回潜ったぞ。マップ踏破率は99%だな、ボスを倒せば完全踏破だ」

「……もう驚くことに疲れたわ…」

すごく遠い目をしてるな、うん。そこまで驚く事かな、一回で三時間潜ってれば誰だってできる…よな？

（このダンジョンそこそこ広い上はかなり入り組んでいます。しかも途中には常に怒り状態のmobがうようよ）

「それで次のボスだが今度は九割機械だ」

「今の逆って事？」

「そう、巨大な植物のようにも見えるんだが移動する上に光彩歪曲迷彩ももってやがる。果実に見立てたグレネードに蔓のようなワイヤーと多彩だ。そして極めつけは広範囲のスモッグだ。唯でさえ光彩歪曲迷彩で見えないのに広範囲にレベル10クラスの猛毒でHPガリガリ削られる。俺でも苦戦したよ」

「もうゲームバランス完全無視の設定ね、しかもそれに二人で挑もうとするとかももう無謀」

「それでもないさ、今回俺は誘導と囿に専念する。もちろん攻撃はするけどメインは君だ」

「え?…いやいや無理でしょ、貴方でさえ苦戦したのを私がメインでやるなんて」

うーむ強さがなんたらとか言ってるくせに逃げ腰だな、…焚き付けるか。

「そうか架空のモンスターすら倒せないというなら強さを知るなど永遠に無理だな、一生止まっっている」

これでどうだ?大分きついことを言ったが大丈夫だろうか?

……………ブチッ!!

「ぶ、ぶちっ!」

おかしいな、ここは仮想世界のはずだよな?まるで血管が切れた様な音が目の前の少女から聞こえたような……

「へーそう。この程度は出来なければあんたみたいに強さは手に入らない訳か」

「え?いや、別に俺は強さが手に入るとは言っていないんだが…」

やばい、やりすぎたかもしれない。仮想世界なのに背中が冷や汗でびっしょりだ。シノンの顔が笑ってない、無表情なのに後ろに般若が見える。

「なにしてるのさっさと行くわよ」

「あ、ちよつと待てよ！て言うか俺まだどっち行くか言つてなかつたよな？何で道分かんだよ!？」

私は先ほどシンに言われたことに体中を冷やされた。 “一生止まってる” それはつまりあの過去に怯えながら生きていくという事だ。そんな事私には絶対に出来ない、私は絶対にこの世界で強さを手に入れてあの過去に打ち勝つんだ！

「お、おい。着いたぞ」

「そう…」

「…あのーシンンさん?」

「…なに?」

「作戦の程は如何に…?」

「さっきあなたが言った通りで。と言うかあなたがこの作戦を言ったんでしょ。私は狙撃ポイント捜して来るから。見つけたら合図する」

「ママ、イエスマム!」

私は二階に続いているだろう階段を駆け上がり狙撃ポイントを探す。すると丁度大空間の二階の通路に出た。いい狙撃ポイントを見つけた。ボスも確認する。名前は“death prant” 死の植物。安直だが名に違わない威圧感だ。

「着いたわ」

無線でシンに報告する。

『了解、3カウントで行く…2、1、GO!!』

入り口からシンが超高速で入ってくる、そのまま動いていた二十本近くあるワイヤーのうち五本をサバイバルナイフで切り落とす。

ギョオオオオオオオオ!!

モーターの駆動音の様な声が響き渡る。“death prant”はシンに向けて残りのワイヤーをその場に放つ。しかし既にその場にシンはいない。姿が霞む速度で攻撃位置から反対側に移動したのだ。

『シン、俺が装甲の隙間にピックを刺すからそこに正確に打ち抜いてくれ』

分かっているのだろうか？動いていて更に直径一センチに満たないピックを正確に打ち抜くなど神業でしかない。それでもシンの声に“やれるか？”と言う思いは混じっていないかった。それはつまり私ならやれるという事だ。だったらやってやる！

「了解！」

シンがワイヤーを掻い潜り肉薄する。そして両の拳を打ち付ける。スコープで確認すると装甲の隙間に二か所ピックが刺さっている。拳の中にピックを隠していたのだろうか。

ーこれシューティングゲームよね？

どうもシンは銃を滅多に使わないらしい。常にサバイバルナイフを腰に差しどこに仕込んであるのか分からないピックで動きを封じる、そんな戦い方だ。次の瞬間シンが合図をする。

ー集中しろ、相手はポリゴンの塊。生きている人間が操作しているわけでもない。それにこの距離ならゴミ箱の真上から紙くずを落とすより簡単だ。そう、

アノトキニクラベレバ

一瞬で安定しなかったバレットサークルが収縮した。輪の中にはピックしかない、引き金を引く。強烈な反動とマズルフラッシュ、轟音が私の五感を支配する。でもそれを振り払いもはや体に染みついていて動きで次弾を装填する。さつきと同じように極限

まで収縮させ…発射。結果は二回とも命中、装甲の一部が剥がされた。

『ナイスショット!』

「どうも」

私は素つ気なく返したが内心バクバクだった。少しでもずればシンに当たるのだ。成功した一時の安心感、何より私の強さの目標にナイスショットと言わせたのだ、私にとってこれは大きな自信だ。私は次の合図が来るまでの間この気持ちを噛み締めていた。

とんでもない命中精度だ。この大空間はコート二面分の体育館より大きいのだ、それを端から端の距離からおよそ七ミリのピックに寸分違わず二回とも命中させたのだ。

ーこりや方向性が違うだけで技術ならSAOのトッププレイヤーと並ぶな

それはつまりこの世界において頂点に立てる実力を持っているのだ。それでも未だに強さを求め強者に挑み続ける。聞こえは良いかもしれないが危なっかしいのだ。い

つか足を踏み外し、挫け、心が折れて立ち直れなくなる。そんな気がしてならない。

「俺は折れてそのまま腐っていったからな、あいつらに遭わなかったらと思つたゾツとする。」

俺が止めてみせる。そう考えていて気が逸れていた。

『シンー!』

「ん? やべ!?!」

目の前にワイヤーが迫っていた。慌てて上体を逸らしそのままバク転で後退する、直後 “death prant” が体を回転させる。

「全方位グレネード攻撃か!」

グレネードがこっちに二つ飛んでくる。

「隠しておきたかつたけどどしようがねえ!

「暗殺術体術系カウンタースキル、”流水”」

俺の所で爆発するはずだったグレネードは軌道を変え “death prant” に直撃する。運よく弱点に当たったようで装甲が一枚剥がれ落ちた。

『ちよつと!?!今の何!?!』

「終わったら説明する! 次行くぞ!」

俺がピックを突き刺し、寸分違わずそこをシノンが狙撃する、約二十分ほどそれが続いた。

「装甲が全部落ちた！シノンここから気を付けろよ、そこも安全圏にならないからな」
『えっ、ここかなり離れてるけど』

「始まる前に言ったら、広範囲の…」

そう言った直後 “death prant” の姿がブレ消える。同時にシューと音がする。

「くそ！言ったそばから！シノン今すぐ上がってきた階段まで下がれ！スモッグが来る！」

無線の向こうで慌てて片す音がする。かくいう俺も全速力で入り口までダツシュする。仮想の空気が顔を叩く、なんか毎回全力で走ると最初に横向きの傘雲出来る。名前なんだっけ？

ギョオオオオオオオオオオオオ!!

「間に合えーーーーー!!」

背後から仮想の異臭が匂ってくる。駆け込み……ぎり成功。スライディングで入り口にゴール。

「あぶねえ……」

「あんたは人間砲弾か！奥からここまで何メートルあると思ってるの!?ほぼ瞬間移動だったわよ!？」

「大丈夫だ、問題無い」

「問題しか無いわよ!!!ベイパーコーン作るとかあんたは戦闘機か!!!」

ー人間砲弾なのか戦闘機なのかハッキリしといて欲しいな、それとベイパーコーンだ、思い出した思い出した。てかよく知ってたな。

俺はそう考えながら早業でアイテムストレージから暗視スコープを取り出す。

「シノン、俺が奴を探すから君が機関部を打ち抜いてくれ」

「……もう何も言わないわ、分かった。指示頂戴」

俺は空間が乱れる所をさがす。……あった。

「一時の方向、上に二十、二秒後に……」

俺の指示にシノンは正確に従う。

「撃て!」

直後轟音が響く。弾丸はスモッグを吹き飛ばしながら一見何も無いところを撃ち抜

第七撃

俺とシノンとは二つ目の大空間のボス、“death prant”を狩り終え最後のマップデータである“機械化生体兵器実験室”に向かっている、のだが…

「約束と違うわよ！さっさと説明しなさい！あのグレネードの軌道を変えた技は何!?」

…先ほどからこの調子である。とりあえず「なんかのアニメの再現技」と言って誤魔化しているのだが妙な所で鋭く「あれは長年使ってる程に滑らかだった」と言いしつこく本当の事を言わせようと躍起になっている。

「だからさつきから言ってるだろ、昔見た何かのアニメの再現だつて」

「じゃあ何のアニメよ!」

「それは忘れたが…」

「それで私が納得出来る訳無いでしょ!」

…しつこい。そこまで気になるか…ああもう!めんどくさい!腹括つてやる!

「はあ、分かったよ教えるよ」

「最初からそうし「ただし」…なによ」

「次に殺るボスのL Aを取れたらな。こちとらB O Bのライバルに手の内の一つを晒す

んだ、これ位の賭けは受けて貰うぞ」

本来今のシノンの様にしつこく相手のスキルや手の内を聞くのはマナー違反なのだ、このままGMコールして訴える事も出来たがさすがにやり過ぎになるので少し痛い目に遭う程度にしておこう。

「分かったわ、やってやるわよ」

…この数時間で分かった事。シノンは倫理的に押せば大抵の事は通る、あと結構気性荒い。例えるなら獰猛な山猫だな、うん。

「あなた今結構失礼な事考えたでしょ」

「さて何のことやら」

どうやら俺の周りには読心術できないのに心の読めるエスパーが沢山いるらしい。

「それとささっきの奴とは全然違うんだけどさ、あなたこのゲーム初期からやっているのよね?」

「ああ、そうだがそれがどうした?」

「なんで今までB o Bに出なかったの?」

「…それか」

俺は今までの現実での地味すぎる不幸を思い出し遠い目をする。

「シ、シン?」

「第一回目の方は予選にエントリーしたんだけどリアルでバイクが故障して翌日も使う予定だったからその日の内に直さなきゃならなくて、しかも直しに行ったらその部品が足りないとかですぐ直らなくて徒歩で帰ったら間に合わなかった…結局その用事も無くなっただけ」

「…第二回は？」

「アミユスフィアを落つこととしてログインすらできなかった…」

「うわあ…」

「ははは、改めて思うとリアルでは不幸だなあ…仮想世界こつちとあつちの運を足して二で割り現実世界たいよ…」

「うん、ちよつと同情するわ…」

「しなくていいぞ、悲しいだけだから」

ああもう、ボスと戦う前にテンション下がっちゃったじゃねえか。

話を聞いてて思ったけどシンはあまりにも現実と仮想世界で運の違いの落差が酷い

みたいだ。

―それにしてもさっきの話どっかで聞いたことがあるような…

どこか引つかかる。この近くにいるけどはつきりしない感覚、身近にいた気がする。

―誰だったかしら、…そのうち思い出すか

「ああとそれで最後のボスだけど」

「なに教えてくれるの？」

「条件は対等にしなければな」

…こういうところは律儀よね。

「名前は知ってるだろうけど “king of wrath”、設定だと人間をモン

ター化させその上で機械化したみたいだな」

「…人をモンスターにしたの？」

「設定だ、割り切れ。まあ分からんでもないけどな。…続けるぞ」

「…うん」

例え設定でも後味は悪い、シンの言うとおり割り切らなければ。

「姿はもろ阿修羅らしいな、腕が六本あつて更に全身が超合金で覆われていて硬度は

death prant”よりはるかに硬い」

「あれより硬いとか…」

私のヘカートでも凹ませるのが限界ではないだろうか。

「それにレーザー炎弾雷球何でもござれだ」

「真面目にザスカーは何をしたいのかしら…」

そんなものを作っても大丈夫なのだろうか…

「あともうひとつ、資料の情報には書いてないんだけどもし俺の考え通りならこいつは全GGOPレイヤーにとって天敵だ」

「どういうこと？」

「それをこれから確認するんだよ」

そう言つてシンは巨大な扉の前で立ち止まる。どうやら着いたようだ。

「…覚悟はいいな？ LAはやらねえぞ」

「私もあなたに渡すつもりはない」

互いに不敵な笑みで答える。私は今までのこの戦闘で自分も結構やれると思えていた。それは自信になり私に勇気を与えてくれる。

ーやっぱりついて来てよかった…

私は彼といれば強くなれる、そしていずれは乗り越える。あの過去を！

どうやら士気は高いようだ。これなら大丈夫だろう。俺とシノンは一緒に両開きの扉を押しした。ゆつくりと開く、この時俺はSAOのボス部屋を連想した。かつてあの世界で俺はボス攻略に参加しないまでも最前線で戦っていた。その中で何度も俺はボス部屋を見付け、単身で挑んでいた。もちろん勝てなどしなかったが。

―にしてもこの感じ：

この感じはまんまあの世界のボスと相対した感じなのだ。

―こりや賭け以前に乱発してばれそうだな

俺は内心苦笑して更に腹を括る羽目になりそうだと思った。敵の姿が鮮明に見える。そいつは奥の玉座に座っていた。パツと見は人だ。だが本来の肩の後ろ、肩甲骨のあたりから左右二本ずつの通常の三倍ほどの太さの腕が見える。何も微動だにしていないうのにそこにいるだけでとてつもない威圧感がある。

―よくもまあアミユスフィアでここまでものを作り出したな

確かに威圧感もあるし感覚もあの世界と同等だがやはり重みが違う。俺にとってはこの程度の威圧感は少し強い風くらいだ。だが隣のシノンはそうでも無いらしく体が緊張してるのが目に見えて分かる。

「…逃げ帰っても誰も文句は言わないぞ」

「つ!!ふざけんな!ここまで来て後に引ける訳無いでしょ、LAは私が取ってやるわよ!」

「ならその調子で頑張れよ、俺をぎゃふんて言わせてみる」

「ええ、言わせてやるわよ!」

どうやら少しはほぐれたようだ。俺は“king of wrath”に向き直り、左手にPC356、右手にサバイバルナイフを構える。シノンも可能な限り遠くかつ高い場所に移動する。

フイイン…

ふと音がした。それは視線の先の敵からだ。体からモーター音を響かせながら、だが機械ではあり得ないような滑らかさで立ち上がる。…でかい、3メートルはありそうだ。“king of wrath”が顔を上げる、半分はバイザーのような物で隠れているが下半分から覗いている口には恐ろしく長く鋭い牙が見える。俺は普段滅多に使わない本気の覚悟を決めた。相手も気付いたのだろうか、構えを取る。

グオオオオオオオオ!!!

1つの咆哮、それが始まりのゴングとなった。

シンはいきなり私が見てきた限りで最高速度で突進していった。左手のPC356が三回火を噴く。全弾頭部に命中したがかすり傷が付いた程度だ。

「やっぱり硬いみたいね、でもヘカートなら…」

私はスコープに目を当て覗き込む。視線の先ではシンがサバイバルナイフで関節部分を攻撃している。しかし相手はさして行動が制限されたわけではないらしく悠然としている。突然 “king of wrath” がこちらに顔を向けた。上二つの腕が動きこつちを捉える。

「っ!! シノン今すぐそこを離れろ!」

私はシンが言い切る前にその場から自身の限界速度で離脱する。その瞬間さつきまでいた場所に二本の極太のレーザーが通り抜けた。そこは余りの高熱で融けていた。

「なにその威力!? ザスカーぶざけてんの!」

私は自分の意思力を総動員して声を上げまいと踏ん張った。意味ないかもしれないが声を上げたら自身の位置を悟られるかもしれないと思ったからだ。再び視界に敵を入れると今度はシンが下二つの手に捉えられていた。その手のひらには各一つずつ砲門が設置されている。シンが即座にその場から離れる。

「飛び火に気を付けろ!」

私は言葉に従い物陰に完全に身を隠す。壁の向こうで爆発音がする。どうなったかと顔を上げると目の前に眩い塊が通り過ぎた。目だけでその塊を追う。それは一昔前に流行ったというモ〇スター〇ンターに出てきた雷を纏った狼が放つ雷球をそのまま大きくしたような物だった。余りの近距離に顔が引きつる。そしてシンはと言うと：「雷球と炎球の二段構えでしかも間隔短いなおい！」

と愚痴垂れながらも紙一重で躲し続けている。本当にどんな反射神経してるのだろうか？私は射撃体勢に入り相手がこちらに銃口を向けるのを待つ。シンには悪いがそのまま引き付けておいてもらって困らなってもらおう。シンは知ってか知らずか私を背後にするように立ち回りをする。掌の銃口が一瞬こちらを向く。即座にバレットサークルを狭め引き金を引く。亜音速を超える弾丸が銃口に吸い込まれるように入っている。内部から装甲が吹き飛ばされた。

グオオオオオオオオオオオ!!

初めて「king of wrath」が大きく体勢を崩す。「なるほどな、内部から壊せばいい訳か！」

シンが感心したように叫ぶ。そこからの行動は迅速だった。シンはもう片方の手に急接近し独特の動きを超高速で行い砲口を自身に向けさせた。エネルギーが溜まっているのが分かる。だがそこに手を突っ込んだ。

「はあ!？」

バカじゃないのか、と思った私は悪くない筈だ。わざわざ攻撃を食らいに飛び込むのはおかしいだろう。しかし、

バガアアアアアアアアアアアン!!

「ハッ?」

何故手を突っ込んだだけでヘカートの様に装甲が吹き飛んだのだろうか。

「よし二本目!」

「今の何!？」

「突っ込んだ手にグレネード握ってただけ!以上!!」

どうやら私の見えない角度でグレネードを持っていたらしい。ただもうひとつ謎なのは…

「何で爆発に巻き込まれたのに無傷何だろ、アイツ…」

謎は増えるばかりだ。

「今のは危なかった。グレネードを砲口に突っ込むまでは良かったがあちらさんの発射のタイミングをちよつと見誤つてたわ。」

「そうシンは心中つぶやくが実際シンは爆発の瞬間後ろに飛んでダメージ判定ギリギリ範囲外まで逃げていた。ゆえにダメージはゼロ。」

「シン、上の二本やる。左を頼む！」

「了解」

互いに左右に素早く移動をした。“king of wrath”は上の二本を二人にぴつたりと照準を合わせ続けている。上の二本から発射されるレーザーはホームイングは無いが一撃でHPを吹き飛ばせるほど大火力で更にタメがない。つまり狙いが定まれば即時撃てるという事だ。シンやシンンにとってタメと言うのは非常に重要なものだ。シンンはスナイパーとして、シンはあの世界で培った経験からその一瞬でカタを付けている。ゆえに二人は思う。

「…やりにくい！」

余りのタメの無さに内心舌打ちをする。その間にシンは紙一重でレーザーを避け続けている。シンンも隙を見付けては引き金を引くが狙いが逸れるかレーザーに巻き込まれて蒸発するかだ。

「シンン！」

「なに?」

「出血大サーブリスだ、もういつちよ見せてやるよ!」

どうやら痺れを切らしたようだ。シンは一瞬の隙を見付けて懐に入り込んだ。蹴りを膝裏に一発、それだけでバランスが崩れる。簡単に言えば強烈な膝カックンだ。そして僅かな駆動部の隙間に手を入れしつかりと掴む。

「暗殺術体術系スキル、^{ほうざん}崩山!」

ズドオオオオオオオオオオオ!!!

“king of wrath”は頭から地面に落ちた。“崩山”は自身より大きい相手を柔道の背負い投げに似た要領で一撃で沈める技だ。ただ元々対人用の技なのでHPを体術にしては少し大目に削り転倒^{タンプル}を起こす程度だ。が、今はそれで十分だ。

「頼むぜシンン!」

「分かってる!」

シノンの正確無比の弾丸が腕の銃口に侵入し破壊する。シンもちやつかり落とすと同時に銃口にグレネードを入れて置いてあった。シノンの銃弾とほぼ同時に爆発する。

「部位破壊成功!」

腕を全て破壊した為にもう相手に攻撃手段は無いかのよう思われた。事実シノンは後は叩き放題だと思っていた。どうやってLAを取ってやろうかと考えていた時、

「シノン、気合入れろよ」

「は？なんでよ？油断する気は無いけどもう攻撃手段はあつちには無いでしょ？」

既に砲口はボロボロで撃てる様な状態では無い。しかしシンは違った。

「まずどう考えてもW Pを全て破壊したのになぜHPは6割近く残っているのか」

“king of wrath”が起き上がる。

「次に何故砲口をそのままでは無く掌に付けたのか」

体中から蒸気が溢れ見えなくなる。

「最後に、吹き飛んだのは砲口と装甲のみであつて腕自体はまだ残っている。何より…」

シンはそこで言葉を切り敵を睨む。シノンはこの時戦闘直前にシンが言ったことを

思い出していた。

『もし俺の考え通りならこいつは全GGOPレイヤーにとって天敵だ』

そしてその答えが目の前にある。

「あいつは真ん中の腕を一切使っていない、まるで温存していたかのように」

蒸気が晴れる。そこに佇んでいたのは上下四本にその体躯に合わせて作られたかの

ような超大ぶりのナイフを持ち、武術の構えを取った敵であった。

シンは危惧していた事が現実であったことに舌打ちをした。自分だけならまだ捌ける自信はある。しかしこの場にはシノンがいるのだ。自分に集中させるにはシノンはヘイトタグを取り過ぎた。"king of wrath" が動き出す。

ーやっぱりシノンの方に行くか！

大きな足音を響かせながら急接近をする。シノンは混乱して行動するのが一瞬遅れた。その体に拳を食らい吹き飛ばされた。

「アグッ！」

「シノン！」

相手は追撃をしようと一步踏み出す。

「させるかよー！」

シンは踏み出した足に組み付き自身の体ごと捻る。全体重とコンバートしたアバターの筋力補正がかかり倒す。が、完全に相手は近接モードにシフトしていた為倒れず器用に体を使い耐える。どうやら標的はシンに移行したようだ。シンは顔に凶悪な笑みを浮かべる。

「来いよ、あの世界を抜けてから張り合いが無かったんだ。勘を取り戻すついでに相手

してやる」

私は吹き飛ばされた後余りの衝撃に視界がチカついていた。HPを確認すると残り二割ほどになっていた。殴られる前は八割はあつたはずなので一撃で半分以上削られた事になる。

ー馬鹿げた威力ね、ホント…

腰のポーチチからポーシオンを含み回復させる。視界の端のバーが徐々に増えていく。その時この世界ではあまり聞かない殴打する音が響いた。そちらの方を向くと

「…ええ？」

シンがまともに殴り合いをしていた。所々にピックやナイフで攻撃を仕掛けながら相手の攻撃を全て流していた。その顔には見たことの無いような好戦的な笑み、心底楽しいように思える。更に銃撃戦の時よりも余裕そうだ。

「あいつなんなの？あれはもうゲームの枠を超えてるわよ…」

振り上げられたナイフを避け逆にその腕を逆方向に折る。既に三本目だ。シンの声
が聞こえた。

「なあ、もつと来いよ。こんなものなのか？」

耳を疑う、あの攻撃の嵐は私はもちろん格闘系のスキルを全てをコンプリートしても捌き切れないものだ。それを軽々と流し、あまつさえ反撃し既に戦力の半分を削いだ。その光景とシンの表情に私は驚嘆と同時に恐怖を感じた。私が目指している男はこんなにも遠い所にいるのかと。

―敵わない

その一言が私の中に吹き荒れる。HPは既に回復した。それでもあの戦いに混ざる事はできない。私は自身の無力さを感じ強く歯を食いしばった。

破砕音が空間に響く。

「四本目！」

既に上下の腕はへし折った。銃撃戦ではあんなにも苦戦した相手がこんなにも容易く腕を破壊できるのはやはりあの世界での経験のおかげだろう。今現在俺は七割体術三割ナイフとピックとなっていた。本来一番得意なのはナイフ…小刀なのだがいちいち硬いので効果があまり期待が出来なかった。

「まあ十分だな

相手のHPは残り二割ほどだ。腕も残り二本だしもうかなり大きいただの人と変わりは無い。

「目星はついた。終わりにするか」

満遍なく攻撃していく中でトドメとなる場所を探し当て狙いを定める。

「暗殺術体術系スキル “無重力”」

体を揺らし相手の重心が最も離れる所に誘導し足を払う。更に空中にその巨軀を放る。

「これで終わり、暗殺術体術系上位スキル “昇雷”」

それはまるで天に昇る雷の如き神速の双拳の突き。この技は “無重力” とセットの技で落ちてきた敵に対し二つの拳の突きを頭と心臓に突き刺すというもの。技と技の間が極端に短くなるように “無重力” の終わりど “昇雷” の始めが同じ構えになっている珍しい技だ。ただ今回は敵が大きかったのでどつちの拳も胸の中央にヒットした。しかしそこには機関部があり最大のWPとなっていた。 “king of wrath” はその体を爆発四散させた。ダンジョンに入ってからおよそ二時間、長い戦いになった。

私たちはダンジョン攻略を終えSBCグロツケンの最初に会った酒場に来ていた。しかし私は終始無言になっていた。分かっていたはずだがその実力差をまざまざと見せつけられたからだ。胆力、判断力、予測力、どこを取っても私は彼に追いつけないのだろう。

「…折角勝って景気よくと思ったのに何そんな辛気臭い顔してんだよ」

「…お得意の読心術で探ってみれば」

つい棘のある言い方をしてしまう。

「ふむ…大方俺の戦い方を見て追いつけないとか思ったんじゃないのか？」

まさか言い当てられるとは思わなかった。…いやこれ位はできるか、もはやじ「俺は人間だぞ」読まれた…

「一つ言っとくぞ、比べても何の意味も無い」

「……どういふことよ」

「そのまんまだよ、人は一人一人にそれぞれの色がある。そして決して同じ色になる事は無い。強さだつてそうだ。自分なりのこだわりを持つて形を作りそれを支えにする。俺はそう考えてる」

「あなたはそれを見つけたの？」

「どうだろうな」

「それ位は教えてよ」

「……見つけたよ」

「それは何？」

「内緒だ、知りたかつたら自分の答えを見付けて、俺の気が向いてシンロンが聞きたくなくなつたら話すよ」

「……あれ？今の言い方……」

「閑田さん……？」

「えっ」

「まさかだよね……？」

「……バレた？」

「なにこれ……なにこの偶然。」

第八擊

今日は和人がGGOにログインする日でもあり、Bob予選当日だ。本当なら何日前にログインして慣らしておいて欲しかったのだがあいつにも予定はある。仕方ないだろう。だがその分ぶっつけ本番になってしまふのが不安だ。いや、あいつなら大丈夫か。規格外代表だし。それよりも今不安なのはシノンの事だ。あの後俺とシノンは戦利品の分配（互いに相手の相性の良いものをドロップしていたので交換などした。ついでに言えばその他のアイテムの売値にシノンは絶句していた。）をして解散したのだが何とも気まずい空気で過ごしたのだった。現実世界の方でも以前なら世間話程度ならしたのだが今日の今日まで簡単なあいさつ程度になってしまっていた。

「どうにかしないとまずいよな…」

以前の俺ならそんな事気にしなかったのだが人と関わりの大切さを学んでは例え少なくとも大事にしたいと思っている。なのだが…

「避けられてる感あるんだよな…」

どうしたものかと考えていると待っていたゲームスタート地点から一人のプレイヤーがログインしてきた。水色の髪に砂色のマフラーを着けている少女、シノンだ。

「あつ」

「えつ?」

互いに固まつてしまう。掛けるべき言葉が浮かばない。

「えつと…よ、予選で会いましょう」

そう言つて早々にシノンは立ち去ろうとする。

「あつと、ちよつと待つた!」

何かこの辺菊岡に似ているなど自分で気付いてショックを受けるが今は関係修復が最優先だ。キリト? 何とかなるだろ。

「…なんですか?」

「時間あるか? 話があるんだ」

「…分かりました」

良かった、これで断られたら打つ手無しだった。俺達もはや常連となつた酒場に向かつて歩き出した。

どうしようかとずっと考えていた。今まで自分でもしつこいかなと考えたことがあった。でも一応返事とかあったし何より顔も名も知らない人だから大丈夫って思いがあった。でも実際はまさかの私によくしてくれたアパートの隣室の人だった。閑田さんと分かった時は驚きやら申し訳なさやら黙っていた事への怒りやらでしどろもどろになってしまいさっさと戦利品整理をしたらすぐにログアウトをしてしまった。そのあとこの世界で会うことは無かったけど現実世界で会うと目を合わせられず挨拶程度で済ましてしまっていた。そして今、それを解消するチャンスに恵まれた。こちらとしても今の関係性では何とも気まずいので閑田さん／シンの申し出はありがたかった。

「……」

「……」

なのに今現在進行形で気まずいのはなぜだろう？いや理由は簡単だ。どちらも言葉を発しないのだから。

「……あの！あついえどうぞ」

続かない、どうしても続かない。自分の語彙力の無さが腹立つ。

「……シノン」

「は、はい……」

「すまなかつた！」

「……え？」

「確証は無かったんだが俺は君が朝田詩乃ということに気付いていたんだ。その上でこちらの事を話さずに黙っていた。だからすまない」

「い、いつから気付いていたんですか？」

「…二回目に街で会った時だ」

そんな最初の時だったのか、相変わらずこの人の洞察力と観察眼はすごいな。

「…こちらこそすみませんでした、今思えばあんなにしつこく聞いたのはゲーム内のマナー以前に人としてのマナーとして駄目でした」

「…じゃあ互いにイーブンで良いかな？」

シンさんが不安そうに聞いてくる。

「もちろんです、こちらからお願いたいくらいですよ」

「そうか、よかったよ。リアルの方まで引き摺っちゃうから気まずくて」

「それはこつちもですよ」

互いに苦笑しながら言う。

「ああ、それと敬語は要らないぞ、この世界じゃ対等だしな」

「え？でも…」

「年上だとか俺の方が先輩プレイヤーだからとか関係ない。この世界では俺は“シン”

で君は「シノン」だ。そこに差は無いよ」

大人だ。しっかりと自分を持っていて器も広く許してくれる。やっぱりこれが強さの差なのかもしれない。

「分かりました…じゃなくて、分かったわよ、シン」

「ん！」

そう言っつてシンは笑う。その顔はどう見ても可憐で凜とした女の子で…

「今女みたいだっけ思っただろ」

「うっ！」

びしりと言われてしまった。しかもほんのわずかに殺気が乗っている気がする。

「ご、ごめん…」

「…はあ、もう慣れたからいいよ」

どうやら何回も勘違いされているようだ、気の毒に…

「さて、そろそろ行こうか。まだエントリーしてないんじゃないか？時間はあるけど」

「そうね、行きましょうか」

私たちは店を出てエントリーステージに向かった。足取りが軽くなったのは気のせいではないだろう。

俺とシノンとはSBCグロツケンに向かっていた途中に一人のプレイヤーに声を掛けられた。

「あ、あのーすみません！」

「うん？」「…なに？」

そのプレイヤーは長い黒髪に黒瞳の女の子で明らかにニュービーのプレイヤーだった。

「すみません、その…Bobに出たいんですけど道が分からなくて、それと出来れば武器屋にも行きたいんですけど…」

「あなたニュービーよね？いきなりBobに出るなんて勇気あるわね」

「ええと、今までファンタジーのゲームばかりやってたんですけど銃撃戦に興味が出たのでコンバートしたんです」

黒髪、黒瞳、ニュービー、ファンタジー、コンバート、そして女の子…いや女顔。これは確定だな。

「シノン、ちよつといいか」

俺はシノンに耳打ちをした。

「(こいつ俺の知り合いのプレイヤーだ)」

「(そうなの?)」

「(落ち合う約束をしてたんだが忘れててな、今思い出した)」

「(…この子に同情するわね)」

「(言つとくが男だぞこいつ)」

「え!?!」

「(声がかい!)」

「(ご、ごめん)」

「(それで物は相談なんだがちよつと手伝ってもらっていいか?)」

「(道案内とか?)」

「(いや遊びに)」

「(はい?)」

「(あつちは多分自分が女の子と思われてると勘違いしているはずだ。そして俺も女の子だと思っている。これを利用しない手は無い!!)」

「(そんな良い顔で言わなくても…)」

「(という訳で協力してくれないか?)」

「(…良いわよ、面白そうだし)」

シノンにはニヤリと笑った。俺も悪い顔をしているだろう。

「あ、あの…。どうかしましたか?」

「ううん、何でも無いわ。それで道案内だったっけ? 良いわよ。でもその前に装備を整えなきゃね」

シノンは何事も無かったかの様に進めた。さあ、楽しくなりそうだ! (悪笑)

俺、桐ヶ谷和人ことキリトは菊岡誠二郎の依頼でガンゲイル・オンラインと言うゲームの内部調査をしている…と言うのは建前で本来の依頼はこの世界で起きた謎の圏内での攻撃、それとほぼ同時刻に起きた攻撃を受けたプレイヤーの変死。そしてそれに関与すると思われるデス・ガンなるプレイヤーへの接触。一緒にその依頼を受けた改あまたと共に最強決定戦、Bobに出場し接触を図ろうとしていたのだが…

「どうしてこうなった…?」

まず一緒の場所からログインすると思つていた改がベッドが足りなかったという理由で別の場所からログインする事になりログインしたら今度はこの世界での改の容姿を聞くのを忘れていて誰が改なのか分からず仕方ないのでエントリーをしておこうと総督府と言うところに向かったら迷子になり埒が明かないのでプレイヤーを尋ねたら二人組の女子でしかも俺の容姿から女の子と勘違いされて仕方が無いので女の子のふりをしながらこの世界の武器…銃についてレクチャーを受けている真つ最中である。

「となるわけで…つて聞いている?」

「ぎ、聞いてます聞いてます!」

駄目だ…軽い現実逃避をしてて聞いてなかった。申し訳ないな…

「そういえば君は今いくら持つてるんだい?」

今説明していた水色の髪の子ではないもう一人のフードをかぶった白髪紫瞳の女の子が聞いてくる。

「えーと……1000クレジットです…」

「バリバリの初期金額ね」

「それじゃあ中古のハンドガンでも厳しいな…」

二人は考え込んでしまった。初めて来た場所で離れる訳にも行かないので視線を泳がしてしまう。ふと視界に不思議なものが写った。

「あの、あれは何ですか？」

「え?…ああ、あれは簡単に言えば弾避けゲームよ。あそこにいるガンマンが撃った弾を避けながら進んで行ってガンマンに触ればクリア」

「今までにクリアできたのは一人だけだけだな」

「え?」

白髪の女の子が言った言葉に俺と水色の髪の子と声がハモった。

「一人しかいないんですか？」

「クリアした人が存在するの!？」

同時に、しかし意味は真反対の事を言い放った。

「そんなに難しいんですか？」

「それは…いや、見本が来たから見たほうが早いわね」

再びそつちに目を向けると三人組の男のプレイヤーが挑戦しようとしていた。

「あれは掛け金があつてクリアしたのがこのゲームの最初の方らしいからそこそこ溜まつてるんじゃないかな? ええと…今は約30万クレジットだね」

「30万!?すごいですね…」

視界の先では三人組の一人が挑戦していてレーンを走り抜けている。すると突然変な体勢で止まった。そこに弾丸が通り抜ける。

「今のは…」

「弾道バレット予測線、防御的システムアシストよ。狙われた人には赤い線でその弾丸の軌道が見えるのよ」

「へえ…」

挑戦していた人は10mを超えた辺りで被弾してゲームオーバーになっていた。

「やってみれば?」

白髪の人に聞かれた。それに対し俺は…

「そうですね、やってみます」

「え!?ちよつ、本気?」

俺は返事することなくそのレーンに向かって行きタッチスクリーンに手を当てる。周りから声が聞こえるが気にしない。カウントダウンが始まりゼロになって俺は走り抜けた。

結果的にキリトの奴は楽々とクリアした。まあSAOのトッププレイヤーならこれ

ぐらいは出来て貰わないとな。その後俺達は期せずして手に入った資金でキリトの装備を整えてやった。光剣を見付けた時迷わず買ったのには吹き出しそうになった。とりあえずさすがに光剣一本じゃ厳しいのでシノンと協議した結果ファイブセブンを薦めて買わせた。おそらく金はすっからかんだろう。

「なにからなにまでありがとうございました」

丁寧にキリトは頭を下げる。

「別にいいわよ。さてそろそろ総督府に行きましようか」

シノンが言うが一つ気付いていないことがある。

「なら急いだ方がいい、あと五分だぞ？」

キリトとシノンが固まる。銅像より硬そうだな。

「……なんでもっと早く言わないのよー……！！」

「あ、あのテレポートの手段は無いんですか!？」

「テレポート出来るのは死んだ時のみだ」

「とりあえず走りましょう!」

俺達は総督府に向けて走り出す。俺一人ならここから全力で走れば二分で着くがさすがに置き去りに出来ない。流れる景色の中に見えた物によって一つの策が浮かぶ。

「シノン、こっちだ」

「え、ちよつと！」

「君もこつち」

「あ、はい！」

そこにあつたのはレンタルバギーだ。シノンを後ろに乗せる。キリトは別のバギーに乗った。

「行くぞ！」

「はい！」

俺達はいきなりフルスロットで走る。

「うそ……このバギー操作が凄い難しいのになんで乗りこなせるの!？」

「ははは……実は昔レース系のゲームをやったことがあつて……」

「普通にバイクと同じだ」

「いや、違うと思うわよ」

呆れた声が後ろで聞こえるがすぐに笑い声が変わる。

「あはははははははは！ねえもつととばしてよ！」

俺はキリトに目配せをする。どうやら大丈夫のようだ。

「了解！」

俺達は更にアクセルを上げる。景色が放射線状に流れていく。俺はこの時初めてシ

ノン：朝田詩乃の心からの笑い声を聞いた気がした。きっと今の朝田詩乃が本当の姿なのだろうと思つた。いつか自身の強さを知つて自信を持てればいつでもこうやって笑つてくれるのだろうか。

結果的に二分と少し前に到着した。俺は既にエントリーを済ましているので少し離れた所で待つていた。住所などが見えるかどうか試してみたが当然のように見えなかつた。犯人、デス・ガンはどうやって住所を手に入れたのだろうか。未だに見当がつかない。そうやって考えていると二人が近づいてきた。

「終わったのか？」

「ええ、何とか間に合つたわ」

「こつちもです、ありがとうございました」

「いいさ、さて行くか」

俺達は会場に向かつて歩いた。しばらく歩くと大きいホールの様な所に出た。そこでは既に屈強な男たちが自身の銃を点検したり構えたりしていた。

「…こいつらバカか？」

「バカなんですよ」

「えつと、何でですか？」

「相手に手の内晒して対策してくださいって言うてるような物じゃない、だからよ」
「なるほど」

「あなたも装備は直前にした方が良いわよ、さて行ってくるわ」
「そう言うときリトも行こうとするので襟首掴んで引き留める。」

「ぐえー！」

つぶれたカエルの様な声を出した。

「なにするんですか！」

「お前は浮気をするつもりなのかな？」

「え？」

「いやー、まさか女の子の着替えを覗こうとするなんて悪い奴だね、キリト君？」

「な、なんで俺の名前を……あ！」

俺はからかうときの笑顔をする。それで確信したのでだろう。

「お前シンかよ！分かりづらいアバターにしてんじやねえよ！」

「やかましい、俺だつて好きでこんなアバターになったんじやねえ」

そこで着替え終わったシンノンが戻ってきた。

「あれ、シンばらしちゃったの？」

「おう、付き合ってくれてありがとな」

「別にいいわよ」

「えつと…もしかしてグル？」

「ええ、そうよ。シンからあなたが男と言うのは聞いていたわ」

この言葉を聞いてキリトはorz状態に移行した。

「いやー、面白かったぜお前の必死の女装！」

「うるせー！」

俺は構わず笑ったがシノンは流石に悪いと思ったのか忍び笑いですごそうとした。シノンよ、充分に酷いと思うぞ。取りあえず俺はキリトを引っ張り男性更衣室へと行った。人がいなかったのは幸いだ。

「シン、死銃らしいプレイヤーはいたか？」

「…いや、まだ見てない。取りあえず予選を勝ち抜いてあつちから接触してくるのに賭ける」

「分かった。接触したら報告な」

「分かってら」

戻るとシノンが一人の男性プレイヤーと話していた。その光景を見た時心が少し痛んだが俺は気付かなかった。また同時に嫌な予感がした。それもこの世界に来て何度も感じたものだ。

「キリト、俺少し隠れるわ」

「は？何で？」

「俺の精神衛生上良くないことが起こりそうで」

「？分かった」

俺は少し離れた所に行き様子を伺った。どうやら予感の中のような。恐らく熱く俺の事を語っているのだろう。余りの熱意に二人は引き気味に、俺はまたかという思いで涙を流す。ああ神よ、なぜ俺にこのアバターを与えたのか。恨むぞ神よ。俺は彼が二人の前からいなくなるまで息を殺し隠れていた。戻ったとき二人はぐったりとしていた。マジですまん。

第九撃

一つの嵐をどうにかやり過ごした俺は直後に来た追撃の嵐の渦中にいた。

「あんたの／お前のせいだぞ！」

「わ、悪かったって……」

キリトとシノン（犠牲）に現在進行形で責められています、助けて……

「助けは無いぞ」

「お前やっぱエスパーだろ」

もうなにそれチート。

「とりあえず大会終わったら奢ってもらおうよ」

その言葉に俺だけではなくキリトも口を噤んでしまう。忘れていたわけではないが俺達は文字通り命がけの戦いに身を投じているのだ。シノンのこの一言は当たり前に出るようでは絶対ではない。

「……ああ、絶対に奢るよ」

何気ない一言にまさか改めて覚悟を決めさせられるとは思わなかった。思いのほか気持ちの入った言葉にシノンは少しキョトンとしている。

「そ、そう…期待してるわよ」

「おう」

生きていればな、と言う言葉は飲み込む。

「そーいやシンはブロックはどこだったんだ？」

「俺か？Aブロックだよ。お前は？」

「Fブロックだった」

「キリトもなの？」

「シノンもFか」

「ええ、にしてもシン、あなたまたすごいところを引いたわね」

「やりがいがあつてよろしい」

「どういうことだ？」

「Aブロックは別名強者潰し、エントリーが早い言わばトッププレイヤーが集中するブロックなんだよ。その分本物が生き残るがな。前回優勝のゼクシードと準優勝の闇風もこのブロックだった筈だ。今回は別ブロックに闇風は行ったらしいが」

そしてゼクシードは現実世界からログアウトしてしまったからいい。

「すごい所に入ったんだな…生き残れるのか？」

「…それは本気で言ってるのか？」

「…悪い、愚問だった」

キリトが訂正した理由、それは俺が対人戦ならほぼ無敵という事だ。モンスター相手ならキリトに軍配が上がるがことPVP、PKで俺に勝てるのはあの殺人鬼位だろう。負ける気がしないが。裏技もあるし使いたくないが切り札もある。

「あなた達すごい信頼関係ね」

シノンの言葉に顔を見合わせる。互いに似た笑顔で笑う。

「色々あつたからな、ホントに」

「そうだな、本当に…」

「?ふーん、そう…」

なんだ? あつちから聞いてきたのに微妙に機嫌が悪くなった気がする。どうかしたのかと聞こうとした時アナウンスが響く。始まるようだ。戦いが。

「絶対に生き残るぞ」

「当たり前だ」

「当然ね」

俺達は光に吞まれそれぞれの戦場に転送された。

あの二人は本当に信頼し合っているようだった。互いを疑わず迷いなく背中を預ける事が出来るのだろう。私はそれに対して少し、ほんの少しだけ嫉妬をした。シャドウはいつも一人、そんな人にただ一人フレンドとして登録され自分は彼にとってそれなりに特別なのだと思っていた。だけど絶対に届かない場所にキリトはいた。だからそれが羨ましかったし、シンに気付いて欲しくなった。私にとってあなたは他とは違う人間なのだ。

―だったら気付かせてやる、この大会で私の「強さ」を見付けてそれを見せつけてやるわ

私はその思いを弾丸に込め対戦相手に必殺の弾丸を叩き込んだ。

シン、シノン、キリトはともに破竹の勢いで勝ち進んでいった。シンは相手に悟らせ

ず何時終わったのか分からないように、シノンはどこから撃ったのか分からないように、それでいて挑発的に大胆に、キリトは常識外れの「弾丸を切り裂く」という芸当で相手を驚愕に叩き落とす。特にシノンとキリトは今のところ一度も銃声を鳴らしていない。余りの異常に観客は静まり返る。そしてそんな空間に二人のプレイヤーが空中に浮かぶスクリーンを見上げている。片方には底知れぬ憎悪と荒れ狂う怒りが、もう片方はどこまでも冷淡に、静かに、だが確かな殺意を持つて。

「ビーター……まさかこんな所で会えるとはなあ、待つてろよお、絶対に殺してやるからよお……」

男は濁り切った眼を黒髪の長髪、黒瞳の光剣使いに向けている。その男をチラリと赤い目の下で冷たく見やり、スクリーンの中のフードを被った偶に見え隠れする白髪と紫瞳のプレイヤーを注視する。

「シノン、お前は、俺が必ず、殺す」

静かに、だが確かに盛り上がり始めた大会の闇に不穏な影が忍び寄る。

俺は強者がひしめくAブロックをどのブロックよりも最初に制覇した。俺の周りには誰も近づかない。どうやら俺がシャドウと言うのは気付いたらしいがどうやって手がやられたのかが分かってないらしく不気味がついているらしい。

「普通に近づいて切ったり貫いたりしてただけなんだけどな…」

ただその精度が以上に高いだけである。

「唯一プロがいるゲームなら分かるやつがいても良いと思うんだが…」

俺はスクリーンを見ながらそんなことを考える。スクリーンの中ではキリトとシノンがやりあっている。シノンの銃撃をキリトは真正面から叩き切っている。周りの観客はサーバーに数十丁しかないレア銃の弾丸があっさり切られていることに啞然としているがシノンはあくまで淡々と冷静に対処しながら撃っている。キリトもおかげで今一步踏み込めていない。

「伊達に俺と一緒に戦ってなかったみたいだな」

小声でキリト相手に善戦しているシノン进行分かりづらい言葉で称える。それでもおそらくこの戦いはキリトが勝つだろう。この世界は確かに殺伐としていて全VRMMORPGの中でも屈指の難易度だろうがやっぱりあのデスゲームとの差は大きい。死んでもいいゲームなんてぬるい。それがおれとキリトの共通認識だ。あの世界の全てが本物で残酷だった。

「例えば今俺の後ろで殺気を送ってる奴がいたとかな。

俺は立ちあがり迷わず進んでいく。殺気の根源にたどり着く。ボロボロのロープを羽織り、フードの中には輝く赤い目が二つ。

「よお、久しぶりだな死銃。いや、ザザ」

「…気安く、俺の名を、呼ぶな。臆病者」

臆病者はラフコフ内での俺の呼び名だ。

「おーおー嫌われてるようで安心したよ、俺も大嫌いだから丁度いいじゃねえか」

「口が、回るように、なったな。現実世界の、腐った、空気を、吸って、頭が、逝ったか？」

「生憎こつちが素でね、お前らみたいな屑連中から離れた後は気分よく過ごせるようになったんだよ」

「能天気な、ものだ。これから、死ぬというのに」

「俺は死なねえよ。代わりにお前らが監獄にぶち込まれるだけだ、現実のな」

「ほう、お前らと、言ったか。腐った空気を吸つても、犯罪者、としての、考えは、健在の、ようだな」

「そりやお前らの先輩だかな」

「…俺や、ジョニーより、少し、早いだけで、先輩面か」

「(ボソツ) …そういう事じゃ無いんだがな」

「何を、ぼそぼそと、言っている」

「お前らへの悪口だよ、それよりいいのか？こんなに長く話していると〈視〉ちまうぞ」

「…すぐに、終わらず、お前を、殺す、ために」

「そーかい、なら精々頑張るな。俺としてはそのまま負ける事を願うぜ」

「言っている、臆病者」

そう言い残し死銃：ザザは立ち去って行った。

ーあいつ…明らかに強くなっていった。多分討伐戦のP O Hクラスには…

討伐戦で監獄に入れられてからクリアまで何千、何万と反復練習をしたのだろう。P

O Hと一緒にの時とは挙動も気配の殺し方も殺意も段違いに上手く、強くなっている。

ー…戻らなきゃならないかもしれない、例えシノンに知られようとも、キリトにぶ

ん殴られようとも。

戻る、それは俺が最も忌避している切り札で罪だ。消し去りたい過去で、だけど消えない。拭きたい恐怖で、一生纏わり付く。シノンには強さを見付けたと言った。だがそれは過去を乗り越えたという事ではない。それに俺の強さはまだ未完成だ。俺の強さ、それは憧れだ。俺はキリトやアスナ、リズやシリカ、クラインにエギル、あいつらの様に誰かを支えられるようになりたいという願望だ。俺はいつも周りの奴…特にキリト

に支えられてきた。キリトが俺を引つ張らなきや俺はとつくに潰れていただろう。だから感謝と共に渴望ともいえる憧れを抱いたのだ。誰かを心の底から支えたい。それが俺の強さ…

「…ン、シン！」

「ん？おう!!」

目の前に黒髪美少女が…じゃなくてキリトがいた。どうやら周りが見えなくなるほどに考え込んでいたらしい。

「どうしたんだよボーとして」

「…死銃に会った」

「!!? (本当か?)」

「(ああ、ついでに予想通りSAO生還者だった)」

「(…ラフコフか)」

「(当たり前だ、赤眼のって言えば分かるか?)」

「ザザ…」

キリトの顔が厳しくなる。恐らくキリトにとつても浅からぬ因縁らしい。

「見た限りかなり強くなっていた、恐らく討伐戦のPohクラスだ」

「そんなに…」

キリトは驚愕に顔を染める。この戦いは厳しいことになるだろう。

「キリト、明日の本戦はあの世界と同じだ。死ぬなよ」

「…当たり前だ、シンも死ぬなよ」

俺達は拳を合わせる。これをやる度に思う、こいつと会えて良かったと。

「そういえば決勝はどっちが勝ったんだ？」

「見てなかったのか？それは…」

「私の負けよ」

突然後ろから声をかけられた。

「びっくりしたな、シノン。気配の殺し方が上手くなってるがこれ如何に？」

「なによその言い方…あとあなたといれば嫌でも上手くなるわよ」

なにそれ俺ウイルス？

「何故自分を病原菌に例えるのかが分からないんだけど」

「俺の周りにエスパーが増えてる件について」

いや真面目に何故こんなにエスパーが増えてるの？俺の読心術の価値薄くなってるな

い？

「と言うかシン、あなたの周りには規格外しかないの？ヘカートの弾を至近距離から避けたあなた然り、キリトも弾丸切るなんて神業見せたのだけど」

「キリトは例外、そう言うシノンもあんま動じてないように見えたけど?」

「あなたと言う規格外をすぐ近くで見えてきたからね、驚きはしたけどすぐに冷静になれたわ」

「対処が正確だったからやり難くて仕方が無かったよ。最後なんてとにかく突っ込んで切るの猪戦法だったからなあ」

「お前はそれが一番だろ」

「違うない」

互いに声を上げて笑う。すぐそばでシノンが訝しげな顔をする。

「ねえシン」

「なんだ?」

「すぐく不躰な質問なんだけどもしかしてあなたはあのゲームに…」

「ストツプシノン」

シノンが言おうとしてる事はもう分かっている。キリトも同様だ。でも今は…

「今は話す時じゃない、いつか必ず話す。だから今は聞かないでくれ」

真っ直ぐにシノンを見据える。今シノンは聞くべきでは無いのだ、何かを掴みかけているシノンは。

「…そうね、ごめんなさい。軽々しく聞く事じゃ無かったわね」

「分かってくれればいいさ」

そこまで言うとはアナウンスが掛かる。どうやら全予選が終了したようだ。

「…明日だ、明日で全てが決まる」

「…そうね、シン、キリト」

「うん？」

「なに？」

「明日は負けないわよ、あなた達の頭に大きな風穴開けてあげるわ」

「…言うじゃないかシノン。受けて立つぜそれ。なあシン」

「当然だ、俺が優勝するさ」

三人して不敵な笑みを浮かべる。確かな約束を交わし、俺とキリトは拳を合わせシノンを見る。シノンも少し驚いたようだがその拳を俺とキリトに重ねる。絶対に生き残る。その覚悟を胸に。

第十撃

窓からの日差して目が覚める。部屋を満たす冷気が意識を起さんと働く。目に映るのはGGO内のホームでは無く見慣れた自分の部屋の天井だ。昨日俺は予選を終えた後寝落ちを敢行しログアウトをした。現在朝の五時半、…早く起き過ぎた。

「…走るか」

手早く着替え簡単な朝食を摂る。一度外に出れば冬の厳しい寒さが待っている。朝のランニングは日課と言うわけでは無いが早く起き過ぎたり時間に空気があれば筋トレなどを行っている。鍛えておかないと何かの拍子でリミッターが外れた際に筋繊維が目も当てられない状態になるからだ。

「…寒いなあ」

冷やされた頭で思い出すのは昨日の死銃との接触だ。我ながら大胆な挑発に出たと思う。あいつはおそらく本気で俺を殺しに来るのだろう。そして…

「ターゲットには朝田さんが含まれている可能性がある」

「どうやって住所を調べ上げたのかは分からないが隣でGGOプレイヤー、更にはBobにも参戦している。今までに殺された二人に共通するように俺と同じ一人暮らし。」

―菊岡に相談してみるか…

頭の中で悶々と考えながら半ば自動的に走り続けた。

結局一時間以上走り続けこの寒さの中汗でビショビショになってしまった。

「やばい…風邪引く…」

風邪を引いたままでは本戦の方に響く、俺はさっさとシャワーを浴びて体を温める。冷えた体に熱いシャワーが染み渡る。浴室を出てから俺は菊岡に電話を掛ける。

『もしもし?どうしたんだい?』

何やら遠くから低い機械の音が聞こえる。こいつ今何処にいるんだ?

「今回俺に付ける護衛って何人なんだ?」

『人数かい?二人だよ』

「…倍に増やす事は可能か?」

『…いや、すまない。これ以上の増員は出来ないんだ。上が気にしているから君たちに頼んだんだがその上から圧力が掛かってね、仮想課の人員を引っ張り出せないんだ』

「どういう事だ？」

『僕も良く分かつて無いんだがどうやら議員の一人が上層部を抑えていてね』

「国が圧力を掛けてるのか？」

『いや、あくまで一議員でらしい』

「名前は分かるか？」

『倉田次郎議員、汚職が騒がれてる人だよ』

「なるほど……」

倉田次郎、記憶では確か仮想課の敵で敵の最右翼。

「どうにかならないか？」

『君の要望なら手を尽くすけど……でもどうしてなんだい？』

「…死銃のターゲットになってるかもしれないプレイヤーがお隣さんにいるんだ」

『!?!:分かった、早急に手を打とう』

「すまないな、次奢ってもらうときは五個にしといてやるよ」

『奢られる前提なんだね……』

俺は菊岡との電話を切って普段サバゲーに使う電動ガンをしまつてある押し入れを開ける。そこには大小様々な電動ガンがしまつてある。だが一つだけ明らかに電動ガンではない物がしまつてあつた。俺はそれを手に取る。

「お前に頼るしか無いよな…」

手の中のそれに目を落とし静かにそれをアミユスファイアの側に置いた。

私はコンビニに行つて大会前の簡単な食事を買いに行つた。どうやってシンやキリト…特にシンに勝つかを考えていながら歩いていると新川君に会つた。話がしたいというので帰り道にある公園によつた。

「とりあえず予選突破おめでどう朝田さん」

「ん、ありがとう」

「にしても最後の戦いは惜しかったね、もう少しであいつに風穴開けられたのに」

「まあね。でも大丈夫、今日の本戦ではちゃんと大穴開けてやるから！」

「あはは、シノンらしいや！」

新川君はひとしきり笑うと顔を悲しそうに歪めた。

「あーでも何で僕はシャドウに会えないんだろ…」

確かにシンは人を意図的に避けているところがあるが…

「予選の映像で見れるんじゃないかなかった？ 予選前に『シャドウが見れる！』って言ったじゃない？」

「あー、うん。そうなんだけどね…」

新川君はそこで一度言葉を切る。するとバツ悪そうに

「シャドウの二つ名しか知らないからどのブロックに出てるか分からなくて…」

なんともまあ初歩的なミスだ。アバター名が分からないなんて…いや、シンは徹底的に隠していたから知っている人の方が圧倒的に少ないか。そう思うとシンを知っている私は信頼されると思い胸が高鳴り顔が熱くなる。…あれ？ これって…

「朝田さん？ どうしたの？ 顔が赤いよ？」

「え？ あつ、ううん！ 何でもない！」

「…そう、でも本当に残念だよ。一回で良いから会って話がしてみたい」

「うくん、彼相手には厳しいんじゃないかなあ…」

「だよね…ん？ 彼？」

「あれ？ 言ってなかったっけ？ シャドウって男よ、M9000番のアバターって言った」

あ、新川君固まっちゃった。

「……冗談だよね？」

「え？いや、本当だよ」

「……そっか」

「新川君？」

「何？」

「あ、ううん。なんでもない」

今凄い怖い顔をしたように見えた…

「朝田さん」

「な、何…？」

「あのさ、僕と付き」

「待って」

私は鋭く新川君の言葉を遮る。

「今その言葉は聞きたくない。私は強くなりたいの。だからそれまでは聞けない。私が過去に勝てたら聞かせて」

「…分かったよ、確かに今言うのは不味かったよね」

「ありがとう…」

口ではそう言ったけど私は新川君の事はこの町で出来た最初の友達だと思っている。

それ以下でもそれ以上でもない。今私は強くなつてシンに認められたいだけなのだ。だから告白されてもそれに答える事は出来ないだろう。

「じゃあ僕は行くね。本戦、頑張つてね」

「当然、絶対に優勝するわ」

私達はそれぞれの帰路に着く。これが最後の“友達”としての会話と知ったのはもつと後の事だ。

シノンとずっと一緒にいた二人、どっちも女の子と思つていたけど黒髪の方、キリトとか言う奴は男だった。でももう一人は女の子と思つていた。シノンは友達が少ない、だから女の子の友達が出来るのは良い事だと思つた。その女の子といた時のシノンはとても生き生きとしていて女の子らしかった。その表情が僕に向かなかつた事には少し嫉妬したがその顔が見れるだけで良かった。優越感すらある。だってシノンの心の中心にはいつも僕が居るから。なのに、そいつは男だった。許さない、僕のシノンを誑かして、どうせシノンの体目当てだろう。守らなきや、シノンにあんな男は相応しくな

い、シノンに…朝田さんに相応しいのはこの僕だ。あんな男、死んで当然だ。

予選一時間前、俺は総督府でキリトを待っていた。話しておきたいことがあったからだ。

「悪い、シン。遅れた」

「いや、そこまで待つてないさ」

「それで、相談つてなんだ？」

「ここじゃなんだ、中に行くぞ」

俺とキリトは会場内にある個室に入った。

「それで？」

「ああ、死銃のターゲットの一人が分かったかもしれない」

「!?誰なんだ？」

「お前も知ってるよ」

「…まさかシノンか？」

「そうだ」

「でもなんで…」

「俺もかなり最近知ったんだが実はお隣さんだったんだよ」

「…マジか」

「マジだ」

「でもなんでそれだけでターゲットだって分かったんだ？」

「かもしれない、だ。条件が死んだ二人と一致してんだよ」

「条件？」

「一人暮らしで家の鍵が旧型の電子ロック、加えてGGO最強の女スナイパーの異名も持ち知名度もある」

「…なんで死んだ二人が旧型の電子ロックだって分かったんだよ」

「菊岡が渡したタブレットに書いてあったろうが」

「…読んで無かった」

「お前って変な所抜けてるよなあ…」

バツ悪そうなきリトにジト目を向ける。

「まあいいや。それでお前に頼みたいことがあるんだ」

「もしかしてシノンの護衛か？」

「正解、誰かを守るの一点に関してはお前が適任だ」

「バリバリの攻撃専門ダメ！シテトラなんだけどな」

「俺にはお前みたいに銃弾を切るなんて芸当は出来ん」

「ピックで撃ち落とすとかは？」

「……やった事ないから分かんないが出来る気がする」

「剣よりよっぽど難易度高いからなそれ！」

ああ、でもだつたら銃で撃ち落とした方が良いか、威力的にもその方が良いだろうし。

「はあ、まあ分かったよ。護衛は任された。シンはどうするんだ？」

「全力でザザを見つけて出す」

「簡単に言うなあ…確か直径十キロのフィールドだろ？」

「そうだがお前より探すのは得意だし何より隠密行動が得意だからな、誰かに見つかる

前に確かめられる。適材適所だよ」

「…そうだな。了解、その手筈で行こう」

「おう、頼むぞ親友」

「そつちもな、親友」

俺とキリトは拳を合わせる。信頼の証を見せつけて。

新川君と話していた時、シンを思い出して胸が高鳴り顔が熱くなった。いくら友達が少ないなくても私も女の子だ、それ位は分かる。

―でも違う！これは…そう！強い奴と戦うときの高揚感！だからそういう感情は無い！

心の中でそう何度も叫び平常心を取り戻そうとする。しかしそれに夢中になり私は気付かなかった。

「シンン」

「うひゃう!!」

「う、うひゃう?」

振り返るときさっきまで必死に心の中で否定していたシンに会ってしまった。するとさっきまで考えていたことがぶり返し顔が赤くなってしまふ。

「どうした? 顔赤いぞ?」

「な、何でもない!」

…自分は何時からこんな乙女になったのだろうか? 自分にはこんな感情など無いと

思っていたのに。

「そ、そうか…えーとシノン、ちょっと聞きたいことがあるんだが…」

私は一つ深呼吸をして心を落ち着かせる。

「なに？」

「とりあえず来てくれ、キリトを待たせてるんだ」

「あ、うん…」

二人じゃないのかと落胆してまたそれに自分の気持ちに気付かされもう頭がぐるぐるしてきて大変だった。

俺はシノンにキリトと行動してもらおうようにお願いするのと大会初参加の人を聞くためにシノンを探していて見つけたのだが、声を掛ければ奇声を発し更には現実世界よりも感情表現がオーバーになるとはいえ見事に顔を赤くしてしまった。

ーどこか体調が悪いのだろうか…

本戦前にリタイア、と言うのはある意味では望ましいのだがシノンには絶対に良しとはしないだろう。出るというならば万全の体調で出てほしい。

「なあ、どこか体調でも悪いのか？」

「え？ううん。体調は万全よ」

「そうか？なんかいつもと違う気がするんだが…」

「き、気のせいでしょ！」

「そ、そうか」

おお、力強く否定されてしまった…でもこれなら大丈夫…か？

「シンー！」

「あれ？キリト」

どうやらいつの間にかキリトのいる所にたどり着いていたようだ。考え事をするとなら、周りが見えなくなるのは俺の悪い癖だな。

「悪い悪い。でだ、シノンに聞きたいことが二つあるんだが…」

俺は左手を振りメニユーウインドウから本戦出場者一覧を呼び出す。

「この中にシノンの知らないプレイヤーは何人いる？」

私はシンの質問の意味がいまいち掴めないでいた。しかしシン、キリトの目は真剣そのものだった。

「何でそんな事聞くのかは分からないけど…五人ね」

「それは誰なんだ？」

キリトが若干緊張させながら聞いてきた。

「えーと…ギャレット、ペイルライダー、銃士X、それとこれはステイブレン？かな？あとアヴェンジャーね」

sterven…唯一読めなかったけどスペルミスかしら？

「シン、この中に…」

「ああ、あいつがいる」

「？何の話よ？」

「こつちの話」

「こんな変な事聞いているんだから教えてもらっても良いじゃない」

「…ごめん、今は話せない」

「どうしても？」

「どうしても」

「…はあ、分かったわよ。昨日もそのことで話したしつくくは聞かないわよ」

「ありがとう、助かるよ」

「それで？もう一つは？」

「あー、うん。それは…」

どうしたのだろうか、さつきと違って言いにくそうだ。

「昨日シノンと俺達に勝つて言ったよな？」

「ええ、言ったわね」

「邪魔は入って欲しくないよな？」

「…それはもちろん」

何だろこの先の言葉が分かった気がする。

「だからその…最後の三人になるまで協力しないか？」

なるほどなるほど理屈は分かる、で？

「具体的には？」

「キリトと行動してもらってその間に俺が片づける」

……はあ

「ふざけないで!!」

「で、ですよね〜…」

分かってるのに聞いたの？

「私はあなた達に助けられなくても生き残れる！甘く見ないで！」

さつきまで浮ついた考えが頭にあっただけでもうそんなもの吹き飛んだ！絶対に風穴開けてやる！

「本戦で首洗って待ってなさい！その頭吹き飛ばしてやる！」

「あ、シノン！」

私は二人に背を向け歩き出した。

「…どうするんだ」

「…どうしようかね」

俺とキリトは半ば予想していたがそのまんまの結果になってしまったので軽く放心してしまっていた。

「プランBでいくか」

「ええ〜マジで？」

「シノンの安全には変えられないだろ」

「そうだけだよ…」

プランB、それはシノンが協力を断った場合を想定した作戦だ。ちなみに協力してくれた場合はプランAとなっている。内容は役割を逆転させてキリトが探索、俺がシノンの護衛と言うものだ。しかしばれる訳には行かないので身を隠し影ながら守る、という難易度高めの作戦だ。しかもサテライトスキャンもあるので十五分ごとには違和感のない距離まで離脱するしかない。要約すれば…

「そんなストーカーみたいなのマネしたくねえなあ…」

これが俺が渋っている理由だ。仕方が無いとはいえ犯罪者もどきになるのだ。

ーまあ犯罪者だけだよ…

心のどこかで今さら、と考えているので余計自分に幻滅してしまう。

「まあがんばれ！」

「お前面白がってるだろ！」

もうこうなったら徹底的にやってやらあ!! (自棄)

第十一撃

バレットオブバレッツ／B o B本戦開始五分前。シンとキリトは作戦の最終確認を行っていた。

「ザザはボロボロのフード付きローブを被っていると…」

「ああ、特徴的な赤目はそのまんまだ」

「そこまでこだわってんのかよ…」

「お前も黒こだわりじゃねえか」

「いいだろ、好きなんだから！」

冗談を交えながらも真剣に話し合う。本来なら冗談は無い方が良いのかもしれないがこうでもしないと二人は緊張に押し潰されてしまいそうになる。しかし二人とも決して折れない芯がある。『自分の手で決着をつける』その思いを心の中心に据え支柱とする。だがシンはもう一つ絶対に、その支柱よりも大事なものを心に突き立てていた。『絶対にシノンを守りきる』何故この思いが心の中心にあるのかシンはまだ分かっていない。だがそれはかつてキリトがシンを救い出したという事と同じくらいシンにとって大きな変化のきっかけとなる。

「とにかく見つけたら合図してくれ」

そう言つてシンはキリトに発煙筒を渡す。

「これ他の奴が寄つてこないか？」

「その分ザザも動きにくくなるはずだ」

「なるほど」

キリトは発煙筒をアイテムストレージにしまう。

「まあ俺は良いとしてだ、シンは大丈夫なんだよな？」

「当たり前だ、隠密行動で俺の右に出る奴はいないぜ？」

「俺結構な割合でお前見つけてる気がするんだけど」

「それはお前の感覚が鋭すぎるだけだ！」

キリトや、お前も結構なチートぞ…

「じゃあこっちは？」

そうやってキリトは自分の胸を差す。

「…大丈夫だ、菊岡から依頼受けた時から腹括つてる。心配しなくていい」

「…そうか」

キリトはまだ心配そうな目をシンに向ける。

「お前はやっぱり優しいよな、自分も同じ罪が押し掛かっているのに俺の心配をしてくれ

るなんて

シンは改めてキリトに深い感謝の念を抱いていた。だからこそ固く誓う。

―だから絶対に死なせたりはしない、俺が命に代えてでもキリトとシノンを守り抜く

：

静かに、決して揺らぐことのない意志でシンは自分を奮起させる。

自分の指がしっかりと動くかを確認する。：問題無い。何時でもあの二人に風穴を開けられる。

―私は一人でも生き残れる！それを証明してあげるわ、シン：！

私は装備の点検を余念なく行う。おそらく自分は最後の数人には生き残れるだろう、だがキリトとシン：特にシンに勝つには並大抵の実力じゃ撃たせてもくれない。だからこそ使えるものとはとことん使う。私はもう一度アイテムストレージを開き持ち込むアイテムを再度確認をする。予備の弾倉に回復ポーション、シン対策に麻痺解毒のポーション。そしてシンにもらった私に最適なアイテム。

「例えそれがシンからの初めてのプレゼントだとしても…」

私はそれを実体化させ胸に抱え込む。そうすればシンの力が私に流れってくる気がした。シンに勝つためにシンを頼る。矛盾しているが私はそれでもいい。

「絶対に勝つわよ、シン…!」

でもその時私は気付かなかった、大きな悪意が私を包み込んでいた事に。

それぞれの者がそれぞれの思いを胸に戦いに身を投じる。ある者は過去と決着を付けるために、ある者は自身に屈辱を与えた者に復讐するために、ある者はかつて殺せなかった者を殺すために…ある少女は自身の強さを見せ付け心惹かれつつある者を見返すために、ある青年は自らの贖罪と断罪、そして守る為に戦う。様々な思惑が交錯する最強決定戦、バレットオブバレッツが今始まる…!!

転送された場所は廃墟地帯だった。フィールドの中央に位置するここは一つの巨大な廃墟で身を隠すには最適な場所でもある。

「すぐ動くけどな」

俺は携帯端末でそれぞれの居場所を確認する。15分ごとに居場所を送信してくれるサテライトは始まった直後はそれぞれのスタート地点が写される。

「さてと、シノンは…ん？」

背後から嫌な予感がする。ザザ…ではない様だ。

ーなら問題無い

直後銃弾をばら撒く音がする。俺は後ろを見ずに回避する。それも全弾。

「…はい？」

「残念でした」

俺は高速移動をして敵の視界から消える。向かう先は敵から少し離れた壁だ。

「は、え？どこいった!？」

俺はそのまま速度を落とさず壁を駆け上がる。と言ってもこの世界じゃどう足掻いても7メートルが限界だ。俺は5メートルほど駆け上がり敵の真上に跳躍する。相手

はまだ気付かない。そして一刀二閃。首と胴を切り落とし、音も無く着地する。

「相手が悪かったな、お疲れさん」

三つに分かれた敵に一言、可哀想な事に開始三分でDEADタグがついた敵にとりあえず合掌。俺はとりあえずその場を離脱して携帯端末を確認する。写るのはスタート地点だが十分だ。

「シノン……森林エリアか、鉄橋に向かうかな？間にひいふうみい……四人。これなら減らしながらも行けるな」

俺はシノンが潜むと予測する森林エリアに向かって走り始めた。

始まっておよそ三十分。スタートから合わせて三回目のサテライトスキャンだ。確認するとタイミングよくこちらに二人のプレイヤーが走ってきていた。名前を確認すればシンと出会う切っ掛けになったスコードロンのリーダー、ダインだ。私は冷静にこちらに来るときに通るであろう鉄橋にヘカートを向ける。ダインはどうやら追いかけてらるので意識を追いかけている方に向けるはず、その隙に不意打ちで弾丸を叩き

込む。そう言えば追いかけているのは誰だろうと思いついてみると

「ペイルライダー……」

シンとキリトが聞いてきた初参戦のプレイヤーの一人。どんな姿でどんな装備なのかは分からない。

「でも関係ない。どんな奴だろうが私の標的に変わりはない」

私は獰猛な笑みを浮かべ鉄橋を見据える。だが、

「!!誰!?!」

私は背後に気配を感じ腰のH&KMP7A1を抜き背後に照準を合わせようとするが、

「あ、あれ?」

そこには誰もいなかった。

「おかしいわね、今確かに……」

そう、確かにいたはずなのだ。シンといた事により今の私は集中すれば半径十メートルならスキル無しでもいるかいないか位は分かるようになった。それで気配を感じたのにそこにはいない。すると

パァン!

「え?あつ!しまった!」

私はスコープを覗きこみ鉄橋を見る。そこには仰向けに倒れDEADタグを浮かべているダインとショットガンらしき物を構えているペイルライダーと思われるプレイヤーがいた。

「狙撃のタイミングを逃したか…」

だが次の瞬間ペイルライダーが右に吹き飛んだ。

「な!?!狙撃!?!一体何処から!」

ペイルライダーが吹き飛んだ方向からすれば左の方向にいるはず。慌てて左を確認するがそこには錆びれた鉄橋の一部と川のみ。

「一体…」

再びペイルライダーの方にスコープを合わせるとそこにはいつの間にかボロボロのフード付きのローブを着たプレイヤーがいた。

「何時の間に…」

しかしどうして起き上がらないのだろうか、そう思いペイルライダーを注視すると

「電磁スタン弾!?!そんな高価な物をプレイヤー相手に使うの!?!」

余りの無駄遣いに驚愕しているといきなり横から声が聞こえた。

「シノン、撃て」

心臓が止まるかと思った。そこには双眼鏡片手のシンがいた。それも今までで一番

切迫した顔で。

「い、いつから…」

「それは後だ！早く、早くあのボロマントを撃つてくれ！」

余りの気迫に私はただ言われるままにボロマントに銃弾を叩き込まんと引き金を引く。しかし

「なっ…」

ボロマントは当たる前に体を逸らしその弾丸を避けた。

「あの野郎既にこっちを視認してやがった！」

スコープの先ではボロマントがキリスト教の様に十字を切っていた。そして腰から一つの拳銃を取り出す。

「—どういうこと？倒すならさつき使ったスナイパーライフルの方が良いのに…」

弾代をケチっているのだろうか？

「やめろ…」

「シン？」

「やめろ！ザザ!!」

「—ザザ？」

シンは立ち上がり大声を上げる。まるで誰かが殺すのを止めようとするように。そ

して

「あ……」

ペイルライダーがボロマントの放った弾丸を胸に受けた。でもHPはそこまで削られていない筈だ。なのに

「ちくしょう……」

シンはなんでこんなに悔しそうに顔を歪めるのだろう。

「シン、なんでそんな悔しそうにするのよ。今すぐにもペイルライダーは起き上がって反撃するはずよ？」

私の言葉の通りペイルライダーは即座に起き上がりボロマントにシヨットガンを押し当てる。だが何時まで経つても銃声が響かない。そしてそのままシヨットガンが手から落ちる。空っぽの手は胸に向かい苦しそうに握る。その瞬間ペイルライダーは消えた。回線切断のようだ。

「なに、今の？あいつは撃ったプレイヤーをログアウトさせれるの？」

「違う」

シンが断言した。

「そんな生易しいものじゃ無い」

「……どういふこと？」

「あいつは、死銃は今さっきペイルライダーを操っていた人を殺したんだ」

私はシンの言葉に凍りつく。頭ではありえない、与太話だと否定できる。でも体が、心が本当の事だと叫んでいる。逃げろ、この場から、この世界から、シンと一緒にいて知らずに鍛えられた直感があのポロマントと関わるなど警鐘を鳴らす。

「シンは、知っていたの？」

もしかしたらキリトと二人で話していたのはあのプレイヤーの事だったのかもしれない。

「…すまない、本当なら大会前に話すべきだった。その上で辞退してもらいたかったんだ」

当然だろう、そんな危険な事になっているなら止めようとして当然だ。

「でも俺はシノンの思いを優先してしまったんだ。本当に、心の底から強くなりたいと思っていた君の思いを」

そこまで考えてくれていたのか。私の思いを第一に考えていてくれた。それはこの戦いで私は強くなれるという信頼なのだろうか。

「でもすまない。シノン、お願いだ。頼むから大会が終わるまで隠れていてくれないか？俺は君を失いたくない」

その言葉に私は固まる。隠れる。それは逃げてくれと同じ意味だ。また逃げなきや

ならないのか？

ーいや、私は、私は…

「あなたはとうするの？」

「…俺は奴を追う。これ以上被害を出さないように
やっぱりだ。」

「私も戦う」

「シノン！」

「私は逃げる為にここにいるんじゃない!!」

「シノン…」

「それに危険なのはあなたも同じでしょ？」

シンは項垂れ一つ深呼吸をした。

「…分かった。でも絶対に離れるな」

「場合によるわね」

私は獯猛に笑う。

「言うと思った」

シスが拳を付き出す。私はそれに拳を重ねた。

「てか結局俺達と組むんじゃない
「そこには触れないで」

第十二撃

始まって約三十分、俺、キリトは田園エリアにいるのだが…

「いくらなんでもこの仕打ちは無いだろおおおおお!!」

現在二人のプレイヤーに集中砲火されてます。どうやら俺とシンの様に二人一組になつて参加者を削るようである。

ー弾は切れないことも無いけど二方向はきつい!

丁度俺を挟むように位置しているのでどっちかに集中することも出来ない。予選の映像で研究されたようだ。

「へっへっへ、悪いがここで脱落してもらうぜキリトちゃんよ」

「お前さんの代わりに優勝してやるからよ」

ー余裕そうですねそちらは!絶対吠え面かかす!

俺はこの大会初めてファイブセブンを抜き片方の男に三発撃つ。二発は大きく外れたが一発が運よく頭に当たる。しかしヘルメットがあつたので削り切るには至らなかつたようだ。だが

「うおー!」

銃撃が片方止む。

「今だ！」

俺は現在撃ち続けている方に特攻する。もちろん見せつける様に弾丸を切り裂くのも忘れずに。

「う、うそー！ー！ー！？」

「わははははは！驚け戦おの慄けひれ伏せ！ー！ー！ー！ー！！
容赦なく胴を一刀両断。

「グボッ！」

DEADタグが付く。その時もう片方が立ち上がる。

「え？あれ？…ひっ！！」

俺は幽鬼の如く振り返り断末魔も許さず速攻で切り捨てる。

「ああく…疲れた…」

まだ始まったばかりかと言うのにこの疲労感、先が思いやられる。

「とにかく探しに行かなきゃな」

俺は一步踏み出した、その時

「!!？」

体に凄まじい悪寒を感じた。同時に確信する。

「俺は……これを知っている！」

「いつだ？いつこの悪寒を感じた!?俺は記憶野を最大限動かし記憶を探る。だがいくら探しても思い出せない。いや、思い出したいくないのか？」

「く!!」

俺は周囲を素早く見渡す。田園エリアに障害物は少ない。なのに何も無い。どこにもその悪寒の痕跡が見つからないのだ。

「……畜生」

俺はその場から全力で離脱した。悪寒を振り切るように。そして自覚していた。トラウマの蓋が開きかけている事に。

「っち、あの野郎逃げやがったか。勘の良い奴め。まあいい。このあとじっくりと殺してやるからよお……ヒヒヒ、ヒハハハハハハハハハ!!」

「ねえシン、あなたどうやってスキヤンを回避したのよ？」

俺とシノンそれぞれの直感に従い俺のスタート地点であった都市廃墟に向かつていた時唐突にシノンが聞いてきた。

「ん？ああ、あそこから少し離れた所に実はでかい木の洞があつたんだよ。試しに潜つたら端末が開けなかつたから多分俺も写つてないんだろと思つてな。予想通りだったよ」

「…今回が初参加よね？」

「もちろん、どうして？」

「いや、あなたの幸運って底知らずだなあつて思つて…」

まあ確かに初参加で何の情報も無かつたスキヤン回避スポットを見付けたのは幸運以外のなにもでも無いな。

「その運が現実にもあればなあ…」

そうすれば古参プレイヤーなのに大会初参加つて事は無かつたのに…

「…どんまい」

「その優しさが身に染みるよつと、着いたな」

目の前にはそびえ立ついくつものビルに似た空っぽの塔。それがこのエリアに寒々しさを醸し出している。俺は地形的には得意だが個人的にはあまり好きではない。

「同族嫌悪…いや、違うのか？」

「割とどうでもいいことに頭を捻っている」と

「それで、どうする？」

「え？」

「いやだから、どうするの？この先にいるプレイヤーは銃士X。私とあなたの直感が正しければ死銃はこつちに来ていてここにはその銃士Xしかいない。ならやる事は一つしかないと思うけど？」

「あ、ああ。そうだな。じゃあ俺が…」

「突っ込んで倒すと？」

「え？うっ…」

「やばい、言おうとしたことを先回りで行われた挙句目が据わってる…」

「ねえ、そんなに私が信用できない？」

「い、いや。そんなわけないだろ」

「じゃあ少しは私を頼ってよ」

「一転、シノンの目が悲しげになる。」

「出会ってから隣であなたを見てきたけど、頼りにしてるって言っても結局最後はあなたがやってる。本当に心の底から人を頼ってないのよ」

シノンの言葉に耳を疑う。俺はあの日、キリトに助けてもらった時から人を信じられるようになったと思っていた。それが違う？

「あなたの過去に何があつたのかは聞かない。でも今ぐらいは信じてよ。あなたを隣で見してきた私を信じてよ」

俺は信じ切れてなかつたのか？頼れてなかつたのか？俺の中で何かにヒビが入っていく気がした。

「ねえシン？」

俺は顔を上げてシノンを見る。その顔が重なる。俺を怖がり、嫌悪し、侮蔑の目を向けてきたかつての同級生や大人の顔が。

「……あ……」

「どうしたの？」

「…何でもない、それじゃあまず俺が偵察して死銃だったら合図をする。そしたら容赦なくその銃で撃つてくれ」

「りよーかい！」

シノンは笑顔で狙撃ポイントに移動する。対して俺は心に一つの疑念を抱えながらシノンに背を向け銃士Xの元に向かった。願わくばそれがザザであって早く終わってくれることを願って。

所変わってここはA.L.O.のイグドラシルシティにあるキリトとアスナの部屋。愛の巣ここには現在家主であるアスナとその娘のユイ以外に鍛冶屋リズベット、竜使いシリカ、キリトの妹でもあるリーファ、ギルド〈風林火山〉のギルマスで自称兄貴分（笑）クラインがいた。

「俺の扱いひどくねえ!？」

「いきなりどうしたのよ」

「いや、なぜか理不尽な紹介された気がしてよう」

「なにそれ」

「にしてもお兄ちゃんとカイさん出ませんねえ」

「そうね、キリト君とシ…カイさんなら開始早々暴れると思ったんだけどなあ」

「そうです！パパなら背後から不意打ちしまくりですよ！」

そうやってユイはアスナの肩の上でシャドーボクシングをする。なんとも微笑ましい光景だ。

「それもFPSなのに剣と小刀でね」

小刀とはシンがALOでカイとしてプレイする際に使っている武器で長さは短剣以上刀以下と言う微妙な長さである。更に出現条件は刀と短剣をやりこまないと出てこないという何とも割に合わない武器なのだ。しかしシンはこれを手足の様に使いこなすので誰も何も言えないのである。

「さすがにそれはない…と思うなあ」

アスナが言葉を濁す。その時何枚かあるスクリーンの一つに動きがあった。

「うわ、あいつすごいわね。身のこなしが軽いわ」

「そう？／＼か？」

アスナとクラインの声が重なる。二人はこれ以上に身軽なシンをSAOの時から見ているのでどんな人を見ても見劣りしてしまうのだ。

「キリトさんとカイさんと比べたらだめだと思えますよ…」

シリカの突っ込みは至極真つ当である。

「あ、あはは…」

リーファは二人の反則的なスピードを知っているので何とも言えない。

「あ、決まったみたいですよ」

再び画面に視線を移すとカウボーイの格好をしたプレイヤーが地に沈みDEADタグを付けていた。とどめを刺したライダースーツにフルフェイスヘルメットのプレイヤーが立ち去ろうとした時

「あつ」

誰が発したかは分からないがスクリーンの中ではさっきのプレイヤーが狙撃されたように横に倒されていた。腕には一本の細いピックのようなものがスパークしていた。

「まるでサンダーウエブみたい…」

リーファがそう漏らす。その瞬間スクリーンが一瞬動いた時にまるで幽霊のようなボロマントのプレイヤーが立っていた。

「いつの間に…」

アスナは素直な感想を口に出す。ボロマントは手に構えていたスナイパーライフルをしまい腰のホルスターから拳銃を取り出す。

「なんかちやちくね?」

「それを言ったら終わりよ」

その時一つの閃光がボロマントを撃ち抜かんと通るがボロマントは体を逸らし躲す。

「あいつ強い…」

リーファはその技術の高さに舌を巻く。だがアスナは難しい顔をしていた。うなじの後ろあたりにチリチリとした嫌な予感がよぎっていたのだ。ボロマントは体の前でキリシタンの様に十字を切る。そして

パァン

乾いた銃声の一つ。直後に倒れていたプレイヤーは起き上がりボロマントにショットガンを押し当てるが何時までたつても銃声は響かない。そして

ドサツ　　ジジジジ…

撃たれたプレイヤーは再び倒れ消滅した。

「なんですか、今の…」

スクリーンの中のプレイヤーは拳銃をカメラに向けて言い放つ。

『これが、俺の、死銃の、力だ。俺は、再び、お前らの、前に、現れる。また、始まる。イツツ、ショウ、タイム』

その瞬間部屋にガラスの割れる音が響きわたる。クラインが高価なプレイヤーメイドのグラスを落とし立ち上がっていた。その顔は驚愕に満ちている。

「ちよつとアンタ何やってんのよ」

「嘘だろ…あいつは…」

「クラインさんあいつが誰か知ってるの!？」

「い、いや名前までは…でもこれだけは言える。あいつは元ラフコフのプレイヤーだ、それもP o hに近い幹部クラスの…」

その言葉にリーファ以外の全員が凍りつく。

「あの、ラフコフって…」

ラフコフがどのような組織か分からないリーファが尋ねる。その言葉に中層で暮らしていたシリカがその恐ろしさを説明する。情報なら最前線が最も集まるのだが何時も被害は中層で起きていた。シリカの説明を聞きリーファは俯く。

「多分お兄ちゃん知ってたんだと思います、そのラフコフの生き残りがその大会にいる事を」

「え!?!」

「どういうこと?」

「お兄ちゃん昨日帰ってきた時怖い顔してたんです」

「そう、だったの…」

「なあ、アスナさん。キリトが知ってるってことはシンの奴…」

「ええ、知ってるでしょうね」

「あのバカ…!自分から傷口広げに行くようなもんじゃねえか!!」

「シン?」

「カイさんのS A O時代のキャラネームって聞いてます。あつちで直接会ってるのがキリトさんにアスナさん、それにリズさんとクラインさんなので私は詳しく知らないんですけど…」

「私はキリトに紹介してもらったただけなだけどね。でもクライン、傷口を広げるってどういうこと？」

「う…それは、その…」

「なに、そんな言いにくい事なの？」

「カイさん…ううん、シンさんには悪いけど知ってもらった方が良いかもしれないわね」
「…かもな、関係を大切にしたいって言ってるけどいい加減前に踏み出させてやるか」

クラインはため息交じりに言う。

「シンの奴はな元々、ラフコフの最古参のプレイヤーなんだ」

「「!!」」

ユイも初耳だったのか目を見開いている。

「それは本当なんですか、ママ」

「うん、そうよユイちゃん。でもみんな勘違いしないでね、シンさんはあんな奴らとは違うから」

「そんなの知ってるわよ」

「そうですよー！」

リズベットとシリカは即答で返す。

「でもあいつがなんであんなギルドに入ってるのよ？」

「明確に聞いているのはキリト君だけだけど、昔こう言ってたわ。『あそこは俺に相應しいところだ』って。一応それ以前の事も聞いているけどそれはさすがに話せないかな」

「アスナさんそれ以前ってなんすか？」

「シンさんがSAOを始めたきっかけです。私が話すには重すぎるので…」

「そうすか…」

「でもさ、元ラフコフってことはもしかしてあいつ…」

「…うん。三人って」

「それって…」

「でもその三人は違うのよ」

「え？」

「どういうこと？」

「シンさんが殺してしまった三人っていうのはね、私を殺そうとした人たちのよ」

「な…」

「ちよつとアスナ！なんでそのこと言わなかったのよ！」

「い、色々あつて…」

「色々じゃない！まったく、今になって心配させるんじゃないわよ…」

「ご、ごめん…」

「あの、それで…」

「あ、うん。迷宮攻略してた時にね、トラップに引つかかって一人はぐれちゃったの。レベリックには平気だったんだけどそこでラフコフのプレイヤーに遭遇しちゃったんだ」

「そんな…」

「え？でもということとは…」

「うん、その時はデュエルでしか人に剣を向けた事なくて表面上は気丈に保ってたんだけど内心竦んじやあってね。動けなかったのよ。でもその時一瞬で三人の首が飛んだの。急所を確実に、正確に、全てを一瞬でやって三人のHPをゼロにしたの。今思えばプレイヤースキルなら団長に並ぶかも」

「マジかよ…」

「あいつそこまで強かったのね…」

「それでシンさんが殺しをしたのはあれが最初で最後。少なくとも私は聞いてない」

「そうなんですか？」

「うん。そのあと討伐戦とかあつて大変だったんだけどキリト君の手伝いもあつてお礼

と和解できたんだけどね」

「ほんとキリトの奴天然で人の縁を結ぶの得意ね」

「本当にそうですね」

場にかすかな笑いが広がる。その中でアスナは助けてもらった時の事を思い出していた。

―でもあの時ほど恐怖を覚えたことはなかった。シンさんのあの…

虚ろで空っぽな目に見られた時ほど

第十三撃

静まり返る部屋の中、リズベット達はアスナから聞いたシンの過去に少なからず驚いていた。

「…ねえ皆、私キリト君たちの依頼主に連絡取ってくる」

アスナは顔を上げ言う。

「アスナ依頼主知ってるの!?!」

「うん、と言うより皆も知ってる人なの。ユイちゃん、私が連絡してる間に今GGGで起きていることについて調べてくれる?」

「了解です、ママ!」

「お願いねユイちゃん、じゃあみんな少し待ってて!」

そう言ってアスナは左手を振りログアウトボタンを押した。

シノンと話してから頭の中では自問自答が続いていた。

―俺はキリトを信じ切れてないのか？

―そんな筈はない、全幅の信頼を寄せている

―俺はシノンを頼れてないのか？

―違う、現に今シノンに狙撃を頼んだじゃないか

―俺は…俺は…

―誰だ？

銃士Xの場所まで半ば自動的に走り続け瓦礫のすぐ側に隠れる。この瓦礫の向こうに銃士Xがいる。

―これがあいつで終わりますように…

瓦礫から顔を覗かせる。

「なに…う…」

視界が捉えたのは露出の多めの衣装の完全に女であるプレイヤーだった。俺はザザで無いことに焦燥と安堵を覚える。キルポイントを上げる意味でもシノンに撃たせよ

う、そう考えシノンがいる方向に合図を送る。

「……………」

だがいくら待っても狙撃が来ない。そのことに嫌な予感が全身を駆け巡る。俺は瓦礫を飛び出し速攻でかたをつけるために駆けだす。銃士Xが音に気付き振り返りどもりながらも叫ぶ。

「わ、私はマスケティアイクス…！」

「悪い、聞いてない」

あれマスケティアイクスって読むのか、そう考えながら逆袈裟で両断する。この人には悪いけど嫌な予感が止まらず焦っているので許してほしい。俺はシノンが待機しているはずの方角を見る。

「なんで…なんでそこにいるんだよ！ザザあ!!」

そこには地に倒れ伏しているシノンと黒い拳銃を取り出しているザザの姿があった。

私はシンと別れ銃士Xを狙撃できるポイントに移動していた。その最中突然体から力が抜けて横向きに吹き飛ばされる。

「な、にが…」

右肩を見ると先ほどペイルライダーの時に見た電磁スタン弾が刺さっていた。それを見た瞬間に私は混乱する。

「なぜ？ここからじゃまだ狙撃もまともに出来ない、それに撃たれた方向からすると銃士Xじゃない？でもこの付近には他には居ないはず…」

その時眼前に足が出現する。前にもこんな事があった、と考えながら突然姿を現した理由を理解する。

「光彩歪曲迷彩…」

シンと行った「怒りの戦艦」の二つ目の中ボス「death prant」が使った特殊アビリティだ。しかしあれはボス専用の能力だった筈、新たに追加されたのかもしれない。

「この…」

スタンによって動きにくい体をのろのろと動かし腰のMP7A1を引き抜き目の前のボロマント…死銃に向けようとする。すると死銃は腰からハンドガンを…

「…え？」

私はハンドガンの一点に視線が行く。グリップ部分に刻まれている黒い星、「ヘイシン黒星」。私の罪、私の消したくても消せない過去、その象徴。あの男を撃った銃が目の前にある。

「なん、でここに、あの銃が…!?!」

私の手からMP7A1が滑り落ちる。

「あ、ああ…」

体から力が無くなる。意識がはつきりしない。耳に血流の音がごうごうと響いてくる。何も考えられない。ボロマントの奥に見える2つの赤い眼が零れ落ち、黄色く濁った瞳孔の開ききった眼に変わる。あのととき撃った男の眼だ。

「ここにいたんだ、私を殺すために追ってきたんだ。ずっと隠れて私に復讐するために…」

私にはもう抗えるだけの力も意思も残ってなかった。

「……………」

あの男が何か喋っている、でも分からない。もう意識はほとんど手放している。もう私はあの銃から放たれる本物の死を与える弾丸を待つだけだった。

俺はいつも不思議で、不可解で、不満に思っていた。あの方はなぜあの臆病者を殺さないのかと。一番最初に笑う棺桶ラフィン・コフィンに入ったのに殺した人数はギルド内で最も少なく、いつもは最前線の迷宮に潜り、かといつて攻略組に潜入し情報を流そうともしない。〃精力的に動こうとしないなら殺すべきだ〃。何度もジョニーとそう進言したのに取り付く島も無かった。〃放っておけ〃。その一言のみ。それだけならまだ考えようもあった。〃自らが手を下すまでも無い〃と。なのに…

「お前らもあいつに手を出すんじゃないぞ。出したら俺が殺す」

なぜあの方はあいつを庇うような発言をしたのかが分からない。ただ、気に入らない。だから殺す。だがその前にあの方が手を出さなかった理由を確かめてやる。

「シン、これで、理由が分かる…お前が、大切に、している、者を、殺すことで」

俺は目の前に倒れているスナイパーの女に向けて銃を構える。左手で十字を切る。同時に手首に巻いている時計で時間を確認。引き金に指を掛け、ゆつくりと引いた。

パアンガアン

「!!?」

「なんだ？なぜ女に弾丸が届いていない!?今間違いない…」

その時思考を断つように足元に灰色の野球ボール大の球体が転がってきた。グレネードだ。

「ッ!?!」

俺は慌てて離脱する。その時視界にキラリと金色の光が写った。消えかけているがそれは一つの塊…いや、違う。まさか…

「弾丸の中腹に別の弾丸…まさか撃ち抜いたのか!?超高速で動く弾丸をタイミングに合わせ撃ち抜いたというのか!」

もはや人の成せる技ではない。弾丸を弾丸で止めるなど神業以外言えない。黒の剣士が行った剣で切るという行為が簡単と思ってしまうものだ。その思考を遮る様に視界が真っ白に塗りつぶされた。

衝撃は何時までも来なかった。頭上で甲高い音がしたような気がする。恐る恐る目を開けると一つの球体が転がってきた。グレネードだ。こんな近距離で爆発すればい

くらHPが残ってようが関係無いだろう。だけどこれでいい。このままこの世界から消えて現実世界からも逃げて誰にも見つからないようにひっそりと生きるんだ。私は目を瞑り衝撃が来るのを…

プシューーーーーー！！

「え？」

グレネードは私のHPを消し飛ばさず煙を吐き出した。

ースモークグレネード？でも誰が…

突然私の体が誰かに抱えられた。

「おい！シノン無事か!？」

「シ……ン……」

シンだった。何時もそうだ。この世界でも、現実世界でも危なかったりした時は何時も私を助けてくれたりフォローしてくれた。

「くっそ…シノン！しっかり捕まっとけ！ヘカートも離すんじゃねえぞ！」

そう言われ私は必死にシンにしがみつく。

「ツ!？」

シンが私を抱えたまま壁を蹴って宙返りをする。するとさっきまでいた所に弾丸が通り過ぎた。来た方向から察するにさっきのボロマンとは別の奴だ。

「外部の協力者は予想してたけど内部にもいるのかよ!!」

「協力者? シン、あなたは何者なの?」

シンは私を抱えながら銃弾の嵐を抜けていく。その最中、

ゾクツ…

「ヒツ…」

「しがみ付けえ!」

シンが急転換をして建物を駆け昇る。後で聞いた話だとパルクールと言うスポーツの応用らしい。そしてその一瞬後今までの銃撃の中では軽い発射音でした。間違いくあの銃、*「黒星」*だ。

「畜生、ザザの奴もう追いついてきやがったか!」

廃墟の屋上を駆けながら逃げ続ける。だがそれでも振り切れない。いつものシンならとつくに引き離し逆に狩る側に回っていただろう。だがシンは今ヘカートももっている私を抱えながら走っている。両手を塞がれ、更に重りを持つている状態だ。いくら*「シャドウ」*の異名を持つシンでもお荷物を抱えている限りボロマントと謎の一人は何時まで追いかけてくる。

「駄目だよシン、私を置いてかないと逃げ切れない…」

「ごっけんな! 目の前に救える命があるのに助けねえなんて罪、もう重ねたくねえんだ

よー！」

「え？」

それはかつて誰かを目の前で失ったという事なのだろうか？ 誰かの死を目の前で見たことがあるのだろうか？

「が!？」

その時シンが右足を撃たれて前のめりに倒れる。それでも私を離す事は無かった。

「くそ……」

「ひ、ひひひひひ……よう、久しぶりだなあ……臆病者の裏切り者お……」

背後から現れたのは死銃と同じボロマントを纏った長身瘦躯のアバターのプレイヤーだった。シンは一度そのプレイヤーを見て軽く目を見張るがすぐにポーカーフェイスに戻った。

「……コルトM4A1カービンか。またメジャーな銃だな」

「メジャーてのはそれだけ扱いやすいもんだぜ、そして使い手が良ければそれは化けるもんだ……」

「言ってる事はその通りだがお前が言うとな何の重みも無いな」

「黙れ!! てめえはそこで無様に死んでりやいいんだよ! てめえをやるのはザザさんだがなあ……ひひひ。俺にとつちやてめえは前菜だかなあ……」

「大丈夫だ、俺が守るから」

その顔はとても優しい物だった。

「遺言は、終わったか？」

「なんだ、待っててくれたのかよ。優しいねえ」

「ほぎげ、済んだのなら、死ね」

ポロロメント：死銃は「黒星」をこちらに向ける。心臓が跳ね上がる。でも私の手を強く、だけど優しく握っているシンの手からの温もりが私を包み込む。シンの方を向くとその目は何かを信じている様に見えた。引き金にかけた指が動く。私は目を瞑ってしまう。その瞬間、

バシューウー—————!!

「!？」

「な、なんだあ?!？」

目を開けると目の前が赤く染まっていた。HPがレッドゾーンなのかと思ったがHPはそこまで減ってはいなかった。そこで私は気付く。これは煙だ。でもシンがスモークグレネードを投げた様子は無かった。その時私の耳に重低音の音が響いてきた。私が音の正体に気付く前に私はシンに担がれた。

「畜生何の音だグハア！」

長身瘦躯の男の声と人を撥ねたような音が聞こえた。

「シン、シノン、乗れ！」

キリトだった。キリトがバギーに乗ってきたのだ。

「助かった！」

シンは私を抱えたままバギーに乗り込みフルスロットで走り出した。後方を見れば撥ね飛ばされ忌々しげにこちらを見る目と何を考えているのか分からない赤い目の男が佇んでいるだけだった。

シン、シノン、キリトの三人は砂漠地帯に存在するスキヤンを回避できる洞窟の中に身を隠していた。

「助かったよキリト、あのままじゃやばかった」

「嫌な予感がしたから焦ってそこに向かったんだよ。バギーを見付けたのは運が良かった」

たの一言だな」

そこで一度キリトは言葉を切った。

「なあ、シン。何かあったのか？」

「は？何かあったのかってそりやザザの奴に…」

「そうじゃない」

キリトは逃がさないとばかりに目に力を込めた。

「お前に何かあったのかって事だ」

「…なんでそう思う？」

「…知らん！」

「は？」

キリトは女にしか見えないアバターで男らしく言い張った。

「…キリト、ふざけてんならいい加減に」

「でも悩んでるのはわかる」

シンはキリトの言葉に詰まる。

「お前は何か悩むと必ず悟られまいとする。だから分かる」

シンはその言葉に苦い顔をする。自分は隠そうとしていた事が実はそれでばれてい
たなど笑い話だ、そう考えていた。

「…あーあ、なんでお前にはばれちまうのかなあ。一番ばれたくない相手なのに」
「親友だからだろ」

キリトは当然と言った様子で答える。その言葉にシンは深く心を抉られる。

「どうした？」

「…：…なあキリト、俺は誰だ？」

「は？お前はシンだろ？」

「そうだな、俺はシンだ。あの世界でお前に会って変わる事の出来たシンと言うプレイヤード」

「…：シン？」

「じゃあ閑田改とは誰だ？」

「それも…」

「閑田改ってか？なあキリト、いや桐ヶ谷和人。お前は俺を知っているか？俺がどういう人間でどんな過去を持っていてどんな事を思っているのかを」

「…：過去なら昔お前が話したろうが」

「俺はそれがすべてだと言ったか？」

「…：…」

「今までお前を信頼していたのは閑田改だと思ってた。でも違うようだ、人は本当の意

味で変われない」

「どういう意味だよ」

「…シンンにな、本当に心の底から人を頼ってないって言われたんだよ。それは今までの俺の全否定だ。お前と出会って信頼と信用を覚えた。だけどそれは“シャドウ”であり“夜叉”であるシンだけだった。現実の俺はシンを模倣してるとに過ぎない。そう分かつちまった」

シンが閑田改として自問自答し続け導き出した結果だ。シンの脳裏に浮かぶのは数多の子供の顔、その親、そして自分の保護者だった人達。皆一樣に同じ表情を浮かべる。それは理解できない、と、恐怖。他人にそんな顔をさせる、それがあの世界から出てきて以来見せていない本来の閑田改。

「…シン」

シンはここまで来て理解する。俺はキリトを突き放していると。自分に近づいて欲しくない、そう思っている。皮肉なものだ、あそこまで渴望した物を今は手放そうとしているのだから。シンはキリトに何を言われても良いように心構える。

「お前バカだな」

「…はい？」

「いやお前全体的になんなの？構ってちゃんか？構ってちゃんなのか？と言うか話が長いんだよ一刻も早くザザと謎の共犯者倒さなきゃなんねえのになうだ悩んでんの？てか人はそう簡単に変われない？当たり前だろうが簡単に変わっちゃったら世の中大変なことになってるわまずそこから認識改めろダアホそれに俺がお前の過去全部知ってたらこええだろうがそこらのホラー映画より断然恐ろしいわお前はそんなに俺をストーリーカーに仕立て上げたいのかそうなのか？そうなんですか？てか今何を思ってるかまで分かっちゃったらそれもはや妖怪だろサトリだサトリて言うかお前の読心術が十分サトリなんだよ少しの仕草から相手の心読み取るとか怖すぎるわ本当の意味でこつちは隠し事が出来ないんだよ普段のお前勘も鋭いから合わさってサプライズとか何も出来ないんだよ一回ぐらい本当に驚いた顔をしろってんだもうアスナヤリズ達も愚痴ってんだぞその愚痴を聞かされるこつちの身にもなりやがれてかなんでアスナか

らお前の愚痴を聞かなきやならねえんだよ聞きたびにこっちは何時も複雑な気分なんだよ仲良きことは美しきかなっていうけど一応俺も男だし彼氏だから嫉妬位すんだよそこんとこ考えてくださいませんか？ホントお願いしますよってこんな事言いたいんじゃないよ

キリトは怒涛の文句？愚痴？をいったん切って

「お前は俺の生涯の大親友、それは変わらんねえよ」

とても優しい顔でキリトは笑う。シンはキリトの言葉に呆然とする。否定もされ肯定もされる。突き放したし受け入れた。シンはようやくよく思考が正常に働く。

「なんだよ…ホント、バカみてえ」ボソツ

「うん？…まああれだ、お前いつも溜め込むからな、偶にはこうやって吐き出しちまえ。俺もアスナもそうしてるし」

「惚気乙、ごちそうさまでした」

「なんだよその言い方、折角こっちが心配してやったのに…」

「ありがとよ、もう大丈夫だ」

「お、おおう…急に素直だな」

「色々吐き出したらな、スツキリした」

「そうか、それで次はあっちだな」

キリトとシンは洞窟の奥を見る。奥にはシノンがいる。

「…俺に任せてもらっていいか？」

「いいのか？」

「ああ、伝えたいこともある。つたく、ここまでやってようやく気付くとか俺はどここの鈍感主人公だよ」

「え？今まで気付いてなかったのか？」

「え？」

「え？」

二人に奇妙な沈黙が訪れる。

「…気付いてらっしゃったと？」

「いや俺も一応彼女持ちだしあるかないか位は分かってたぞ？」

「ちなみに何時からとかは…」

「少なくとも俺が初めて会った時にはそれなりの好意はあるなと思ってたぞ、はつきり意識してたのは大会前位じゃないかな」

「お前いつの間にそんな聡いキャラに…」

「何時からだろうな？とにかく行ってこいよ。俺が見張つといてやる。全部ぶつけてぶつけられて来い」

「…ああ、行つてくる」

シンは奥に歩き出す。

「…たく、世話掛かる親友だ」

キリトは苦笑を忍ばせ親友の背中を見送った。

第十四擊

都市廢墟の一角に二人組の男がいた。どちらも同じフード付きのマントを被っている。

「ビーター……てめえは何時も何時も邪魔してくれるなあ……」

片方の男は途方もない怨嗟を込めた声で怨敵の走り去った方角を睨みつける。

「……準備は、出来た、のか？」

「え？あ、はい！もちろん！言われた通りに仕掛けてきました！にしてもあんなのどうやって用意したんすか？」

「言う、必要は、無い」

「そ、そうですか……」

長身瘦躯の男はこめかみをひくつかせる。

「この餓鬼……まあいい、最後に笑うのは俺だ。ラフコフの幹部とか関係ねえ、あの二人を始末してこいつを利用するだけ利用して最後にあの女で遊べりやそれで良いさ」

男は内心でほくそ笑む。ザザにその行動原理すら利用されているのに気付かぬままに。

暗い洞窟の最奥部、そこは申し訳程度に水溜りの様な場所があり少しばかりひんやりとしている。その水溜りの手前の岩壁に一人の少女が長大な銃と共にもたれ掛っている。だがそこにはかつての山猫のような獰猛さは無く唯々怯えている女の子だった。

「…シノン」

俺の言葉にシノンは緩慢に首を動かしこちらを見る。

「大丈夫…では無いよな」

「…ええ、情けないことにね」

シノンは力無い笑みを浮かべる。その笑みは俺にとってとても痛々しく映った。

「シンは？入り口の方で何か言い合ってたようだけど…」

「やっぱし聞こえてきてたか…キリトにちよいと当たっちゃまってな、情けない限りだ。」

俺の方が年上だつてのに」

「…良いんじゃないの？親友なんですよ？」

「まあな、恩人つて意味合いが強いけど」

そこで一度会話は途切れた。緩く、寄る辺の無い沈黙だ。

「…ねえ、シン」

「なんだ？」

「聞いてもらつていい？私の…朝田詩乃の罪を」

そこには話して楽になりたい、そんな思いが見え隠れていた。

「…そうか」

俺は肯定も否定もしない。シノンの自由意思に任せた。

「…私ね、人を殺したの」

シノンの目を見た時薄々感じていた事だ。会ったばかりのシノンはただひたすらに抗うだけの力を求めていた。

「小さい時に交通事故でお父さんを失くしてね、お母さんが精神障害になったの。それから私はお母さんを守らなきゃ！つて思つて強引な訪問販売とか追っ払つてたの。それである日に郵便局に行つたんだ。精神障害つて言つても重度つてわけじゃないからそれ位は出来てたんだ。そしたらその郵便局にね変な男が入ってきたんだ、黒目が左

右で違つたし一瞬でおかしいと思つたの」

最後の言葉でその男が何かしらの薬をやっているのが分かつた。おそらく俺のクソ両親と同じ覚せい剤だろう。

「その男は受付のカウンターまで行つた後お母さんを突き飛ばしたんだ、そしたら懐から銃を…ボロマントが使つてた黒星を、取り出して…」

シノンの震えが大きくなる。おそらく当時の記憶とさつきまでの恐怖がフラツシユバツクしてゐるのだろう。俺はシノンの右手を優しく握りこむ。『大丈夫』と言ひ聞かせるように。シノンは一瞬体を強張らせる。利き手は右だ、おそらく引き金を引いたのもこの手なのだろう。シノンは一つ大きく深呼吸をする。

「局員の一人を撃つたんだ。その後金を詰めろつて言つてお母さんに銃を向けたんだ、早くしないと撃つて…」

シノンのその時の心情を感じる、この少女は幼い時にその恐怖を覚えてしまったのだ。

「もう無我夢中で男の手に噛みついたんだ、そして取りこぼした銃で撃つたんだ、二一回。衝撃で肩は脱臼して歯は折れて痛かつたけどそれ以上に足元に広がつた血とお母さんの目が怖くてね…気絶しちやつたんだ。それから私は銃の絵や写真を見る度に吐いたり気絶しちやうようになつちやつた」

シノン 自分の過去の話を話し終えて力が抜けたようだ。脱力して俺によりかかった。
「そうか」

俺は最初と同じ言葉を言う。

「…うん」

言葉少なくシノンは返す。

「…俺も気が向いたから少し話す」

シノンが驚いた顔をして俺を見上げた。

「意外か？」

「う、うん…」

「まあ確かにそうかもな、でもシノンも話したし俺も話すのがフェアだろ…それにシノンにはもう隠し事したくないし」

「え？それってどういう…」

「聞いてりや分かるよ」

シノンは分からないというような顔をしていたがそれは後々分かる事だ。

「むかーしむかし、ある県ある街に一人の少年とその両親がいました」

殊更明るく、重くならぬように話し始める。

「両親は共働きで中々一緒にいる事が出来ませんでした。が共に仲が良く、少年を愛して

くれていました」

俺のもっとも古い記憶、その中ではまだ両親は優しく笑っていた。

「ある日両親は珍しく朝から夜まで家に居て一緒に遊んでくれました」

それが最後に一緒に笑って遊んだ記憶。

「そして次の日から両親は一変しました、少年に暴力を振りながら無理やり家事をさせたのです」

アバターには無いはずの古傷が疼く感覚がする。シノンが息を呑んだ。

「少年が泣こうが喚こうがお構いなし、両親はどこまでも悪辣に、悪逆に、卑劣に、陰湿に、卑屈に、最低に、虐待を始めました」

体が震える。呼吸が苦しい。

「そんな生活が二年、続きました」

本当に辛い日々だった。生きているのが苦痛でもあった。

「ある日、帰りたくない家に帰った時、いつも真つ先に飛んでくる怒号がいつまでも聞こえませんでした。少年は不思議に思い、部屋を覗いてみると両親は静かに佇んでいました、不気味なまでに静かでした」

同時にもっとも死の危険を感じた時でもある。

「すると今まで静かだった父親がゆつくりとこちらを向きました、そして少年は悟りま

す。『ああ、死ぬんだな』と」

あの時の両親の顔は未だに頭から離れる事は無い。死んでもなお俺を苦しめる。

「父親は奇声を上げながら少年の首を締め上げました。母親は何もせず唯々薄く噛いながら横目でこちらを見ていました」

あれはどんな虐待よりも辛かった。

「少年はこのままでは死ぬ、そう思いました。でもそこで少年を支配した感情は恐怖や諦めでは無くどこまでも深く昏く濃い怒りでした」

たった一瞬だがよく覚えている。自分を縛りつけていた鎖が全て弾け飛ぶような感じを。

「そこから先の記憶は少年にはありません。次に目を覚ました時に目に入ったのは自身の体へへばりつく血と肉、そして親だった肉塊でした」

シノンにはガタガタと震えている。シヨッキングすぎたようだ。

「これでようやく半分だ」

「え？」

「俺はこの時感情と呼ばれるものを失くしたんだよ、じやなきやあの状況で平静を保つことは出来なかった」

「え、でも今は……」

「これが本物かどうかは俺にも分からないんだ、まあこの話は後半にな」
俺はそう言ってまた話し始めた。

シンの話は私なんかよりもはるかに重かった。子供には耐えがたい苦痛を二年も受けていたのだ。私には耐えられない。

「それからと言うもの少年には一つのハンデを負うようになりました、自分の力を制御できなくなったのです」

「少年は常に過剰にアドレナリンが分泌されてしまい物を掴む度に壊してしまうのです」

「周りは当然のように少年をはじき出しました。異端異物怪物化け物人殺し、言い出せばキリがありません」

最後の話は経験がある、というより現在進行形だ。

「里親は何度も変わり、転校するたびに少年のしたことは明かされ弾かれてきました」

「しかし少年も人間でした、安らぐ場所が欲しい。そう思っていました」

「中学卒業後、少年は一人暮らしを始めました。誰とも関わらずいられる場所を求めて」
「そして見つけました、自分が安らげる場所を」

「その場所の名は、ソードアート・オンライン」

その名を聞き驚きながらも納得をする。シンとキリトのあまりにも卓越した…いや、仮想世界に慣れている動きに。

「少年はその世界にのめりこみました。あのクソつたれた世界から離れる事が出来たのです」

「閉じ込められようがHPがゼロになったら死ぬとか関係なしに歓喜しました」

「しかしそれも裏切られました」

「少年はまた同じ罪を重ねたのです」

「え…」

同じ罪、つまり人殺し。

「少年はあるギルドに所属していました。ギルドの名は、ラフィン・コフィン“笑う棺桶”、SAO最大の殺人ギルドとして知られていました」

「うそ…」

殺人ギルド…本物のデスゲームの中でそれは間違いなく最大級の罪だ。

「少年はそのギルドの中でも異端でした。手に掛けた人数は三人、同じギルドメンバー

を葬ったのです」

「少年は限界でした、眠ることが出来ず休むことも許されない」

「でもある日大規模な討伐戦が組まれました、プレイヤーVSモンスターでは無くVSプレイヤー…本物の戦争でした」

「疲れ果てた少年は開戦直前自らの敵に当たる討伐組に情報を流しました、無闇に突っ込むな、奇襲がある」と

「少年は壊滅を望みそれは叶いました、壊れた心に多大な傷を代償に」

「そして出会いました、手を差し伸べ救い支えてくれた人達に」

「そして紆余曲折の末、ゲームの解放の喪失感と唯一無二の親友を手に入れましたと
さー」

「え？最後あっさりし過ぎてない？気のせい？」

「だって重い話のまままで終わらせたくねえんだもんよ、これから俺ははじめの付けに行くんだからよ」

最後の言葉に息を呑む。

「…戦うの？」

「当然」

「…強いね、シンは本当に強いよ」

私よりもひどい過去を持っていて何度も折れそうになっていて、それでも何度も立ち上がって今こうして前を向いている。

「私には無理だよ……」

あの時あの銃を向けられただけで何も出来なくなった私とは大違いだ。

「なに言ってるんだ、今も十分戦ってるだろ」

シンの言葉に目を瞬かせる、私が戦っている？そんな筈がない。もし戦えているならあの時意地でも反撃していた。

「本当に逃げてる人間ならな、こんなに悩まねえよ。その苦しみはな、抗って抗って抗い続けてる証だ。俺はもう一回折れてんだよ。両親を殺したあの時にな。今の俺はまだ組み立ててる途中だ、だからお前はまだ折れてない分俺よりも強い。自信を持っていいぞ」

シンはそう言ってくれる、でも自信が持てない。

「…まだ自信が持てないのか？」

「…うん」

「…前にさ、強さについて聞いてきた時なんて答えたか覚えてるか？」

「話す気になって聞いてきたら話すってやつ？」

「そう。出血大サービスだ、話してやるよ」

「…いいの？」

「おう。…俺はな、支えたいんだ」

「支えたい？」

「話の中で言った通り俺は一回折れたんだ、だけどそれをキリトやあいつの恋人のアスナ、俺のこと知っても態度を変えないでくれたクライン、他にもいる。その人たちに立ち上がらせてもらって、支えてもらった。おかげで今こうして俺はいられる。だから今度は俺の番なんだよ。俺は誰かを支えたい、そして…」

シンはそこで一度言葉を切り、私を真っ直ぐ見た。

「シノンを支え続けたいんだ」

私はその言葉に固まった。え？私？しかも支えたいじゃなくて支え続けたい？継続なの？今だけじゃなくて？それって家庭…じゃなくて過程すっ飛ばしてぶ、プロポーズ

!?た、確かにもう結婚できる年齢だけどきすがに順序つてものが…

「えーと、シノン？」

「は、はい！ふ、ふちゅちゅか者ですがお願いします！」

「よし、いったん落ち着こう。はい、ヒツヒツフー、ヒツヒツフー」

「ヒツヒツフー、ヒツヒツフー…てこれお産の時の呼吸法じゃないの！」

もうそこまで考えてるの!?じゃなくて…

「あ、あなた今の意味分かって言ってるの？」

「?支え続けたいってとこか？」

「そ、そうよ！それってほとんどぶ、プロポーズよ!!」

「あ?あー…まあうん、そうだな。結婚を前提に付き合つて欲しい意味で言ったし」

「な!?!」

急速に顔が、どころではなく全身が赤く染まる。私ももしかしたら惚れているのかもしれないとおもっていた。何時かは私から告白するのだとも思っていた。だけどこれは予想をはるか上を行っていた。思考がさつきまでとは違う意味で働かない。私は黙りこくつてしまった。

「…やっぱだめか、この状況で言うのは卑怯だもんな」

あ、あれ?

「ははは…やっぱ最低だよな、弱ってる所に付け込むとか…」

一転してなんか悲観的に…

「でもいいじゃないか少しくらい夢持っても、初めて異性を好きになれたんだし似た境遇だから理解し合えあるかなーって思ったけどやっぱ俺の思い違いかよ…」

私が初恋ってこと!?!それは…すごい嬉しい…!! つじやなくて! なんでシンはいきなりそんなに凹んだのかしら?!

「断るならはつきりお願いします…無言のまま仏頂面は恋愛初心者には拷問です…」

そこまで言われて私は顔が力んでいることに気付いた。どうやら無意識のうちに悟られまいとしていたらしい。

「ち、違うわよー! これはそういう事じゃなくて顔がにやけるのを抑えるためであってホントはすごく嬉しくて…! 第一不束者ですが言ったでしょ!」

「……………え? よかったの?」

「最初からそう言ってたでしょ!!」

私達って締まらないわね…

第十五擊

俺とシノンはいかに気持ちを確認し合った後待たせていたキリトの所に向かった。
…のだが、なぜかキリトはげっそりとしていた。

「…どうした？」

「お前から声デカいんだよ…」

「え？」

「こっぴどかしい事大声で言い合うなよ…」

「!? あ、あなた聞いて…」

「聞こえちゃったんだよ！俺かて聞きたくなかったわ！まさかこんな状況であそこまで
コミカルに話せるとは思ってなかったよ！と言うかシン、お前色々すっ飛ばし過ぎだ
！」

「は？」

「学生同士付き合うのにいきなり結婚を前提とするな！」

「いや、お前もそうだろ」

「うっ…いやまあ確かに考えてるけど」

「あなたも人の事言えないでしょ……」

「ああもう！いいだろ！」

「旗色悪くなって切り上げたな」

「そうね、キリトから始めたのに」

「そこ……うるさい！付き合い始めた直後に息合わせるな！」

キリトはゼーゼーと息も絶え絶えとなった。

「はあ、もういい。とりあえず報告しとくぞ。ついさつきスキャンがあつた。写つてるのは俺達と闇風だけだ、あの二人は残つてるのは確定だろうから六人だな。ただ全員足しても二人足りないんだ」

「一人はおそらくペイルライダーだな、俺達がザザにやられたのを確認した。もう一人は俺達を探してる間にやられたんだと思う」

「そうか……わかつた」

キリトは一瞬強く唇を噛んだ。自分の与り知らぬところで起きたとしても悔しいのだろう。

「あの二人は確定として問題は闇風をどうするかだ」

「乱入されたら厄介だしザザのターゲットである可能性もある。あいつらと接敵する前に倒せればいいんだが……」

「ならそれは私がやるわ」

「…大丈夫なのか？」

さつきはまったく言うほど締まらなかったが元々シノンの恐怖心を取り除くためにあの暴露劇をしたのだ。余りにもお笑いじみたことになったので出来たのかは不安なのだが…

「ん、大丈夫。あなた達も戦うんでしょ？私だけ何もしないのは嫌なもの」

「そっか…なら頼むぞ」

「任せなさい！」

シノンはまだほんの小さく震えているが勝気な笑みを浮かべる。

「俺は…」

「俺がアヴェンジャーとやる」

キリトが被せるように言う。

「…お前どつちがどつちか分かってんのか？」

「分かってるよ、あいつとは俺が決着を付けなきゃならないんだ」

「…はあ、分かったよ。元からあいつはお前に任せるつもりだし奴さんもお前狙いだろ
うよ。頼むぞ」

「ああ」

「さて、じゃあ俺はザザとやりますか。全員生き残ることを第一に考えろよ、特に俺とシンはな」

「ええ」

「了解…ん？シン」

「なんだ？」

「お前どこからログインしてるんだ？」

「…あ」

そこで俺は自分の失言に気付いた。俺はまだどこからログインしてるのかをキリトに話していなかった。

「え？いや、それは…」

「まさか安全じゃない場所とか言わないよな？」

「ま、まさか…」

「どういうこと？」

「俺達のこれは一応正式な依頼だから安全な場所を提供されてるんだ、俺とシンは依頼者の伝手の病院からログインするはずだったんだがベッドが足りないとかでシンは別の場所に行ったって聞いたんだが…」

「シン？」

「(めんなさい)」

思わず五体投地で謝る。だって怖いんだもん二人とも、ザザと戦う前に俺殺られちゃうよっ。

「…説教は全部終わった後な」

「つ、謹んでお受けしますので加減していただけるとありがたいなと…」

「その辺はシノンに任せる」

「任せて、思いつきりやってあげるから」

「付き合い始めて十分で尻に敷かれ始めるのかあ…」

俺大変な奴好きになっただんだなあ…これも惚れた弱みか。

砂漠のど真ん中に一人の少女…では無く青年が立っている。また離れた所にはこちらも少女…では無く少年が立っている。二人は目を閉じ意識を澄ましている。あの世界にはシステムに設定されたスキル以外のスキル、システム外スキルが存在した。キリトの武器破壊がそれにあたる。そして今シンとキリトが行っているのはトツブプレイ

ヤーでもごく一部でしか使えないとされているシステム外スキル、ハイパーセンス超感覚。これは人間の第六感ともいえるものを自らの意思で研ぎ澄ませるといふ眉唾なものだ。しかし実際これでシンやキリトは何回か命拾いをしている。有り体に言えば精度の高い勘だ。だが侮れない。

―風の音：排除、味覚エンジン：カット

―視覚情報：削除、嗅覚：消去

遙か遠くから走ってくる音がした。かなり速い。これが闇風という事を二人は理解する。本来なら警戒して身構えるべきだが二人はその心配すら排除する。闇風はシンがどうにかしてくれると信じているから。その時シンの右腕にチリチリとした感覚が襲う。キリトはうなじに同じ感覚を得る。瞬時にシンは体を捻転させ、キリトは電光の速度でカゲミツを振るう。刹那シンの耳元には弾丸が空気を切り裂く音が、キリトは体に突き刺さる幾重の赤い線を自らの剣でなぞり一弾一弾を切る音が。その音は各々の戦いの開幕を告げた。

私はキリトの言った闇風のいる方向にスコープを向けていた。そしてその姿を捉える。

―速いわね、動きも厄介

闇風はダッシュスキル完全コンプを達成している。また歴戦のプレイヤーとして技量も申し分ない。事実普通は障害物を盾にして止まり、また走るといのがセオリーだが闇風は障害物を使うものの止まる事無く、曲線を描くように動いている。だが、

「シンはその程度じゃないのよー」

私のスコープは闇風を捉えて離さない。引き金を絞ろうとした瞬間。

ゴオン!!

突然砂漠にそびえ立つ塔の一つが崩れたのだ。おそらくどこからかの流れ弾が命中したのでろう。問題は崩れた塔の位置。私と闇風の間にあった塔が崩れたのだ。落ちてくる瓦礫が狙撃のチャンスを見失わせる。いや、絶好のチャンスになった。闇風が一瞬止まった。同時に極限にまで研ぎ澄まされた神経が時間の流れを極端に遅くさせる。私と闇風を結ぶ映し出されない弾道予測線が一直線に、落ちてくる瓦礫の僅かな隙間を縫うように突き刺さる。バレットサークルは常に最小、捉えているのは頭、私は一瞬の躊躇も無く引き金を引く。弾丸は無数の瓦礫の降る空間を一切瓦礫に触れることなく突き進む。スコープ越しに闇風と目があつた。驚愕、しかしすぐに弛緩し口が動く。

「見事」

弾丸は闇風の頭を上半身ごと吹き飛ばしてDEADタグを付けた。神業の様な狙撃の余韻に浸る余裕も無くすぐにスコープを二人の方に向ける。キリトは既に戦闘を開始していた。シンは居場所を見つけたようだが長距離からの狙撃だった為距離がある。なら自分がやる事は一つ。スコープをシンの進行方向に滑らし死銃を見付ける。既に予測線は見える様になっている。だが関係ない。シンが最速でたどり着けるように私は足止めをする。死銃がこちらに気付き銃口をこちらに向けた。互いにサークルが最小になったのだろう引き金を力を掛ける。

「あんたはあいつじゃない。私が縛られ続けるあの男じゃない。なら、恐がる必要はどこにも無いんだ！」

引き金を引き切った。同時に向こうも引いた。互いの弾道はほぼ一直線、そのまま接触するようにも見えた。しかし奇跡は連続では起きず弾丸はスコープに直撃した。後一瞬スコープから目を離すのが遅かったら私はやられていただろう。だが離す直前弾丸があっちの銃に直撃したのが見えた。役目は果たさせたようだ。しかしスコープを失ったので詳しい状況を見る事が出来ない。もうこちらから援護射撃は出来ないだろう。

「後は任せたわよ。シン、キリト」

シノンが後方から狙撃してくれたようだ。視界に捉えたザザの銃は粉々に砕けたようだ。あいつの装備はあとあの黒星のみのはずだ。俺は足に力を込め残りの距離を一気に詰めた。ナイフを抜き刀汎用スキル、緋扇で片を付けようと…

ゾクッ…

背筋に悪寒が走る。ザザが滑るような速度で砕けた銃身の一部から銀色の棒を抜き取る。一見するとクリーニンググロッドだが先端が尖り膨らんでいる。俺はこの形状の武器を何度も見たことがある。これは…

ーエストツク!?なんでこんなもんがこの世界に!?

そしてザザの姿がブレた。瞬間銀閃が走る。緋扇から無理やりパリイに変える。心臓に向かっていたエストツクは弾かれ肩へ流れる。

「ぐ…」

どうにか即死は免れた。即座に距離を取る。

「…そういやそんなスキルあつたな、作成スキル上位派生、銃剣作成スキル」

「ほう、やはり、知って、いたか」

「伊達に初期の頃からこの世界にいねえよ、にしてもお前急に早くなってるな」

「女が、銃を、壊して、くれたからな。重りが、無くなった」

「あー…戦力削いだつもりがまさかの強化か。ハン〇バルかよ」

「何を、言っている？」

知らないの？ゴッ〇イーター。

「まったく、監獄ジエールの中でどんだけ鍛えたんだか。想像よりずっと強いな」

「お前を、殺す、為だ」

「俺を思ってたか、嬉しいねえ」

「ふん、ほざけ！」

ザザは殺意を纏ってその剣を俺へと放った。さあ、最後の戦いだ。

第十六擊

俺とザザ、互いの全身から鬨気、怒気、敵意、殺気が迸る。何でも無いように話していたが俺はザザ、ジョニー・ブラック、P o hの三人が大嫌いなのだ。それこそトラウマの事を忘れかける程に。

「シッ!!」

「フッ!!」

二つの銀閃が幾度と無く交差する、交差してしまっている。

「コイツ、俺の動きを理解してやがる：上手く死角に入る動きだけ潰してる！」

俺のスタイルなら相手は視界に入れることすら出来ずに俺に倒される、だがザザは俺のその動きに入る為の誘導を読み潰し、反撃をする。今までそんな事が出来たのはP o hとキリトの二人だけだ。過去にアスナとやり合った事があつたが反応も出来ていなかった。キリトの場合は俺と同等の直感と俺以上の反応速度で適応し、P o hの奴は的確に俺の行動を先読みしていた。ザザの奴は恐らくS A O時代に俺の動きを見たことがあつたのだろう、それを牢獄ジェイルの中で何千回と反芻し、さらに予選の動きを更新して照らし合わせている。恐るべき執念だ。

「どう、した？俺を、殺す、のでは、無いのか？」

「そうしたいのは山々だがお前さんの才能の無駄遣いのせいで出来ねえんだよ」

俺が苦々しく言うとならば、俺に、殺される！」

「ならば、そのまま、俺に、殺される！」

ザザの腕が霞み俺の心臓を捉えようとする。

「嫌だね、だからお前に見せてないもので逆に殺してやるよ」

俺は死角に入る事を止め攻撃をパリイして距離を取る。

「俺が、見ていない、ものだ？」

「そうだ、特別に見せてやるからそのまま殺られる」

俺は息を5秒吸い、4秒吐く。4秒吸い、3秒吐く。それを続けザザ以外のものを一

切排除する。

「そんなもの、待つ訳が、無いだろう」

ザザの体が低く沈み這うように俺に肉薄する。そしてエストックが俺の体を貫こう

とする。が、

「何!？」

その攻撃は簡単に躲される。当然だ、俺はそう来ると知っていた。

”同調”、俺が人の行動をどこまでも見続け、読心術によって相手の行動に対して予知

に近い予測を行いそれに対応する。対人戦においてチートともとれるシステム外スキルだ。ただしこれにはそれなりのデメリットがある。一つは常に相手を視界に捉え続けなければならぬ、もう一つは限界まで集中するため外部からの攻撃に咄嗟に反応出来ない。つまりは一対一限定の技術だ。だが今ならこのデメリットはハンデにならない。

「ここから先は俺の領域だ、お前はなす術も無く俺にやられる」

そうして俺は一方的な蹂躪を始めた。

「なんだよこれ…」

観客席で見えていたプレイヤー達はゲームではありえない程の殺気を目の前のモニターから感じ取り戦慄する。それほどまでにシンとザザ、二人の戦いは真の殺し合いだった。

「これがシンさんなんですか…?」

A L Oの一室でキリトとシンの仲間であるシリカはポツリと呟く。だがその呟きに答えられる者はいない。S A Oにいた者ですら目の前のモニターから感じる殺気に息を呑む。それほどまでに元最凶の殺人ギルドの二人は殺し合いに身を投じていた。

時を遡り、シンとザザが接敵した頃もう一つの戦場で戦いが始まっていた。

「うおおおおおお!!」

キリトは体に突き刺さる弾道予測線を全てなぞり飛んできた弾を切り落とす。

「そこかあー!」

キリトはなにも無い虚空に向かって走り出す。中継を見ているプレイヤーにはなにも無い空間からいきなり弾が放たれそれを切り落とした様にしか見えなかった。だがキリトはそこにプレイヤーがいることを確信していた。

「この時を待ってたぜえ、ビィィィタアアア!!」

キリトが走り出した方向からぼろぼろのロープを纏ったプレイヤーが姿をあらわす。そのプレイヤーはよほどS T Rが高いのかアサルトライフルを片手で一丁ずつ持って

いる。だが同時に撃つのではなく片方ずつ撃ち弾倉を絶やさずに交換している。つまり常に銃弾がキリトを襲うのだ。それでもキリトは止まらずに進み続ける。その様はまさに鬼神、いくら弾が襲おうが全てを薙ぎ払い、進む。流石に全力疾走は出来ないがそれでもかなりの速度で近づく。なまじ遅い分ジワジワと恐怖心が襲う。だがプレイヤー…アヴェンジャーは多少怯むがそれだけだ。それにキリトは違和感を覚える、しかし全てを切り裂く積もりで駆ける。だが、

「死ねええええ!!」

アヴェンジャーは突然キリトの足元に銃口をずらす。地面に弾丸が着弾した瞬間、

ドオオオオオオン!!

「な!?!」

地面が爆ぜた。

「ヒヤハハハハハ!!いくらためえが銃弾を斬ろうが関係ねえんだよ!この周囲には何十個っていう地雷が埋まってるんだからよお!」

煙の中から何とか直撃を免れたキリトが姿をあらわす。

「ゲホッ、成る程な…だからその余裕か」

「俺は今までずうっとこの時を待ってたんだぜえ…こうやってお前を一方的に蹂躪できるのをよお」

「そこまで俺が憎いか、クラデイル」

かつての：S A O 時代の名で呼ばれ男は口角を邪悪に上げる。そう、この男、クラデイルはかつてキリトがヒースクリフに決闘で敗れ団員となったときの研修でキリトを亡き者にしようとした。その前にクラデイルはキリトとアスナに一方的な逆恨みをしていて三流の小悪党ぶりを発揮していた。そしていざキリトを殺そうとしたときアスナに止められ一方的にやられた。そして命乞いをしてアスナが怯んだとき手元の剣でアスナを殺そうとした。ここまでは正説と同じだがここから先はシンの介入により変わった。アスナが殺されかけたとき事前にアスナから連絡を受けていたシンは間一髪間に合いクラデイルの装備のみを完全に破壊し牢獄に叩き込んだのだ。

「お前とあの臆病者があるとき素直に殺されてればあの女は今頃俺に服従していた筈だった：それを邪魔してくれたからなあ：」

「例え俺がああとき死んでいたとしてもアスナはお前の物にはなつてなかつたよマヌケ」

「黙れガキイ!!」

キリトの安い挑発に乗り銃を乱射する。キリトは全てを切り裂くが足元には地雷が埋まっているため攻めに転ずることが出来ない。だがクラデイルも弾倉を無限に持っている訳ではない。キリトが押しきられるか、銃弾が撃ち尽くされるか、どちらの

精神が長く持つかの勝負となり戦況は停滞した。

「チイツ！」

「どうしたよ、当たってないぜ？」

俺は読心術の裏技たるシステム外スキル”同調”^{トレス}によってザザを手玉に取っていた。手に取るようにその動きが読める。攻撃をしようものなら全く同じ行動を取り相殺し、距離を取ろうとすれば意図的にタイミングをずらしその意味を無くす。ザザは今まさに俺の手のひらで踊っていた。そして俺はザザの行動力を奪うため足を切り落とそうとするがその瞬間、

ドオオオオオオン!!

「うお!?!」

突然の事に俺は一瞬動きを鈍らせた。そしてその隙にザザは透明化する。

「ツー!しまった!」

「成る程な…常に、視界に、入れて、なければ、ならない、のか」

俺はザザの姿を見失い周囲を見渡す。足跡があれば追える、だがそこで足跡が一人分しかないことに気付いた。

「無駄だ……フローターシューズ」、足跡は残らない」

「ほんとどこからそんな攻略サイトにすら載ってない品を見つけ出すかな!」

あのマントと言いつつ奴の装備は最新鋭過ぎる。厄介極まりない。

「そろそろ、時間、だな」

「何?」

その言葉を聞いた瞬間背後から何かが飛んでくる気配がした。咄嗟に避ける。それは野球ボールサイズの灰色の球体だった。

「グレネード!?この距離だとアイツも巻き添えだぞ!」

だがそれは閃光を放たず煙を吐き出した。

「クッソ、スモークグレネードかよ……この大会大活躍だな!」

俺は気配を追うが近くにザザの気配を感じ取れなかった。

「奴はさつき」時間だ」と言った。一体何の……

そこまで考えて一つの考えにたどり着く。それは笑う棺桶ラフィン・コフィンに所属していたからこそたどり着いたもの。

「あいつまさか!」

俺は全速力で走り出す。向かう先はキリトのいる戦場だ。

俺は攻め込めないまま弾丸をひたすら切り裂いていた、既に千は斬つただろう。正直集中力の限界が近い。

「ちくしょう・さっさとくたばれ！」

だが余裕が無いのはアヴェンジャー…クラデイルも同じらしい。残弾が残り少ないのだろう。ならば耐えきれば俺の勝ちだ。さつきからちよこちよこ動いて意図的に撃つのを避けてる部分を見付けていた。そこさえ避ければあいつに辿り着ける。俺は集中力を振り絞り耐える。そして遂に、

カチツ、カチツ

「なっ!?!」

弾切れを起こした。俺は一気に距離を詰める。

「ヒッ！く、来るなああああ!?!」

「これで終わりだ、クラデイル!!」

俺はソードスキルのヴォーパルストライクを叩き込もうとして…

ドスツ

「は？」

俺は突然全身の力を失い倒れこむ。何が起こったのかと確認すると首元に違和感があった。かつて自身の左手に打ち込んだのと同じ感覚、ピックだ。それもパラライズ付きの。

「どこから…ぐっ!?!」

「この！焦らせやがって！」

クラディールは俺の体を蹴っていた。何か体術系のスキルでも会得しているのか僅かにHPが減る。

「ハア、ハア、まあいい。これでじつくりと殺せる。お前を殺した後はあの女で遊んでやるよ、お前の目の前でな！」

「！お前?!」

「ヒヤハハハハハ、精々悔しがりな！」

そう言つて俺の懐をまさぐり *five seven* を取り上げ俺の頭に照準を合わせる。この距離なら俺のHPは削りきられるだろう。

「ちくしよっ…」

「死ねえ!!」

そう言つて引き金が引かれ…

「あ?」

なかった。

「な、んで…」

クラデイルは俺の目の前で倒れていた。同じ様に首元にピックが刺さっている。すると視界に足下が現れた。

「おい、これはどういう、事だ…」

「お前は、元々、捨て駒だ。いや、生け贄、か」

「な!?! どういう事だ!」

「こう言う、事だ」

そして目の前の足の本体、ザザは黒い拳銃を取り出す。

「お、おい、冗談だよな…? だ、だってそれは本当に…な、仲間だろ俺らは!」

「ラフコフに、仲間は、いない。いるのは、駒と、それを操る、人間、だけだ」

ザザは十字を切った。

「止めろ…」

俺は何とか声を絞りだし体を動かそうとする。だが律儀にシステムは俺の体を拘束

する。

「黒の剣士…お前は、コイツの、後に、ちゃんと、殺して、やる」

そしてザザは引き金を…

「止めろおおお!!」

凄まじい怒声が響く。目だけを動かすとシンが右手に3本のピックを持って独特な構えを取っていた。体術スキルと投擲スキルがカンストすることで開放される投擲系最上位スキル”トリシューラシュート”。破壊神の持つ槍の名を冠する最強の投擲術だ。一度跳ね上がり空中で体を捻転させその勢いを使い投げる事によりそのピックは音速を超える3つの弾丸と化す。システムアシストがないので流石にオリジナルには届かないがピックは恐るべき速度で放たれた。だがザザは俺の体を足でかち上げ自身の盾にした。

「グハッ…、のおー!」

俺は意地で体を反らし何とか躲そうとする。

「グッ!?!」

結果一つは避けきれずザザに命中したが残りの2つを食らってしまった。少なかったHPが削りきられ本当に体が動かなくなってしまう。

「後は、頼むぞ…」

俺はそこでアバターにDEADタグを付けた。

黒の剣士め、上手く避けたな。刺さったのは左腕、支障は無い。

「喜べ、贄、お前は、死銃の、伝説の、礎と、なれる」

「ふざけんちくしよおおおおお!!!」

俺は引き金を引き、飛び退く。臆病者が突っ込んできたからだ。間一髪だが弾丸は命中した。つまり、

「ガッ、ぐ…あが…」

麻痺は解けたのだろう手でのろのろと胸を掴む。そして、

ブツツ…

回線は切断された。今頃現実世界でのこいつの体は物言わぬ死体になっているだろう。

「後は、お前、だけだ」

この場所はいつに命令して作らせたエリア、罫作成スキルの上位、地雷作成。その

地雷をここには何十個と埋めさせた。俺のマスクには熱探知機能がある、どこに埋まっているかは一目瞭然なので踏む心配は無い。

「…?」

どういふことか一切の反応が臆病者から出ない。放心しているのだろうか？だが次の瞬間、

ザンツ!!

「なっ!」

左腕が飛んだ。慌てて後ろを向くとそこには幽鬼の様に佇み脚を構成するポリゴンが乱れている臆病者の姿があつた。

キリトがやられた、誰がやった？分かつてる、俺だ。俺がとどめを刺した。親友に手を掛けた。

目の前で人が死んだ。手の届く距離で。誰なら助けられた？俺だ、俺なら助けられた。
た。

まただ、また見殺しにしてしまった。罪を重ねた。

俺に意味があるか？意義があるか？理由があるか？資格があるか？キリトの親友を
名乗る資格が、シノンを想う資格が。

いや、無い。そうだ、俺には何も無い。ならば止めよう。戻ろう、元の俺に。全てを
諦めていたあの頃に。

そこで俺の意識は、張り詰めた糸が切れたように、ブレーカーが落ちたように、昏い
海に沈むように、張りぼてから中身を全て抜き、いくら振つても何も発さないただの
人形と化した。
人殺し

第十七撃

人と言う生き物は理性的な生き物だ。全生物の中で明確に意思を持ち高い知性を持ち言葉をもつて意思を伝える事が出来る。そしてその理性に子は親から真つ先に教わる事がある。それは日本人やその他の平和な国なら当然の様に教わる事、人を殺してはいけない”それは一種の洗脳や呪縛の様に一生植えつけられ、縛る。人は時としてそれを破るがその縛りは人に”躊躇”を与える。どんなに殺すことに馴れようとその一瞬の躊躇は完全に消し去る事は出来ない。躊躇いの無い人と言うのはその躊躇の時間が極端に短いのだ。そしてそれは心に起因する。噛み砕いて言えば心と言う物が殺しを躊躇わせる、という事だ。それは日本人であるがザザも例外ではない。

また、人の意識は0.5秒遅れてくるとも言われている。動き出してから知覚するまでに0.5秒の空白があるとと言うものだ。人はその間は完全な無防備になる。大抵対人戦のスポーツなどで上手い人と言うのはその空白を察するのが上手い。

そして殺し合いにおいて熟練者は視覚情報、聴覚情報、感覚情報に頼らずとも危機を察知出来る事がある。開戦前のキリトやシンの感じた嫌な感じはまさにそれだ。それは俗に殺気と言われる類のものを感知している。これは命がけの戦いに身を投じてい

れば自然と身につくものだろう。特に笑う棺桶ラフィン・コフィンの幹部はそのエキスパートだ。常に異常者P。hと言う存在の密度の濃い殺気を感じていたのだから。殺気による感知、それこそがシステム外スキルハイパーセンス“超感覚”だ。

ではなぜいきなりこんな話をしたのか、簡単な事だ。

「ぐあつー」

ザザが右ふくらはぎを斬られる。反応しようとしても動き出すことが出来ない。動きの合間にある絶対動けない硬直の時間、そこを的確に狙い攻撃されている。

ーどういうことだ！何故反応が出来ない！

ザザは内心かなり動転していた。反応を反射にまで昇華させた自分が一切の行動を封じられさつきよりも圧倒的な差でやられていることに。

「……」

対してシンは何も無かった。先ほどの激情も無く機械の様な面持ちで淡々とザザを捌き続ける。その度に全身のポリゴンがぶれる。一息に殺さないのは苦しみを与えるためなのか、はたまたただの気まぐれかは分からない。既に一分、その間にシンはザザに60ほど攻撃を与えている。ザザは一発も与えられず、まさに蹂躪ヒールリッパされていた。これだけのダメージならもう終わってもいい筈だがザザは自動回復スキルカンストのおかげで首の皮一枚で繋がっている状態だ。

「察知が出来ない……こいつ、あの殺気をどこにやった！」

今シンには殺気と言うものは存在しない。それどころか敵意も、怒気も、闘気も、憎悪も、侮蔑も、嫌悪も、ありとあらゆる全ての感情と意思が欠落している。それを人と呼んでいいのかは定かではない。ザザはマスク越しにシンの顔を見て得体の知れない恐怖に包まれる。虚ろで空っぽな昏い目、そこに人の輝きは無く、良く出来た人形を思わせる。

シンとラフィン・コフィンのギルドマスターであるPohの出会いとは初期ではまだ珍しかったMPKによる罠だった。言うまでも無くシンが被害者だ。Pohはただの検証実験のつもりでシンはたまたま目に入ったターゲットでしかなかった。どう考えてもニュービーな装備、まだ完全にソードスキルを使いこなせてないのだから動き、検証には持って来いだ。だが結果はPohの予想を覆した。Pohがトレインしたモンスターは十体、初期の攻略組ですら個人ではとてもではないが対処しきれない。だがシンはまるで全身に目が付いているのではないかと、言う精度で全方位からの攻撃を避

け続けた。十体を倒す時間はそこそこかかったものの被弾はたったの二回、この時すでに異常性を発揮していた。そこでPohは確信した。『この先こいつは邪魔になる』Pohの判断は早く、即座にダガーで殺そうとした。この時は全プレイヤーがステータスが低く個人の技量で生きている状態だった。Pohはこの段階において自分より技量が優れているプレイヤーはそうそういないと思っていて。余裕を持ち、だが慢心はない、理想的なコンディションで殺しにかかった。だが結果はPohにとって最悪なものだった。三分。たった三分で死の淵に追いやられたのだ。モンスター相手とは比べ物にならない速度、精度、どれもが桁違いだった。何より先が読めない、これがPohにとって悪夢だった。感情が無く、意思が無く、意義が無く、言葉も無く、ただひたすらに他者を殺そうとする。Pohにとって初めてのタイプだった。ゆえに行動が出来る。当然だ。人の脳を積んだ機械を相手にしているようなもの、アルゴリズムも無ければ感情を揺さぶることも出来ない。Pohは殺される寸前に三分で何とか探し当てた言葉を紡いだ。

『待て、俺ならお前に殺しをさせずに済む』

この言葉でシンはようやくやく止まる。

『…それはホントか？』

『約束しよう、だから俺の作るギルドに入れ。そうすればお前は殺しをせずに済む』

『…分かった』

この時ほど P o h は大博打に勝てた覚えはない。少しでも選択肢をミスしていれば自分は早々にこの世界と現実世界から退場していた。シンはこの時世紀の大犯罪ギルド、笑う棺桶ラフィン・コフィンの初のギルドメンバーとなった。シンは P o h からの殺気に馴れろと言うお達しを貰いギルドの実態を知っても残り続けた。確かに殺気に衝動的な殺人は無くなった。だが心は擦り減っていき疲れ果てていた。後はシンが語った通りだ。この話はキリトでさえ知らない。まさにシンと P o h だけの話。

暗い、昏い。深い、不快な海の底。自分と言う存在がどこまでも沈んでいく感覚。俺はこの感覚を知っている。二年前まで俺はずっとここにいた。光も差さない真っ暗な世界。ここは俺の本質の世界。この世界こそが本来の俺。どこにも明かりなど無い。希望はすべて絶望によって塗りつぶされている。そんな中漠然と頭には外の光景が写っている。景色は流れ続けている。超高速で動いているのだろう。

「ばーか、そんな動き三分が良いとこだ。そのままじゃ死ぬぞ、『俺』」

「それがどうした？『俺』に生きている価値があると？すでに五人：いや、見殺しを数えればそれ以上の人を殺している俺に？」

「真つ暗な世界と同じ声が二つ響く。丁度視界では地面が目の前に来ていた。脳が動くことを拒否し始めたのだ。」

「…そう、だな。俺なんか生きていい訳無いよな」

「—そうだ。だがタダで死ぬのもつまらないからな、道連れぐらいにはしてやるさ。俺も『俺』も嫌いなアイツをよ」

手の中にはグレネードが握られている。ピンを抜けばすぐにでも爆発するだろう。

ああ、つまんねえ人生だった。はは、最後に浮かぶのが殺した奴らの死に顔かよ。

両親の顔、俺をバカにして死んだことに気付かず逝った三人の呆けた面、ジョニーに殺された人形殺人の犯人、クラデイル、今まで俺に関わって死んだ奴らの顔が脳裏をよぎる。

「これで終わりかよ…」

ああ、折角好きな奴が出来たのになあ…シノン…いや、

「いい訳無いだろ…ようやくだぞ」

「—なんだ？ツ!?お前まさか！」

「ははは！…そうだよ、何諦めてんだ俺！自分で言ったじゃねえか、生き残る事を考えろつて」

「生きる価値は無いんじゃないのか？」

「ああ、ねえな。だから今作つたんだよ。俺はなあ…シノンの、朝田詩乃の為に生きる！約束をそう簡単に捨てる訳にかねえだろ！」

「…そうかよ、なら勝手にしろ。精々醜く足掻いてろ」

「そうさせてもらうさ、『俺』」

「もう来るんじゃないぞ、俺は一人が好きなんだよ」

そう言つて俺は浮かび上がっていく。送り出した声はどこか笑っている様に感じた。

「ぐっ…ようやく、終わったか」

ザザの足元にはシンが横たわっている。攻撃の最中に突然倒れたのだ。ザザのHPは残り数ドット。だがそれも自動回復スキルで回復していく。シンは仰向けに倒れ右手は心臓の上に置かれている。ナイフは幾度もの攻撃で耐久値を減らし砕けた。だが

その後もシンは素手で無双していた。恐ろしいまでの適応力だ。その目に未だ光は戻っていない。

「これで、終わりだ、臆病者」

ザザは耐久値ギリギリとなったエストックをシンの心臓を右手ごと突き刺した。

時を遡りシンが堕ちる前ぐらい。

「シン……」

スナイパーシノンにはザザとの狙撃戦において銃を大破することが出来た。だが代償にスコープを失ってしまっていた。いくらシノンがスナイパーとして鷹ホークアイの目スキルを保持していたとしてもこの距離では豆粒ほどしか映らなかった。だがそれでも聞こえていたシンの怒号。地を砕かんとするその怒号に体が竦んでしまう。シンの手から三つの線が放たれる。おそらくピックだろう。ピックは恐ろしい速度でザザに向かって行く。しかし、

「あれは……キリト!?!」

キリトが蹴り上げられてザザの盾にされてしまった。だが一本は通ったのだろう。僅かに姿勢が傾ぐ。キリトはそのまま倒れてしまった。

「…ナイスファイト、キリト」

倒れたままのキリトにDEADタグが付くのを確認する。寸前の盾にされたのでやられたのだろう。シノンにはキリトに労いの言葉を掛ける。その時シンの様子が変わっていることに気付く。

「シン、どうしたの…?」

その瞬間、

「え?」

シンの姿が消える。視界を広げると真逆の場所に立っていた。

「うそ…いくらなんでも早すぎるわよ!」

それはそうだ。その時のシンの神経伝達速度は通常の数倍にまで跳ね上がっていた。感情と言うものを削ぎ落とすことによつて別の情報処理能力を飛躍的に高めている。結果、アミュスファイアではポリゴン生成が追いつかない速度での移動をしていた。ではなぜシンはポリゴンを保っていられるのか?答えは簡単、ナーブギアを使っているからだ。ナーブギアの出力はアミュスファイアの三倍以上、更にアミュスファイアはナーブギアの下位互換なのでソフトを使うことができる。キリトの反射速度、シンの加速神経は

ナーブギアでなければ十全に發揮することは出来ない。シンはそう判断して菊岡に交渉して残してもらっておいたナーブギアに手を出した。それは並大抵の覚悟ではない。少なくともこれはシンにとってトラウマの塊であるからだ。だがそれを堪えて被った。それほどまでにシンはこの戦いに賭けていた。それを事情をなにも知らないとは言えシンンは感じ取っていた。

「助けになりたい、でもスコープは壊されて狙う事が出来ない…弾もあと一発…その時、今まで圧倒していたシンが突然倒れた。脳が限界を迎えたのだ。」

「シン…」

シンンの視界の先ではザザがボロボロの体を引き摺りながらシンンの所へ歩いていきエストックを高く振り上げていた。

「お願い、神様…!」

シンンは手の中のアイテムを握りしめた。

「あれ? 私は今何を握っている?」

シンンはゆっくりと手を開く。

「そっか、これよ。これなら!」

シンンの手の中にはシンを救うためのものがあつた。シンから貰つたアイテムが。

そしてシンも、

ーまだだ、まだ、死ねない。シノンを…守る！

シノンから貰ったアイテムに希望を託していた。

互いにあげたアイテムは絶体絶命のシンを救う希望となった。ここが運命の分岐点、戦いは佳境だ。

第十八擊

「ぐっ……ようやく、止まったか」

ザザがうつ伏せに倒れた俺を足でひっくり返す。転がされた勢いで右手が心臓を庇うような位置に来る。体を動かすことは出来ない。極端な脳の負荷で動かすことが出来ないのだ。

「お前には、言い残す、事すら、許さん。何も、守れない、自分を、憎みながら、逝け」
体の制御権がまだ完全に帰ってきていない。

「耐えろ……シノンを信じろ！」

必死に自分に言い聞かせる。ザザがエストックを引き絞り、俺の右手ごと貫こうとする。

「死ね」

瞬間、エストックが降り下ろされ……

ガチン!!

「なっ…!?!」

このゲーム最高クラスの金属が目立たない手甲を貫通出来なかった。この手甲はラースオブキングをシノンと討伐した際、俺のドロップしたモノクル型スコープとトリードした物だ。あのバカみたいに硬かった金属が使われていてなおかつ軽いという超レア物だ。

ーシノン…ありがとう

そして俺はこの事を一生忘れることが無いだろう。

俺の手甲に阻まれ、一瞬、ほんの一瞬の停滞の瞬間、目の前に金色の物体がエストツクのと真ん中を撃ち抜いた。それは弾丸。

「バカな!!」

シノンが超絶技巧による狙撃でエストツクを撃ち抜いたのだ。ザザの行動の予測、エストツクの最も弱い場所の判定、仲間を撃ちかねない恐怖を押さえ付ける度胸、全てを総動員してこの一瞬を作ってくれた。

だがまだ足りない

あともう一瞬、そうすれば俺はこいつを倒せる、だが動けない。ザザの奴は動揺しながらも既に俺を殺す為の行動を起こしている。腰から黒星を抜き去ろうとしている。このままでは一瞬間に合わない。極限の焦燥に駆られていたその時、

ビィ…

ザザの頭に弾道予測線が突き刺さった。それはシノンがくれた最高の一弾、ファントム・バレット幻影の弾丸。さっきの狙撃を目の前で見たザザはもはや脊髄反射で俺から距離を取った。整った。

「お、オオオオオオオオオオオオ!!!」

身体が跳ね上がる、世界から一切の音と色が消える、一秒が永遠へと引き伸ばされる。ザザの赤く光る目と視線が合う、マスク越しで何を考えているかは分からない。もしかしたら逆転の手を考えているのかもしれない。だから俺はそんなことを考えさせる間も与えずに行動した。

左手がザザの喉を抉った、声はもう出せない。

本来なら小太刀を持つている右手がザザの左脇腹を深く手刀で抉った、身体のバランスはもう取れない。

本来なら持ち変えた小太刀がある左手で背骨ごと肺を手刀で身体を回転させながら切り裂いた、呼吸と立ち続けることはもう出来ない。

右手が背後から再び正面に回転しながら移動した力を余さず伝えザザの心臓を貫き背中へ貫通するまで突き刺した、この世界で動くことはもう出来ない。

アインクラッド十のユニークスキルの一つ暗殺術の最高位スキル、彼岸葬送^{ひがんそうそう}。最初の一撃で断末魔をあげて封じられ、二撃で立ち続ける誇りを砕かれ、三撃で生きていた世界の空気を吸うことを禁じられ、四撃でこの世に留まることを否定する。対人、もしくは人型モンスターに置いて必殺を誇る最強の技だ。

「っはあー」

引き伸ばされた時間が戻り視界に色が着く。目の前には死亡タグの付いた欠損だらけのザザだ。

「はあ、どうせ聞こえてんだろ？お前が言いそうなことの答えを言ってやるよ。アイツは俺が引つ捕らえる。流暢な英語話してたからもしかしたら外国にいるかも知れねえが俺が止める。何年掛かろうがだ。ジョニーの奴もな。お前はおとなしく豚箱で臭い飯でも食つてろタコ野郎」

俺は言いたいことだけ言ってザザに背を向けた。ボロボロの体はゆつくりと、だが一

歩ずつ愛する人の、シノンの元へと進む。

いつもならなんてことのない距離を随分と時間を掛けて歩いた。脳を過剰に使った弊害か身体中に幻肢痛が走る。痛みに顔を顰めながら進んでいると前から足音がした。音の方に顔を上げると一人の少女が走ってきていた。

「シンー」

その声を聞いただけで俺は頑張ったなど自分を誉めたくなる。愛おしさが身体中を駆け巡り俺も堪らずに痛みをはね除け声を上げる。

「シノーン」

シノンは勢いを緩めず俺に抱きつく。倒れなかったのは男の意地だ。

「良かった…無事で良かった…」

埋めた顔から掠れた声が聞こえる。その声は濡れているようにも聞こえた。感情表現がオーバーなこの世界じゃ涙も隠すことは出来ない。

「…カツコ悪いとこ見せちまったな」

「そんなことない、確かに少し怖いと思ったけどシンはシンだった。…私を、守ってくれた」

「…そっか、守れたんだな、俺。でも俺も守られたよ。エストツクを撃ち抜いたあの一撃、それと弾道予測線を使ったフェイント、見事だったよ」

「あのエストツク？を撃ち抜いたあと、まだ足りないと思って無我夢中だったのよ。役にたったなら良かったわ」

まだ涙に濡れた顔を上げシノンは柔らかく微笑んだ。その顔を見て急に恥ずかしくなり俺は慌ててしまう。

「お、おう。本当に助かったぜ。それよりもどうする？このままじゃBob終わんないけど」

「大丈夫よ、ちゃんと考えてあるわ、はいこれ」

「ん？」

そうしてシノンから渡されたのは随分と見覚えのある艶消しの黒色の球体だった。しっかりと十秒タイマーも起動してある。

「…おみやげgrenade？」

「流暢ね。答えはyesよ」

そう言ってシノンは再び俺に抱きつく。俺の手からグレネードが離れないようにとても良い笑顔で。

「…次はちゃんとした決着をつけような」

「上等よ」

そして俺達は仲良く視界を白く染め上げた。

第三回バレットオブバレッツ優勝者、 s i n & s i n o n

ピピツと被っている機械から音がなり、自分の感覚が数時間ぶりに現実と感覚が再接続される。俺はゆっくりと瞼を上げ目だけで周囲を見渡す。菊岡がボディガードを雇っているからそこまで心配する必要はないと思っではいるが慎重になることに悪いことはない。周囲の安全を確認してから俺はナーブギアを頭から外す。その際やはり幻肢痛が体を走るが少し前までは日常茶飯事だったので無視する。立ちあがりカラカラの喉を潤すために蛇口を捻ったとき、

ガシャン！

そんな音が外から響き鼓膜を叩いた。

「シノン！」

俺は狭い部屋を駆け足で走りドアを蹴破る勢いで開ける。すると「朝田」と書かれた標識の前に二人の黒服が帽子を被った余り特徴のない少年を拘束していた。

「あんたらは……」

「安心してください、仮想課から派遣された者です」

声の方向に顔を向けると丁度階段を上がってきた新たな黒服にそう言われた。

「こいつは……」

「五時間ほど前からこのアパートの前を徘徊していたのです、そしてつい先程この部屋に押し入ろうとしていましたので取り抑えました」

「この寒空の中五時間も……」

でも間違いない。こいつは死銃の片割れだ。

「シン……？そこにいるの？」

「あ、ああ。無事か、シノン？」

その瞬間、

「お前がああああああああ!!」

「な!?!」

いきなり取り抑えられていた少年が叫びだした。

「消えろ! 朝田さんの前から消えろお!」

「え…? その声、新川君?」

シノンがドアを開ける。

「ああ! 朝田さん! もう大丈夫だからね! すぐにこんな奴ら消してあげるから!」

「し、新川君? なに…言ってるの?」

「こんな奴に付きまとわれて大変だったよね! あの洞窟の時や最後の瞬間も脅されて仕方なかったんだよね! じゃないとシノンがあんな形で終わるはずないもの! 大丈夫、大丈夫だよ!」

「お前…頭イッテんのか?」

「黙れ朝田さんにまとわりつく害虫が! お前は朝田さんに相応しく無いんだよ! さつさとこの世界から消えろお! 朝田さんはボクと結ばれる運命なんだ! お前は邪魔なんだよ!」

「はあ!?!」

あまりの発言に俺はすつとんきよな声を上げてしまう。少年は拘束から逃れようと身を振らせ暴れる。その最中帽子が落ちた。

「お前あの時の…」

帽子が落ち露になった顔は少し前にシノンがギャル三人に囲まれてた時に見た少年だった。

「お前みたいに人を脅す事でしか勝てない奴は朝田さんに相応しくないんだ！朝田さんは強いんだ！だつて！」

少年…新川とやらは俺に向けていた怒りと憎悪の表情を一転させ恍惚の表情を浮かべた。

「朝田さんは日本で唯一銃で人を殺した人なんだから！」

「え…」

シノンの顔色がサアと白くなる。

「小学生の時に銃で人を殺すなんて朝田さんにしか出来ない事なんだ！朝田さんは本当にすごいんだよ！だからボクはそんな朝田さんに憧れてあの世界で黒星ヘイシンを選んだんだ

！」

「黒星ヘイシンを、選んだ…？じゃあ、新川君が、死銃の仲間なの…？」

その言葉に新川は軽く目を見開き更に恍惚とした表情を浮かべる。

「流石朝田さんだね、そこまで分かったんだ。そうだよ！ボクはね！朝田さんに憧れてあの死銃を作ったんだ！朝田さんの強さの象徴を自分で使うために！」

「あ…」

「シノン！」

シノンは体をふらつかせへたり込んでしまいそうになる。俺は間一髪でそれを抱き止める。

「薄汚い手で朝田さんに触れるなあ!!」

一転して新川は怒りの表情を浮かべる。

「お前みたいな人殺しが朝田さんに触れてんじゃねえ！消えろ！さっさとこの世から消えろ！」

俺はその言葉をまともに受け取らず無視しようとしていたが。ある部分に引っ掛かった。

「さて、何で俺が人を殺したって知ってる…？」

「そんなもの、兄さんに聞いたに決まってるだろ臆病者！」

その言葉にかちりとピースがハマる。

「お前、ザザの弟か！」

その言葉に新川は嘲笑を浮かべる。

「ああそうだよ！だからボクは知ってるぞお前があの世界で三人も人を殺した事を！最低なクズ野郎だな！」

「テメエの兄貴は俺よりもはるかに多い奴を手に掛けてるぞ」

「それがどうした！問題なのはな、お前がそんな薄汚い手で朝田さんに触れている事なんだよ！」

「…ならテメエなら触れて良いってか？」

「当然だろ！朝田さんに触れて良いのはボクだけなんだ！朝田さんはボクの物なんだ！」

その言葉に一瞬で頭が沸騰する。

「ふざ」「ふざけないで!!」 け…んな？」

突然腕の中から大声が聞こえた。さつきまで顔面蒼白だったシンロンが顔を怒りの表情に染め新川を睨んでいた。

「シンの事を何も知らないで語るな！」

「朝田…:さん？」

「私は知ってる！シンがどれだけ苦しんでたのかも！それを乗り越えようとしてることも！」

「朝田さん…:なに、言ってるの？」

その涙は、（終撃）

死銃事件解決からはや二日、俺は今詩乃の通う高校の前でバイクにまたがりながら詩乃が出てくるのを待っている。既に生徒はちらほらと校門から出てきて俺に無遠慮な視線を浴びせているが詩乃はまだ来ていない。

「…絡まれてたりして」

益体のない事を呟き俺は再び視線の集中放火に耐えることにした。

ここに呼び出されるのはもう何回になるだろう。私はあの三人組に呼ばれ学校の中でも特に人気の無いところに来ていた。

「よお、朝田あ」

待つこと十分、ようやく遠藤達が来た。本当なら帰っても良かった、けども私はここではじめをつけようと思っていた。

「このあとカラオケに行くんだけどさあ、ちよおつと足りないんだわ。とりあえずこんだけくんない？」

そう言つて遠藤は二本指を立てる。遠藤達が金をせがむときの基本単位は万だ。つまり二万円。ちよつとで済む額ではない。いつもならそんなお金は無いと言つて現金全部を持つてかれるのが常だった。だけでも今日は違う。私はせめてもの精神的防壁として着けていた弾丸にも耐えられる素材でできた伊達眼鏡を外し、遠藤達にありつたけの思いを込めて言いはなつた。

「あなた達に、渡すお金なんか、一円たりとも無い！」

きつぱりと言つてやった。すると遠藤は顔を歪め憎々しげに言う。

「調子乗つてんじやねえぞ朝田あ」

すると一転して嘲笑を浮かべた。

「そんな朝田にプレゼントです、今日は兄貴からアレを借りてきました」

遠藤はジャラジャラとストラップの付いた自分の鞆を漁りひとつの“銃”を取り出した。

1911ガバメント、全長216mm重量1077gのアメリカ産の拳銃だ。もちろんモデルガンである。でも私にとっては恐怖の象徴と言える。

「ほらほら、どうしたんだよ、朝田の大好きな大好きな銃だぜえ？感動のあまりゲロるな

よ！」

「ギヤハハハと遠藤達が品の無い笑いをする。そんな声も今の私にはゴウゴウと鳴る血流の音で遠く聞こえる。」

「ゆつくり見ていけよ、今回は邪魔する奴はいないんだからよお」

「そうだ、今ここに改はいない。私一人、一人、ひとり…」

「そうだ！ついでに味わってけよ、お前が撃った銃をよお」

「遠藤はゆつくりと銃口を私の方に向ける。動悸が早くなる。目を瞑り耳を塞ぎたくなる。逃げ出したい。でも、」

「なに言ってるんだ、今も十分戦ってるんだろ」

「あの洞窟でシンに言われたことが頭をよぎる。」

「—そうだ、戦ってるんだ。だったら逃げるな！」

「自分を叱咤する。遠藤達のにやけた顔をにらみ続ける。指が引き金に掛かり、そして
…

カチッ

「あ？」

カチッカチッ

「は!?何で出ないんだよ！」

私はそうつと息を吐く。分かっていたとは言え緊張するものは緊張する。遠藤はなお、苛立たしげに引き金を引こうとする。私は遠藤に歩み寄り手を抑え銃を奪い取る。「1911ガバメントか、お兄さん渋い趣味ね」

遠藤達はあまりの事態に呆気にとられる。今までひどい拒絶反応を起こしていた私が平然と銃を握っているのだから当然か。

「さてと、これでいいかな？」

私は捨ててあつた空き缶を私の胸の辺りまである壁の出っ張りに置いた。

「この銃はね、こことこのセーフティを解除しなきゃ撃てないのよ」

カチリ、カチリとセーフティを解除して照準を空き缶に合わせる。初弾は勘でいくしかない。この銃のクセが分からないから。しかし思いとは裏腹に私の体は銃の使い方が刷り込まれているようだった。

バスッ カンッ！

見事にと真ん中に命中、内心驚いてしまう。でも、それをおくびに出さずに私は飄々と言い放つ。

「…あら、運が良いわね」

「な、な…」

遠藤達は口をバカみたいに開けて呆然とする。私は振り返り遠藤の元へ歩き出す。

「ひっ…」

…少し傷付くけど良い様ね。遠藤の前でセーフティを戻しグリップ側の方を渡す。堪能させてもらったわ、いい銃ね。でも、人に向けるには危ないわ」

鞆を拾い上げ私は遠藤達の間をすり抜ける。立ち去る直前、私は振り返り言った。

「…じゃあね、さよなら」

「ッハア！」

詰まっていた息が呼吸を思い出す。まだ耳元には血流の激しく流れる音が聞こえている。でも、

「乗り越えられた…」

ようやく…ようやく進めた。それは小さな一歩かも知れない。でもその分改に近づけた。私は軽くなった気持ちを押さえ付けぬまままた一歩踏み出した。

踏み出したけど、

「なにしてるのよ……!」

迎えに来るとは聞いてたけどなんで、

「なんで校門の前にバイクで来てるのよ……」

出たいけど出れない、人前に出るのに躊躇ってしまう。どうにかして移動させて別の所で待ち合わせするしかない、だが天は私を見放した。

「…あれ？詩乃、そんなとこでなにしてるの？」

「ちよつ!」

バツ!と周りの生徒達が私を見る。すると人混みの中から比較的話す方のクラスメイトが走り寄ってきて、

「ちよちよちよ朝田さん!あの背高のイケメンさん誰!?朝田さんの知り合い!」

「えーと、その……」

「おーい、詩乃ー?」

「ちよつと改静かにしてて!」

「「名前呼び!」」

しまった!火に油を注いってしまった。

「ま、また今度!」

「あっ！逃げた！」

明日教えてよー！という声を後ろに聞きながら私はダッシュで改の元に向かう。

「なんでこんなところに停めてるのよ！」

「え？分かりやすい方が良くはないか」と

「変な目立ち方されるわ！後少し遅かったら教師を呼ばれてたわよ」

「うわマジか、危な……」

「はあ……次は気を付けてよね」

「善処しますよ、はい」

そう言つて改は私にヘルメットを渡した。バイクは今時珍しいガソリンの旧型らしいけど私は今の電動式よりもこっちの方が好きだ。ヘルメットを被り改の後ろに乗る。

「しっかりと掴まっとけよ」

私はぎゅつとしがみつiki改に体を密着させる。緊張もするがとても安らぐ。

「んじや行きますか」

大きな音が私の鼓動の音を隠すように鳴り走り出す。……多分聞こえちゃつてるけど。

俺と詩乃は以前和人と一緒に呼び出された喫茶店に来ていた。あまり会いたいとは思わないが事件の経過を知る必要もあるので渋々といった具合だ。

「よくやった俺の理性、途中ホテルの誘惑もあつたが良く耐え抜いた！」

小声で俺の理性を褒め称える。

「なにバカ言ってるのよ、行くわよ」

…聞こえてた

「それにそういうのはもつと雰囲気がある時に…」

…聞こえちゃった

「あー、うん。頑張ります」

「うえ!? あ、いや、その、決してそういうことをしたいという訳じゃなくて…」

「うん、分かってるよ、ムードがある方が良いんだよね? 詩乃ってクールに見えて結構口マンチストだよな」

「それ以上喋るなああああ!」

詩乃が真っ赤になつて早足で喫茶店に向かつていった。可愛いなあと思ひながら俺

は詩乃の後を追った。

店内に入った後、俺と詩乃は既に来ていた菊岡と合流し適当に注文を取った。

「では今回の顛末をお伝えする前に、朝田詩乃さん」

「は、はい」

「この度はこちらの不手際であなたを危険にさらしてしまったことを深くお詫びします」

「俺からもだ、すまなかった」

俺と菊岡は詩乃に対して深く頭を下げる。

「い、いえ。そちらには既に色々配慮してもらったので…」

「そう言つて頂けると助かります」

「…とりあえず、事の顛末を聞かせてもらえるか？」

「ああ、勿論だよ。でもその前に」

すると丁度俺達が頼んだ品が運ばれてきた。詩乃は運ばれてきたチーズケーキに恐る恐る口を付けたが美味しかったのか夢中で半分ほど平らげていた。途中で俺と菊岡の視線に気付いたのか顔を赤くしながら一言、

「…美味しいです」

「それは良かった。美味しいものもっと楽しい話をしながら食べたいけどね」

「おいこら詩乃にゲテモノの話を聞かせようとしてんじやねえよ」

「し、心外だなあ。東南アジアの食べ歩きの話は自信があるんだが…」

菊岡はぶつくさと呟きながら鞆の中から極薄のタブレットPCを取り出した。

「まず死銃本人である新川昌一の事だね。彼は幼少から体が弱かったそうさ。中学を卒業する頃までは入院を繰り返していたらしい。そのせいで父親は実家の総合病院の後継ぎにすることを早々に諦めて三つ年下の弟の新川恭二にその役目を与えようとしたそうさ。小学校の時から家庭教師を付け、自らも勉強を教えたりしてた一方で昌一の事はほとんど顧みなかった。兄は期待されないうことで追い詰められ、弟は期待されることで追い詰められたのかもしれない…とは聴取における父親の弁だが」

一度菊岡は言葉を切りコーヒーで唇を湿らせた。

「それでも兄弟仲は悪くなかったそうさ。昌一は高校を中退してから精神の慰撫をMMORPGに求め、それは弟の恭二にもすぐに伝播した。やがて兄は“SAO”の虜囚と

なり、その間父親の病院で昏睡していたのだが…生還してからは彼は恭二にとってある種の英雄になったそうだ」

「…おおかた、ザザの奴がどれだけ自分があの世界で多くの人を手に掛けた、恐れられたかを語った、てどこか？」

「まさしくね」

「…ヘドが出る」

「だがそれは虐められていた恭二にとって嫌悪ではなく解放感や爽快感になっていたそうだ」

「あの…」

「ここで詩乃が口を挟んだ。

「そういうことは、新川君…いえ、恭二君が話したんですか？」

「いや、これらは全て兄の供述に基づく話です。昌一は取り調べに聴かれたことは全て素直に話しているらしい。対照に弟の恭二の方は完全黙秘を貫いている」

「…そうですか」

あの時、詩乃に完全に否定されてあいつの魂は完全に行き場を失ったのだろう。もしかしたらGGGに残したままなのかもしれない。

その後、死銃がどうやって個人情報を手に入れたか、どんな風に家宅に侵入出来たかを聞いた。

「…結局、ザザにとつてはこれもゲームだったんだな。ただひとつ、人の死と言うものだけが現実で。つってもそこまで誘導したのは間違いないくPhoの野郎だけだな。アイツはあの世界の弊害をいち早く理解してやがった」

「それは？」

「妄想と現実の境目が薄くなっていくことだよ。区別がつかなくなっていく」

「…改君はどうなんだい？」

「あの世界には確かに色々置いてきた。だがそれだけだ」

「戻りたいとは？」

「悪趣味だな。和人だつてそう言うだろうよ」

俺はちらりと詩乃を見る。

「…詩乃はどうだ？」

「え？」

詩乃はしばらく戸惑い、机の下の俺の手を握った。

「…私にとつての現実は今がある場所だわ。こうして改と触れ合える今が。例えばここがアミューズフィアの中だとしてもね」

俺はその言葉に詩乃を無性に抱き締めたくなった。…意地で耐えたけど。

「菊岡、今の詩乃の言葉は忘れろよ？この言葉は俺のもんだ」

「ずっと気になっていたけどもしかして…」

「お先に失礼、こ・う・か・ん・さ・ま！」

「…現実なんて非常なんだ」

菊岡が遠い目をする。

「お前のところの警備がザルだった報いだ。素直に受けとけ」

「それを言われると何も言えないね…」

「所でだ、勿論他の協力者は全員捕まえたんだよな？」

「え、いや…」

「おい、まさか…」

「…昌一含めてこの計画に参加したのは四人。新川兄弟にジョニー・ブラック…本名、金本敦、そしてアヴェンジャー、倉田出流、この四名だ。この内、倉田氏は自宅にて死亡しているのが確認された。そして金本は…」

「逃げられたと…」

「いやー申し訳ない！」

「笑って済むとでも？」

「本当にごめんなさい」

菊岡が深く頭を下げる。

「てか、倉田？もしかして…」

「ああ、倉田出流いずるはあの倉田次郎氏の息子だよ。公にはされてないけど近いうちに失脚が約束されている」

「ざまあとも言わずれえな…」

いくら相手が憎くても死が絡むと何とも言えない。

「仮想課としてはやり易くなるんだけどね」

菊岡も苦笑を漏らす。

「とにかく現在逃走中の金本は全国指名手配している。捕まるのも時間の問題だよ」

「…だといいいがな」

「あの…」

詩乃が片手を上げ質問をする。

「新川君…恭二君は、これから、どうなるんですか？」

「うーん…」

菊岡は短く唸る。

「彼は十六歳なので少年法による審判を受けることになるんだが…亡くなった人数が人

数だからね、家裁から検察へ逆送されることになると思う。恐らく精神鑑定も行われるだろう。その結果次第だが…医療少年院へ収容となる可能性が高いとおもうね。なんせ二人とも現実と言うものを持っていないわけだし…」

「いえ、そうじゃないと思います」

俺は詩乃の言葉を静かに聞いている。菊岡は視線で先を促した。

「お兄さんはわかりませんけど…恭二君は…ガンゲイル・オンラインだけが現実だったんだと思います。この世界を捨てて、あの世界が真の現実だと、そう決めたんだと思います」

「厳しいようだがそれはただの逃避では？」

「世間一般からすればそうだと思います。でもネットゲームというのはエネルギーをつぎ込み過ぎれば娯楽から、その、最強を目指して、凄いストレスの温床に変わると思っています」

「ゲームで…ストレス？それは本末転倒というものじゃ…」

「はい、恭二君は文字通り転倒させましたんです。二つの世界を…」

「しかし…何故？どうしてそこまで最強を望んだのか…」

「それは…」

「強くなりたいたからだろ」

詩乃は俺の言葉にゆっくりと頷く。

「そうね…プレイヤ―は皆、そうなのかもしれない…ただ強くなりたい」

詩乃は顔を上げ菊岡を正面から見ろ。

「あの、恭二君には、いつから面会が出来るようになるんでしょうか？」

「ええと…送検後もしばらく拘置されるだろうから、鑑別所に移されてからになりますね」

「そうですか——私、彼に会いに行きます。会って、私が今まで何を考えてきたか…今、何を考えているか、話したい」

菊岡は、ひどく珍しく、本心からの微笑を浮かべた。

「あなたは強い人だ。ええ、ぜひそうしてください。詳細は後程メールで送ります」
そう言ううちちらりと時計を覗き、

「申し訳ないが、そろそろ行かなくては。閑職とは言え雑務に追われていてね」

「そうかい、手間かけて悪かったな」

「あの、ありがとうございます」

「いえいえ、君達を危険な目に遇わせたのはこちらの落ち度だ。これくらいの事はしない」と

菊岡は立ち上がり伝票をとろうとして、動きを止めた。

「ああ、そうだ。改君、実は君に新川昌一から伝言があるんだ。彼は君への伝言を交換条件に聴取に応じていてね」

「…聞くよ」

「ありがとう…」これが終わりじゃない。終わらせる力は、お前にはない。すぐにお前も、それに気付かされる。イツツ・シヨウ・タイム”：以上だ」

菊岡はにこにここと手を降りながら俺達の所から去っていった。それから十分。

「つたく、あんにやろ…」

「…あの人は何者なの？総務省の役人って言ってたけどなんか…」

「詩乃の直感は当たってると思うぞ。ただの役人じゃない」

「どういふこと？」

「事件からまだ二日、なのに詳しくすぎるだろ。この縦社会の日本でだぞ？」

「んー…」

「要は総務省ってのは仮宿なんじゃないかって事。本来の所属は警察庁、あるいは…」

「あるいは？」

「…自衛隊」

「な…！」

「前にな、和人の奴とアイツを尾行したことがあんだよ」

「何してるのよ…」

「まあまあ。そしたら地下の駐車場にでかい黒の車があつてな、そこからダークスーツの人が降りてきてご丁寧に車を開けるわけだ。そのあと道路に出て二人でバイクで追いかけたんだが撒かれてな。菊岡が市ヶ谷駅前で降りたのは分かったんだが見失った」

「市ヶ谷？霞ヶ関じゃなくて？」

「そ、んでもって市ヶ谷にあるのは」

「防衛省…」

「まあもしかしたらだけど」

「でも何で…」

「アメリカじゃフルダイブ技術が軍事訓練で使われてるって話があるんだ」

「え!?軍で?」

「そう。例えば…あ、悪いけど銃の話になるぞ」

「そのくらいなら大丈夫よ」

「OK。例えば銃の使い方だ。どうやって弾を込めて、撃つときにこうすればいい。これだけでも相当な節約になる」

「そんなこと言われても…」

「あくまで噂だけだな。フルダイブ技術の進歩は目覚ましい。これからも色んな所で使われるだろうさ…とりあえず…あいつにや注意しとけよ」

「う、うん」

「うし!そんじゃ…あー、そうだった」

「なに?どうしたの?」

「詩乃、これから時間ある?」

「あるけど…」

「んじゃ悪いけどちよつと付き合ってくんね?和人のお仲間に事情説明する必要があるが
出てな…」

「…それ絶対?」

「出来れば来てくれると…」

「…はあ、いいわよ」

「すまん、助かる」

「今度何か奢ってね」

「手料理振る舞っちゃる」

「それは楽しみね」

俺と詩乃は停めてあるバイクの所へと向かった。

改と詩乃は黒光りする木造の建物の前にいた。そこが改が案内した喫茶店と気付くには二つのサイコロの意匠金属板を見付けなければならぬ。因みに金属板の下部には“DICEY CAFE”と打ち抜かれている。

「…(ト)ト」

「そう」

改は躊躇いなく「CLOSED」と書かれたプレートが掛かっているドアを開けた。
「いらっしやい」

見事なバリトンボイスが二人を出迎えた。声の発生源は濃い褐色肌の巨漢。

「よお、エギル。遅れて悪かったな」

「他の奴等ならもう来てるぜ」

そういつてエギルと呼ばれた巨漢は顎で店内の一角を示した。

「遅いですよー!」

「文句は菊岡……クリスハイトに言え」

改に声を掛けたのは肩までの髪を僅かに内ハネさせている少女だった。

「大変だったんだぞ、里香がアップルパイ二切れも食べたりして……しかも俺の奢り……」

憔悴した声で黒髪の少年、和人が呟く。

「キリト君、賭け事弱いもんね。私もごちそうさまです」

そう言ったのは栗色の綺麗な長い髪の少女、明日奈。

「畜生……」

「ぐ」愁傷さま。詩乃、紹介するな」

改はその場にいる全員を紹介し詩乃も自己紹介したところで、三人が座っている席に

詩乃とともに座った。

「そんで、どんくらい話した？」

「俺の知ってることは全部」

「じゃあついさつき菊岡に聞いたことを話すぞ」

そうして改は詩乃と共に説明をした。個人情報もあるのでダイジェストではあるが十分を要した。

「…はあ、キリトもそうだけどシンさんもまあ巻き込まれますね」

里香がため息をつくように呟く。

「好きで巻き込まれてんじゃないが…いや、今回ばかりは自分から、かな」

「…あの、シンさんその…」

「…予想はつくよ。話したんだな？」

「…はい」

「別にいいさ。隠し切れるとは思ってなかったから」

「…ごめんなさい」

「謝罪は受けた。これでチャラな」

改と明日奈のやり取りを詩乃は訝しげに見ていた。

「改、それって」

「あの洞窟で詩乃に話したやつだよ。和人と明日奈、それにエギルは討伐戦の当事者だからな」

詩乃は咄嗟に三人を見た。見られた三人は静かに頷く。

「和人がくれた居場所が居心地が良すぎてな、ずっと言えなかつたんだよ。まあ良かったとは思うよ」

「シリカもリーファも変わらなかつたですよ。勿論私も」

「ありがたいね」

改は微笑を浮かべた。

「さて、俺の話は終わりだ。本題に入るぞ」

「え？さっきのが本題じゃ…」

「あ、ごめん。わざと言つてなかつた」

「はあ!？」

「あとついでにごめん。詩乃のあの話、この三人に話した」

改の言葉に詩乃はバツと和人達を見る。詩乃の顔には怯えが浮かんでいる。

「そんな、改、何で…」

「詩乃にとって必要な事だからだ」

「何が…!」

「シノン」

和人が口を開く。

「改から話を聞いたあと、俺達はあるところに向かったんだ」

明日奈が続ける。

「ごめんなさい、朝田さん。私達は昨日、——市に行ってきたんです」

詩乃は息を飲んだ。明日奈が告げた場所はあの事件のあった場所だからだ。

「何で…そんな」と…」

「詩乃、俺はさ、もう両親には会えないんだ」

詩乃は歯の根が合わないように震えながら改をゆつくりと見た。そこには真剣な眼差しをした自分の恋人が自分を逃がさないようにしていた。

「だけど詩乃、お前はまだ会える。会わなきゃいけない人がいるんだ。そしてしっかりと聞け」

「会わなきゃ…いけない、人？」

すると里香が立ちあがり奥の扉へと歩いていった。その扉から一人の女性が姿を表した。歳は三十代位、どこにでもいる主婦のような人だった。詩乃のその印象を裏付けるように女性の後ろから小さな足跡が聞こえた。小学校前に見える女の子だ。顔立ちがよく似ているので親子だろう。しかし詩乃は困惑したままだった。何故ならその親

子にはなんの見覚えも無いからだ。

女性は泣き笑い思わせる表情で未だに混乱している詩乃に深々と頭を下げた。女の子もならつてペコリと頭を下げる。里香が先を促し、和人と明日奈が席を二人に譲った。丁度改と詩乃と対面になる形だ。

詩乃はそこまで来てても女性が誰か理解出来ずにいた。でも、記憶の奥底で何かが自分に訴えかけていることも感じていた。

「はじめまして。朝田……詩乃さん、ですね？ 私は大澤祥恵と申します。この子は娘の瑞恵、四歳になります」

名前を聞いてもやはり詩乃は分からなかった。詩乃は挨拶も返せず黙ったまま。

祥恵と名乗った女性は大きく息を吸い、ハッキリとした声で話し始めた。

「私が東京に越してきたのはこの子が産まれてからです。それまでは、——市の……町三丁目郵便局で働いていました」

「あ……」

詩乃の唇からかすかな声が漏れた。祥恵と名乗った女性が言った郵便局はまさしくあの事件のあった郵便局だからだ。詩乃はその郵便局で起きた強盗事件で犯人から母親を守るために拳銃を奪い——引き金を引いた。確かにそのとき、母親以外にも女性の職員が居たことを詩乃は思い出した。

詩乃はそこまで思い出したがそれでも疑問が晴れなかった。何故、改や和人達がこの女性と自分を引き合わせたのか。

「……ごめんなさい。ごめんなさいね、詩乃さん」

祥恵は目尻に涙を滲ませながら詩乃に謝る。何故謝っているのか詩乃は理解できず呆然としてしまっている。

「本当に、ごめんなさい。私……もつと早く、あなたにお会いしなきゃならなかったのに……あの日のことを、忘れたくて……夫が転勤することをいいことに、そのまま東京に出てきてしまつて……あなたが、ずっと苦しんでることを考えもせずに、謝罪も……お礼すら言わずに……」

祥恵から涙が零れる。娘の瑞恵が母を心配してその顔を見上げる。その女の子の頭を祥恵は優しく撫でた。

「あの時、私のお腹の中には、この子がいたんです。だから、詩乃さん……あなたは、私だけじゃなくて……この子の命も救ってくれたの……本当に……本当に、ありがとう……」

「……命を……救つた……?」

詩乃が呆然と呟く。

「……詩乃」

改が詩乃に言う。

「俺は誰かを助けるために、お前と同じようなことをしたんじゃない。だけどお前は、こうして、この二人と、他の職員の人と、そして母親を守り、救ったんだ。自分の罪ばかりに目を向けるな。確かに、一人の命を奪った事は、重い。だけど同時に、お前はその重さにばかりかまけて自分が助けた人を考えることを忘れてる。もう、お前は赦されてもいいんだ。その権利が、お前には、あるんだ」

自分と同じように、この現実世界で人の命を奪い、あまつさえ仮想の世界でも人を殺めてしまった改の言葉は詩乃の心にすつと入り込んだ。

改から視線を外し、親子の方へと向けたが返す言葉を詩乃は出せなかった。それどころか何かを考えることすら出来ずにいた。

すると、とん、と小さな足音が詩乃の耳朶を叩いた。瑞恵という女の子が向かいの席から飛び降り、とことこと詩乃の元へと歩いていった。瑞恵は詩乃の前に行く幼稚園の制服らしいブラウスの上から掛かったポシェットの中から四つ折りにされた一枚の画用紙を取り出した。不器用な手つきで紙を広げ、詩乃に差し出す。

詩乃の目に飛び込んできたのはクレヨンで描いたのであろう三人の親子の絵。真ん中に髪の毛の長い女性、にこにここと笑うそれは、恐らく母親の祥恵。その右には三つ編みの女の子、自分自身を描いたのだろう。左側には眼鏡を掛けた男性、流れからして父親だと思われた。一番上には覚えたばかりであろう平仮名で「しのおねえさんへ」と書かれ

ている。

詩乃は差し出された絵を両手で受け取った。すると、瑞恵はにこりと笑い、子どもらしい舌つ足らずな声で、ハッキリと言った。

「しのおねえさん、ママとみずえを、たすけてくれて、ありがとう」

詩乃の視界がぼやける。世界が虹色に輝き輪郭を無くす。詩乃は自分が泣いていることにすぐに気付かなかった。いつも自分の流す涙は苦しく、辛いものばかりだったからだ。だからこそ詩乃は、自分の流す温かく、清く、優しく、全てを洗い流してくれる涙を知らなかった。しゃくりを上げることなく静かに流れ続ける涙を止める術を詩乃は知らなかった。すると、不意に自分の左手を覆うものを感じた。自分の愛する彼の手だ。そして反対側も彼の手より遥かに小さい手が恐る恐るという感じに、しかしすぐにしっかりと握られた。そこはまさしく、銃の火薬の微粒子によって出来たほくろのある場所だった。

自分が、罪の全てを受け入れられるようになるのは、きつとまだまだ先の事だと思
う。それでも詩乃は一步ずつでも歩き出そうと誓った。だって…

世界は、こんなにも温かいのだから

キヤリバー編

welcome to ALO!! 上

死銃事件からはや一月、俺、閑田 改には再び平和な時間が訪れていた。今日は土曜日、いつもの習慣で朝早くに目が覚め、ぼうっとした思考の中朝食の準備をしようとした。

「…あ、しなくていいのか」

だが俺の日常は以前と少しだけ変わった。それも決して悪い方向ではない。むしろ最高です。俺はいそいそと寝間着を着替えて朝の身仕度を済ました。男の身仕度なんぞ着替えて髭剃って寝癖直すくらいだ。そして彼女が来るまでに部屋の掃除をぱぱっとする。大方片付いたところでインターホンがなった。俺は玄関まで行きチェーンとロックを外す。戸締まりはきちんとしてみましょう。

「はいはい…おはよう、詩乃」

「ええ、おはよう、改」

扉を開けた先にはあの事件で恋人となり、今ではご飯を作ってきてくれる俺の彼女、朝田 詩乃が立っていた。

小さな食卓を二人で囲む。食卓には詩乃の作ったありがたい朝食が並んでいる。

「いただきます」

「どうぞ」

口に運びよく咀嚼し、味わう。こうして詩乃が食事を作るようになったのはあの事件からそう経っていない時だった。詩乃が過去の事がある程度清算した祝いとして俺が彼女に料理を振る舞ったのだが、どうやらその時に彼女以前に女として負けたと思っただけ、すぐに打ち解けた明日奈に料理を教わり、週に2回俺に朝食と夕食を振る舞うようになった。ちなみに食費は俺が意地を通して割り勘にさせた。

「…どうぞ？」

「ほんとに上達したよな。良い嫁さんになりそうだな」

「誰の嫁かはもう決めてるからね。目標があると精進のしがいがあるわ」

変化は俺の日常だけでなく詩乃自身にもあった。今まで一人で過去と向き合っていたせいか、人に甘えるということが苦手な彼女であったが、清算してからは吹っ切れたのか二人きりの時は臆面もなくこう言うことを言ってくる。それも微笑付きで。心臓に悪いです。もちろん良い意味で。だから負けじと俺も言う。

「なら俺は誇れる旦那になろうかね」

「っ…」

”誰”、と濁すことで羞恥心から逃れていた詩乃であったが俺が明確にしてやることで思考の逃げ場を無くし、顔を赤く染める。いやー、

「眼福眼福」

「ちよー！改あー！」

俺は笑い、詩乃は恥ずかしさで俯いてしまう。そんな賑やかしくも暖かな朝の一時だった。

「ALLO?」

「そ、詩乃もやんねえか?」

朝食を食べさせてもらった礼として俺は洗い物をしていた。その最中にふと学校で和人と明日奈が詩乃をALLOに誘いたいと言っていたことを思い出し、話題を振ってみた。

「うーん、それ、明日奈にも誘われたのよね」

「なんだ、もう勧誘されてたのか」

「ええ。でも、こう…」

「GGOと違ってヌルそう、か?」

「正直に言っちゃえばね」

確かに、ゲーム内の金をリアルマネーに還元できるGGOはそれを生活費にしている猛者もいるためVRMMOの中では屈指の激戦区になっている。始めからそこに身を置いていた詩乃としてはそう見えてしまっても仕方ないかもしれない。だがしかし、

「詩乃よ、それは甘いぞ」

「?どうして?」

「確かにALLOはGGOに比べて平和的なゲームだ。だが実際はPK推奨、アイテム争奪戦と殺伐とした物もある。更に銃という現実的な武器とは違い魔法という奇っ怪なものもある。戦略だけならGGOより遥かに多彩だぞ」

説明途中から詩乃の目が山猫染みてきた気がする。詩乃って若干バトルジャンキーが入ってるよな。

「それに」

俺はそこで一旦洗い物の手を止めて詩乃を見る。詩乃はキョトンとして俺を見ていた。可愛い、じゃなくて、

「俺さ、あつちでプレイヤーホーム持つてるから一緒に暮らさない？ 現実じゃ世間の目が厳しいがあつちなら同居が可能です」

「やるわ」

まさかの即決う！

「は、早いな…」

「え？ 私答えてたの？」

「無意識かつ反射かよ!？」

詩乃よ、お前どこまで…

「ま、まあやるってことで良いんだな？」

「ええ。でも私、どんな種族があるのか何も知らないんだけど…」

「あ、ならちよつと待つてろ」

俺は洗った物を片付けて机の上のパソコンを起動させる。最近のパソコンは立ち上がり
りが非常に早くて助かる。

「サイト？」

「そ、一旦それで見ても」

俺は詩乃を椅子に座らせて使ってもらう。俺は詩乃の後ろから覗き込むようにする。
すると必然的に距離が近くなって詩乃の髪から良い匂いが…って胸元から下着が！し
かも黒だど!?

「へえ、結構あるのね。改はどの種族なの？」

「え？あ、ああ。俺は闇妖精だ」

詩乃はALLOの公式サイトの種族紹介ページを開き尋ねてきた。

——危ねえ…トリップするところだった…

「闇妖精…ゴツくない？」

「それはまちまちだぞ。俺は現実の体に近いアバターになったからそれはラッキーだつ
たな」

「へえ…えーと、他には…」

「火妖精、水妖精、風妖精、土妖精、鍛妖精、猫妖精、影妖精、音妖精だな」

「どれが人気なの?」

「一位は火妖精、次点で風妖精だな。ちなみに不人気一位は影妖精なんだが…最近それも目立たなくなつたな」

「どうして?」

「影妖精はな、和人…キリトの選んでる種族なんだよ。ALOじゃ有名だぞ? 影妖精と水妖精のイチャラブカップルコンビ」

「あ、水妖精って明日奈?」

「そ、んでそれを知つた野郎共があやかろうと一時期こぞって影妖精を選んだんだよ…全員すぐに後悔してたけどな」

「当然でしょ、あいつと同じ種族を選んだからって同じ様になれるわけ無いのに」

「至極もつともだな。だが遅しい事にほぼ全員が影妖精のままプレイしてるよ。何人かはALO屈指の大富豪にもなつてるし」

「大富豪?なんで?」

「元々トレジャーハントを得意とする種族だからな。誰よりも早くお宝見付けてウハウハだ」

「なるほど、ほんとに遅しいわね…ねえ改、私はどの種族が向いてるのかしら?」

「んー…プレイスタイルによるけど…闇妖精か猫妖精かな?」

「特徴は?」

「そのサイトにも書いてあるんだが、闇妖精は暗闇に強いんだ。元々詩乃はスナイパーだし、息を潜めて強襲、離脱のスタンスが取れる」

「猫妖精は?」

「他の種族より得る情報が多い。特に眼。他の種族の索敵圏外からでも普通に見ることが出来るらしい」

「そう…悩むわね」

「ま、そこは好きずきだな。別にアバターを2つ取っても良いんだし。俺は闇妖精一択だけだ」

「うーん…改、選んで」

「え!?!俺が決めんの?」

「ええ」

「いやいやいや、自分がプレイするんだから自分で決めないと」

「改なら私にピッタリなものを選んでくれるでしょ?こないだ二人で出掛けたときも良いものを選んでくれたし」

確かに、先週は詩乃が冬物の服が欲しいと言っていたので俺から買いに行こうかと

誘って出掛けた。その時に詩乃は俺に冬らしい服と俺好みの服を選ばせたのだ。そこまでセンスに自信は無かったのだが彼女に頼まれた以上応えたくなるのが彼氏、無い知恵絞って冬物を選んだ。結果中々に好評価を頂いたので調子に乗って俺の好み全開の服を選んだのだが…そこで失敗したと思った。俺は黒やアースカラーと言った地味な色が好きでクールな詩乃に美しさを引き立てる為に黒を基調とした物を選んだのだが、選び終わった後にちよつと必死すぎたかと後悔した。まあどうやら詩乃は俺の選んだ服にご満悦になっていたが。詩乃の趣味に合ったのはたまた俺の好みが知れて嬉しかったのかは分からない。分かっていることは俺の選んだ服は衣装タンスとは別枠に収納されている事だけだ。詩乃さんや、いくらなんでも衣装カバーを掛けて部屋に飾るのはどうかと…

「うーん…あれは本当に俺の趣味全開にしちまったから割りとは黒歴史なんだが…」

「あら、私は嬉しかったわよ？改の趣味が分かったし次出掛けるときの参考にもなったわ」

「さいで…」

「…着てきてあげよつか？」

「嬉しい誘いだが襲いたくなるから止めて。着るなら次のデートで」

「了解。それで？どれがいいのかしら？」

「そうだなあ…詩乃は遠距離戦が良いよな？」

「ええ」

「魔法と弓、どっちが良い？」

「…弓かしら」

「弓だと土妖精か闇妖精でバリスタみたいのを使うのが定番なんだが…猫妖精かな？」

決して俺が猫耳シノンを見たかった訳じゃ無いからな？

「そう、ならそうするわ」

「わあ即決。理由聞かないの？」

「改の事だしちゃんとした理由で選んでくれたでしょ？ならそれが全てよ」

この子本当に男殺しだよ。普段つつけんどんな態度を見せられてたからギャップが凄すぎる。心なしか付き合う前よりなんか色気が出てるし。

「じゃあ買いに行きましょ？早くやってみたいわ」

「ほんと決めたら行動が早いな…」

「スナイパーは早さと正確さを尊ぶのよ。それに…」

詩乃は俺の耳元に口を寄せて囁いた。

「早速あなたの好きな姿が見れるのよ？」

…しまった、これデートになるから約束が発動する。

「着替えて来るわ、改も着替えといてよ?」

詩乃はそそくさと俺の部屋から出ていった。その時に見えた耳が赤くなっているのは気のせいでは無いだろう。

「俺、理性保つかない…」

毎日運動しているのは鍛えているだけではありません。

部屋の鍵を開けて体の中に滑り込ませる。そのあとしつかりと鍵を掛けた。すぐに出ると言っても戸締まりはちゃんとするようになっている。私は若干震えている脚を必死に動かして何とかベッドまで辿り着く。そこで私は限界を迎えた。

「あああああ…恥ずかしい…」

少しでも改に女として見てほしくて必死に料理を覚えたり、わざと意識させるような事を言ってきたけど私の内心は普段のクールさをかなぐり捨てて荒ぶっていた。

「これ、ばれて無いわよね…？改、そういうところ鈍いし…大丈夫、大丈夫よ…」

そう、いつでもそういうことが起きても大丈夫な様にちよつと（いやかなり）大人っぽい下着を着けていることもきつとバレてない。

「…着替えなきゃ」

私はひとしきり悶えたあと、衣装タンスの横に掛けてある衣装カバーを手を取った。前回、改が訪れて来たとき内心慌ててタンスの中にしまうのを忘れていたのだ。普段は常に目に入るようにして意識して服を選ぶ様になっていたのが裏目に出た瞬間だった。改が帰ったあととはそれは悶えた。

「うう、恥ずかしい…」

思い出して顔が熱くなる。けどこれを着ると改に包まれている様な気がして実はこつそりと何回も着ていたりする。

「私、ほんと重症ね…」

我ながらに重い女だと思う。きつと別れを告げられたら即座に首を括るだろう。それだけ私の中は改一色に染まっている。それでもなお彼の色に染まりたいと思ってい

る。従属欲が強すぎだ。

「…いつか、この事も話さないかね」

彼はどう思うだろうか。…いや、考えても仕方がない。それよりも今は、

「着替えてメイクしないと…」

私は行動を始めた。

詩乃から近所の公園に行つててくれとメールを頂いた。集合は11時だから俺は30分前に着くようにする。女の子を待たせてはいけません。ちなみに俺の服装はカーキのズボンに藍色のパーカーだ。あとユ○クロのダウン。野郎の服なんてそんな

もんだ。和人なんて黒一色だしマシな方だろう。

「寒い…冬真つ盛りだな、俺も冬物買つときや良かったな」

その時は詩乃に選んで貰うか。そう思いつつ腕時計を見る。

「10時55分、そろそろかな…あ、そうだ」

俺は携帯端末を少しいじった。

「これでよしつと…」

そう呟いた所で足音が聞こえた。

「おまたせ、改」

俺は一つ深呼吸をしてゆっくりと振り返った。ガツンと頭を殴られるような感覚を得る。俺の好み盛り合わせを完璧に着こなす最愛の彼女、それだけでノックアウトです。

「…どうしたの？黙っちゃって？」

「ちよつと煩惱を抑えるのに忙しいだけです」

既に円周率は百桁を超えました。詩乃は俺の言葉にきよとんとするがすぐにやつと笑う。

「そう、別に抑えなくても良いのよ？私はあなたの彼女なんだから」

「朝の恥じらいはどうしたよ」

「自分で言うぶんには良いのよ」

マジで勘弁してくれ…

「さ、行きましょ？早く買ってお昼も済ませておきたいわね。あ、それとも…」

詩乃は下から俺を覗き込む様にして微笑を浮かべる。

「もつと見てたい？」

そんな蠱惑的な顔をするな！マジで理性がヤバくなる！

「い、行くぞー！」

俺は詩乃の手を取って少し早歩きで進む。もちろん詩乃が余裕で追い付けるような速度だ。

「ん」

「…詩乃さんや」

「なに？」

「今日は積極的ですね」

腕絡めて密着されました。逃げ場がありません。

「この服着てると気持ちが高ぶるのよ。いい気分だわ」

マジで煩惱との戦いになりそうです…

詩乃の内心

あああああ！やり過ぎた！どうしよう！ここから離れるのは不自然過ぎるしおかしいわよね！というより離れたくないし…それより私これの前になんて言った？抑えなくて良い？それ絶対に誘っちゃつてるじゃない！どうしよう、痴女に思われてないわよね？しかも見てたい？って何それ！確かに見られてたいけど！恥ずかしすぎるわ…助けて明日奈あ…

「くしゅん！」

「大丈夫か？風邪か？」

「うーん、体調管理はしっかりしてるんだけどなあ…あ、あそこの雑貨店可愛い！行き！
キリト君！」

「はいはい、了解ですよお姫様」

welcome to ALO!! 中

時刻は5時、詩乃との外出を終えて俺は自宅に戻って来ていた。うん、凄く楽しかったよ？何度も理性を試されたけどね！いやもうガリガリと俺の本能を剥き出しにしてくるから本当に大変だった。さて、そんな詩乃も隣の部屋に戻ってある準備をしている。何の準備かって？買ってきたALOを俺の部屋でプレイする準備だ。もう一度言おう。俺の部屋でプレイする準備だ!!

「いやなぜそうなった?」

この自問自答に答えは無いだろう。俺はベッドクリーニングをしながらそう思った。

「とりあえず、洗い立てのシーツOK、ファ○リーズOK、予備の寝袋OK、と。い、一応近藤さんも…」

——…使わないけどね!?だってALLOプレイするだけだし!詩乃に俺の部屋でプレイしたいって言われた時にベッド使うか?って聞いたのも変な意味じゃないし!親切心からだし!

誰に言ってるのかも分からないような言い訳を心の中でつらつらと並べては悶絶する。なんであの時断らなかつたのか、と。

「いやいやいや、無理だから、上目遣いで『使わせてくれない?』って言われたら断れないから!」

どこで詩乃の奴はそんな高等技術を学んでいるのだろうか…

「…あれ? そういえば和人が前に…」

『明日奈がお前の部屋でALLOをプレイしたがる?』

『そうなんだよ…なんか前の事件から俺の事をこう…監視? しようとしてくるんだ』

『ついにヤンが入ったか?』

『違うから…マジで俺の事を心配してます! って感じでき、常に俺の体温を感じてたいんだと』

『それ完全に惚気になってるからな…直葉ちゃんはなんて?』

『それなら私も!』

『今度占ってもらってこい、女難の相が凄そうだ』

『怖いから止めとく…じゃなくて！何とかする方法無いか？』

『何でだよ、良いこと尽くしじゃねえの？』

『ならお前はシノンが隣で寝てるのを無心で耐えられるか？』

『…OK把握。まあ、あれだな…頑張れ』

『うおおおおい!!』

「悪い和人、もつと真面目に考えるべきだったよ…てか完全にソースは明日奈だなこんにやろう！」

和人の奴が断らないのも大方同じ様に上目遣い十首かしげコンボを食らったからだろ。詩乃、料理と一緒にとんでもないことを教えてもらってるな。

「…運動系のバイトでも増やすか」

この調子が続くならマジでキツイ…いつ理性が崩壊するか…そう考えているとイン

ターホンがなる。俺は腹を括った。

「今開ける!」

そして扉を開けて後悔^{歎喜}する。

「お、お待たせ…」

「お、おう…」

…詩乃さんや、それ襲ってくれて言ってるの?どこまで俺を試す気なの?

「寒いから入れてくれる?」

「わ、悪い…」

「あ、先に夕飯の準備するからもうちょっと待ってて」

「…うす」

詩乃はそのままキッチンへと行った。詩乃がどんな格好なのかはご想像にお任せしよう。ただ一つ言えることは…

「明日奈…グツジョブ」

とりあえず眼福でした。

詩乃， s ハート

で、デートの時に改の部屋でやりたいって言ったけどこれで良かったの明日奈あ？これで本当に意識してくれるの？てか完全にこれおかしいと思われるよお：うう：人生で一番恥ずかしい：でもこれで改が喜んでくれるなら：えーと、確かこのあとは：（心のメモを捲る）っ!?や、やっぱりダメ！無理無理無理！これ本当に明日奈やつてるの!?!恥ずかしくないの!?!これじゃ本当に誘ってると思えないよお：私まだ高校生だし：あ、明日奈は経験済みだった。でもそう言うことをしたいって一言も言っていない：前にムードがどうたらこうたら聞かれてた：あれ？もしかして詰んでる？いやいやいや、私は改にA L Oを教えて貰うだけだから！それだけだからあ！

朝田 詩乃17歳、普段学校や外では物静かでクールを気取っているが明日奈に感化されて最近脳内ピンクに染まりかけている手後れ予備軍の一人。今日も今日とて羞恥に耐えながらも嘯み合ってはいいながらも改の理性を削り続ける。彼女が大事なものを幸せそうに失うのはそう遠くないのかも知れない…

「あ、明日奈…今日も?」

「お世話になります♪」

「あ!明日奈さんズルい!私もー!」

「す、スグまでえ!?!」

このあと三人で滅茶苦茶川の字した。

カチコチと時計の音が鳴っている。俺はキッチンに背を向けて座禅を組み瞑想していた。無心に、ただ無心に……

「改、出来たわよ?」

「……」

「改?」

「今行く」

俺は瞑想をやめて詩乃の作った夕飯にありつく。うん、旨い。

「大変美味しいです」

「そ、なら良かったわ」

くっそー……なんで詩乃の奴こんなに冷静なの?これから同じ部屋で寝ることになる

んだよ？ALOプレイするだけだけど。かと言って俺がそう簡単に動揺を見せるわけには行かないし、年上の辛いとこだわー…

再び詩乃，sハート！

な、なんで？なんで改はそんなに澄まし顔が出来るの？場慣れしてるの？いや私が初めての彼女だって言ってたし…もしかして私魅力無いかしら？でも昼間はちゃんと意識してくれてたし…もしかしてこれが賢者モードってやつなのかしら？どうしたらいいの明日奈あ！

「抱きつけば良いと思うよ？」

「何か言ったか？明日奈？」

「なんでもないよ？それよりもほら、もつとこつち来て。スグちゃんが入れないでしょ？」

「そうだよー、ほら！詰めて詰めて！」

「すぐく…持て余します」

「さて詩乃さん」

「どうしたの？急に」

「これからALOをプレイする訳ですが…」

「ええ、ちゃんとアミューズファイアとソフトは持ってきたわよ」

「そりや重畳。でだ、…ほんとに同じベッドで寝るの？俺は寝袋でも…」

「い、良いのよ。…その方が嬉しいし」

後半は小声だったがガッツリと聞こえてまつせ。

「そ、そうか…じゃあケーブルはそこに挿し込んでくれ」

「ん、分かったわ」

「始めたらずは指示に従って。初期配置は猫妖精^{ケットシ}領の首都で目が覚める筈だからそこで待つててくれ。俺が迎えに行く」

「早く来てよね」

「待たせはせんよ」

俺と詩乃はアミュスフィアを被りベッドに寝ころぶ。シングルだから結構狭い…つていい!?

「し、詩乃さん…?」

「べ、別に良いでしょ?」

「…はい」

腕、絡めて手を握られました。昼の再来です。暖かいな…

「じゃ、じゃあ行くぞ?」

「ええ」

「リンク・スタート!」

俺と詩乃は妖精の世界へと旅立った。

俺は閉じたばかりの目を開ける。広がるのは石と木で出来た天井だ。俺のホームはアインクラッド城の第2層にある水上都市の外れにある湖畔の真ん前にある。元々ボリビアのウユニ塩湖が好きで似た場所を探したらたまたまエギルが知ってたので手持ちのレアアイテムを売り捌いて買った。安くはなかったがいい買い物をしたと思う。「えーと今のアインクラッド城の滞空場所は…ラツキー、ケットシー領からそこまで離れてない」

これなら詩乃がキャラメイクを終えたと同時に着くだろう。

「装備は充分、余剰分もあるから詩乃…いや、シノンか。シノンにでもあげるか」

ふと備え付けられていた鏡に写った自分を見た。闇妖精インプの特徴である紫の髪に血色

の悪い肌、顔はリアルの目付きを少し柔らかくしたような感じであり違和感はない。このアカウントのキャラはコンバートではなく新規作成なのでステータスはアスナ達には及ばないがキリト同様そんなもの関係無しに自由にプレイしている。

「うし、行くか」

俺はホームを出てアインクラッドの外周部から飛び立った。一日の周期が現実と違うこの世界は今は日中。気象条件は最高、ALOを今日から始めた奴はラッキーだと思う。俺は鼻唄を歌いながらケツトシー領へと羽ばたいた。

キャラメイクを終えて、私は慣れ親しんだものとは全く別物の空気を感じ取り閉じ

ていた目を開いた。

「うわあ……」

燦々と照りつける太陽が私の目の前の景色を色鮮やかに見せた。

「これがALLO……」

GGOのあの埃っぽい退廃的な近未来の世界ではなく、まさに王道のファンタジーな世界にはしばらく見とれていた。惚けた様に見ていたら少し遠くから他のプレイヤーのクスクスといった笑い声が聴こえて私ははっとした。VRMMO特有の少し過剰な感情表現が私のアバターの顔をうつすらと赤く染める。

「改はまだかしら……」

気恥ずかしさを誤魔化すように独り言を呟く。すると私と同じ様に猫耳と尻尾を付けた男性プレイヤー二人が話し掛けてきた。

「ようお嬢さん、ALLOは初めてかい？」

「なんなら俺らがレクチャーしてやろうか？」

声音自体は爽やかなものであったが下心がまる見えだった。

「結構よ。連れが来るのを待ってるだけだから」

「お、それって君と同じ様に新人さん？」

「既にベテランよ」

「ならその人が来るまでこの世界の事教えてやるよ、いい店があるからそこで…」
 「結構、と言ったのが聞こえなかったのかしら?」

私は虫を見るような目でその男二人を見る。つまり興味も関心も無い目だ。それがカンに触ったのか男二人はニヤニヤ笑いから一転して顔を歪めた。随分と安い男共だ。
 「この素人が…! 調子乗ってんじゃねえぞ!」

男の一人が私の腕を掴もうとしてくる。ハラスメントコードを知らないのだろうか? しかもこんな街中でやるなんて。すぐにハラスメントコードを押せる様に動こうとしたその時、男の腕が掴まれた。

「ああ!」

「よう、俺の連れに何してくれようとしてるわけ?」

男の腕を掴んだのは高身長イシノブの全身を濃紫の装備で固め、腰に光を写さない真つ黒な小刀を横向きに差している闇妖精インプだった。間違いない、

「あら…:じゃなくて」

「あ、わりいな。キャラネーム言ってなかったか。この世界じゃ”カイ”な。:で、こいつら何?」

「懇切丁寧にこの世界の流儀つてのを教えてくれようとしたみたいよ? 報酬つきで」
 この時点でカイの目が酷く冷たくなっていく。

「ほう…お前ら、バカなんだな」

「な!？」

「ぎっけんなよ!!」

「パツと見中堅の装備で固めているが今さつき連れの手を掴もうとしたところを考えるとハラスメントコードを知らないと見る」

「は、ハラスメントコード?」

「んだそりゃあ?つか放せ!」

カイに掴まれている男が振り解こうと腕を振るが腕は微動だにしなかった。

「更に基礎STRが低い。ケットシーは皆最初そうだ。既にこの時点で素人丸出しが分かる。最後に…」

男はなおも振り解こうともがくが動かない。もう一人も手伝っているが結果は同じ。

「…女性が領主であることが、そういう行為に厳しくない筈が無いだろ?」

ふと私達の周囲にいくつかの影が写っていることに気が付いた。しかし人の姿がない。そこでALLOは「飛べる」が売りだった事を思い出し上を見上げた。

「お前ら!何をしている!」

「げえ!?!憲兵!?!」

「は、放せ!」

同じ装備で固めた四人のケツトシーが私達を囲むように降りてきた。すると掴まれていなかっただ方が相方を置いて逃げようとしたがすぐに捕まった。

「罪状は猥褻行為未遂な」

「ご協力感謝します！」

「おら！こつち来い！」

「なんで同じ種族の俺達を捕まえんだよ！捕まえんだつたらこつちの薄汚いインプだろうが！」

私はその言葉にカチンときた。怒鳴り返そうとしたが別の声にそれは遮られてしまった。

「貴様ら何も知らんのか！この方は九種族統一武闘大会体術部門優勝者だぞ！そんな人がこんな下劣な行為をするか！」

「はあ!？」

私も驚いた。カイ、あなたそんなこともしてたのね。

「よ、よく知ってたんな…」

「自分、ファンなので！握手してください！」

「お、おう…」

…シンを語ってたときの新川君を思い出すわね。

「ありがとうございます!!この者達は二度と領内に入れないようにしますので!」
「ああ、よろしく」

このあと男達は何か喚いていたが一際大きな建物のある場所に向かって強制連行されていった。

「あそこは領主館でな、あそこで領内への進入禁止とか色々設定出来るんだ」

「結構本格的なのね…ありがとう」

「どういたしまして。さて、ゆつくりとしたいところだったがそうもいかなかったな」
「え?」

カイが顎で周囲を指した。そこにあるのは視線視線視線…注目の的だった。

「えーと、シノンでいいのか?」

「え、ええ…」

「んじやシノン、お手を拝借」

「え?」

突然カイは私の手を握った。そういえばダイブするときも手を握ったままなのよね…そんな事を考えていると体がふわりと浮いた。

「え?うわ!」

「よつと」

welcome to ALO!! 下

ケットシー領の首都から離れ一旦シノンと共に安宿に入った。別に疚しいことをしようとしているわけではない。俺はシノンに一通りのストレージやらの操作方法を教えたあと余り物の装備をあげた。余り物と言っても何故かゲーム内では非常に運の良い俺が集めたレアドロップで作った装備だ。性能は折り紙つきだ。シノンは最初渋っていたが俺がALOPレイ記念として押しきった。うん、凶らずもシノンの雰囲気と合致しているな。…狙ってないからな？

それから俺とシノンは高低差のある溪谷地帯に向かっている。

「なんで溪谷？」

シノンが俺に質問をする。

「理由は二つ。一つは飛行練習だ。高いところから羽を使って減速しながら落ちるんだ。最初は俺が補助するけどそのうち勝手に羽が使えるようになるからな」

「お、落ちる…」

「大丈夫だって。GGOでも飛び降りる位はしただろ？特に問題ないって」

「…それもそうね。もう一つは？」

「その弓の練習。ここつてもぐら叩きみたいで地中に潜るモンスターがいるんだ。高いところから射つなら結構経験値取れるんだよ」

「シノンの背中には俺があげた？フェザースター」という銘の弓が掛けている。威力が低い代わりに要求STRが低く初速が速い。更に急所に当てれば補正がつくという中々の逸品だ。まだSTRが低いのでこの装備だがここで経験値を集めて上げておけば更に良い装備を使えるようになる。シノンとは早く一緒に高難度のダンジョンに挑みたいからな。あの一体感が俺には楽しくてしょうがない。

「確かに慣らしはしておきたいわね…」

「その為の練習だ。ほら、着いたぞ」

歩き終えた俺達の目の前には深い谷が覗くフィールドが広がっていた。

俺は崖の端まで寄り、丁度良い着地点を探した。

「…あそこが良さそうだな。シノン！」

シノンが俺の元に寄ってくる。

「あそこが見えるか？」

俺は落差50メートル位の所にある丁度良い足場を指差す。

「あそこに降りれば良いの？」

「そうだ。まずは減速だけだから割りと早くできる筈だ。羽出してくれ」

シノンは背中から黄色の半透明の羽を出した。俺はその根本に当たる部分に触れた、のだが…

「ひゃうー！」

「え？」

まさか…

「もしかして…この世界でも敏感？」

詩乃は背筋が感じやすく悪戯でよくなぞったりした。その度に怒られたがまさかA LOでもそうだったとは…

「そ、そうみたいね…」

シノン顔真っ赤っすよ…

「えーと…羽の使い方を説明するに当たってイメージをやすくするために触れる必要があるんだが…止めた方がいい？」

「へ、平気よ！続けて…」

あ、これ意地になってるな。いいぜ、やってやろうじゃねえか。

「あ、そう。了解。じゃあ続けるぞ？」

俺はシノンの背筋に遠慮なく触れる。

「んあー！」

「今触れてるのが羽の根本だ。ここを中心にして肩甲骨の内側辺りから仮想の骨が生えてると仮定してくれ」

俺が説明してる間にもシノンは非常に悩ましげな声をあげる。…俺、説明してるだけだよな？

「それを地面に向けて扇ぐように動かすんだ。割りと軽い力で減速は起こるから心配はないぞ。仮に強く動かしたとしても上に飛ぶだけだから問題なし」

「あ…く…わ、分かったわ…」

何もしていないのにシノンは肩で息をしていた。…やり過ぎたか？

「じゃ、じゃあ先に羽を動かしといてくれ。俺は下に降りて準備しとくから」

俺はちよつと逃げるように下に降りていった。

シノンの内心

へ、変な意地張っちゃった…不味いわ、体が火照ってる。仮想の体なのに…いや、仮想の体だからこそかしら？簡単に言えば脳神経にダイレクトに接続してるようなものだし…

…この世界でぞ、そういうことしたら私、どうなっちゃうんだろう…確かアスナはいま私たちが使ってるアミュスフィアよりも遥かに高性能なナーブギアでキリトとしたのよね？うう、アスナが先に行き過ぎて辛…あれ？そう言えばここからカイの所に降りるってことはカイに飛びつくってことになるんじや…

「最高の思い出です、あと飛び込んじやええば？」

「アスナ？どうかしたか？」

「ううん、なんでもないよキリト君。それよりも早くしましょ？」

「アスナさーん！こつち買えましたよー！」

「リーファちゃんナイス！あ、キリト君これもお願いね？」

「ストレージがあるはずなのに荷物持ちにされるとはこれ如何に…」

「よつと…：シノン！準備できたかー？」

「え、ええ…：大丈夫よ！」

「よつしや、なら来い！」

それでもシノンは中々降りてこなかった。この練習は俺が飛行の感覚を掴む為に始

めたやり方なのだがシノンには向いてないのだろうか？その時たまたまシノンの口元を見た際にスキルの？「聴覚強化」が働いた。

『いやいやいや、これは飛行練習だから！決してカイに飛び込むって事じゃないから！そのシチュは大変嬉しいけど違うから！』

…練習法、変えるか。

「どうだシノン？」

「う、うん…飛ぶって結構気持ちいいのね」

現在俺はシノンの両手を掴んで宙ぶらりんの状態にしている。まずはこうして飛ぶ感覚を覚えてもらおうとしているのだ。

「それじゃあ羽を動かしてみようか」

「(イ)うっ？」

カサカサと羽が微妙に動く。だが自力で飛行するには足りない。

「もつと強くだな。空気を強く叩くイメージで…」

「く…こ、う、かしらっ!」

シノンが大きく羽を振りかぶったと思った瞬間空気が弾けるような音がして俺は万歳をしていた。

「…えーと」

「きやあああああああああああああああああああ!!!」

俺は声のした上方に顔を傾けると遠くに水色の髪の猫が飛んでいるのが見えた。

「ツシノン!」

俺は強く羽を叩き加速する。だが、

「シノンの奴、どんだけ力を込めたんだよ…」

システム上の限界ギリギリの速度を叩き出してしまったのだろう、差は中々縮まらない。上空に向かっているので放置していれば限界高度まで到達して自動で落下が始まる。だがそれではシノンには嫌な記憶しか残らないだろう。俺は少しでも早くシノンをつまめるために右手をシノンに向けて突き出し詠唱をする。

「—当たれ!」

闇属性の最速拘束魔法をシノンに向けて放つ。俺自身の魔法のレベルはそこまで高いわけではないので当たるかどうかは賭けだったがゲーム内では運のいい俺だ、ドンピ

シヤに当たった。

「きゃあー！」

シノンには纏わりつく闇に捕らわれ失速する。この魔法は拘束時間がほんの数秒のやつなので俺はその機会を逃さずにシノンの体を抱き留める。シノンは固く目を瞑っていたがやがて自分が浮いていることに気付いたのだろう、ゆっくりと目を開けた。

「……え？」

「つたく、いきなり強く叩きすぎだ。それじゃあ急加速もする…シノン？」

俺がちよつと非難めいた事を言っているとシノンは顔を真っ赤にして固まっていた。そこで俺も気付く。…俺とシノンの顔が数センチの所にあることを。人は唐突に気付くと咄嗟に動けないものだ。俺も一瞬硬直してしまいシノンの次の行動に対応が遅れた。

「ちよ…ち、近い！」

シノンは身を振って俺から離れた。ついでに言うところは雲の上だ。飛行の技術の無いシノンが俺から距離を取れば当然落下…

「あ、ばか…え？」

「改、あのね？…こういうことをしてくれるのはすごく嬉しいんだけどまだ日も高いしもつとこう…ね？」

—しなかった。落下どころか横にホバリングするという高等テクまでしている。

「えーと、シノン?」

「な、なに!？」

「飛べてんじやん」

「え?」

そこでシノンは初めて自分が飛んでいるという事に気付いた。

「…飛んでるわね」

「あれかな? 無我夢中で飛んでいた内に飛ぶ感覚を掴んでしまったとか…」

シノンはそこでふらふらと動いたり宙返りをするなどをしていた。

「そうみたい…」

「シノンはよく俺をチートとか言うけどシノンも大概だからな?」

普通はそこまで動けるのにもっとかかると思うんだが…

「嬉しいような虚しいような感想ね…」

シノンはさつきまでの真っ赤の顔を曖昧な笑顔にして答えた。

「まあとにかく無事飛ぶことに成功してかつどうやら期待しても良さそうなことが聞けたからオーライとして…」

「待つて、なんか聞き逃せないことを言われた気がするんだけど」

「はいはい次行くよー」

「ちよつとお！」

つい口走った言葉を思い出したのか再び赤面したシノンをかからかいつつ俺とシノンは地上に降り始めた。

「いやまあ分かってたけどさ、これはいくらなんでもなくね？」

地に足をつけて既に一時間経ったのだが俺とシノンの周りにはドロップアイテムが散乱していた。全部シノンが長距離から弓で狙撃してほぼ一発で倒している。元々川が流れていた設定なのか長い蛇行した一本道で直線の所は長くても80メートル位な

のだがそれでも異常な命中精度だ。ちなみにシノンに渡した弓の最大射程は70メートルだ。この時点ですでおかしい。どうやって残りの10メートルを補っているのだろうか…

「この弓、使いやすいわね」

「そ、そつすか…」

「でもやっぱり射程が短いわね…」

「無いとは思うけど頼むからGGOの射程は望んでくれるなよ？ゲームバランス崩壊するから」

シノンの命中精度で1キロ先から狙撃されたらあつという間に対モンスターでも対人戦でも終わっちゃう…

「うーん、残念ね」

「ま、そこは割り切ってくれ。射程が欲しいならスキルの補正もあるしリズ…カフェの顔合わせにいた茶髪女子に頼めば作ってくれるはずだから」

「里香なら知ってるわ、たまに会うもの」

「あ、そのの？こつちじやリズベットって名前だから。あいつはすごいぞ、マスタースミスだから大抵のものは作ってくれる」

「カイも？」

「おう、このピックなんかがそうだ」

俺は足に巻き付けてあるベルトからピックを抜く。黒い、光を写さない最高級の逸品だ。

「へえ、じゃあその腰の短刀も？」

「あ、これは違う」

「ふーん、なんかそれだけレア度が桁違いな気がするのよね」

う、お目が高い…

「よくお分かりで…」

「ゲームの勘ね」

シノンがどや顔をする。うん、かわいい（迫真）

「で、どういう武器なの？」

「まだ話す気は無かったんだけどな…」

だって知つたら確実に取りに行くはずだし…

「どのゲームでもそうだけど武器にはレア度があるだろ？シノンが使ってるGGOのヘカートなんかはサーバーに十丁しかない奴だったりするし」

「そうね」

「で、ALOではさらにサーバーにそれぞれ一つしかない単一の特殊アビリティが付与

レジエンダリーウエボン
されてる伝説級武器レジエンダリーウエボンてのがある。それぞれが超が付くほどの高難易度のダンジョンに隠されている正に伝説の逸品だ」

「…まさか」

「そのまさか。俺が持つてるのはその一つ、？闇器・クラミツハ”ってやつだ。これ取るのに苦労したよ…」

俺はつい遠い目をしてしまう。あの視覚が一切を封じられたダンジョン、入るたびに地形が変わる上に敵はこつちの姿を認識してくるといふ鬼畜設定。俺ですら30回以上挑戦したからな…

「そ、そう…ねえ、それって弓もあるわよね？」

ああ、やつぱりか…

「あ、あるぞ。？光弓・シエキナー”ってというのが」

「それ欲しい」

「今度な？流石に1，2時間じゃ取れないから…」

「そう…」

レジエンダリーウエボン
ALO始めてたつたの数時間で伝説級武器を望むのは流石つすね…

「それにまだ要求STR満たして無いだろうから装備はまだ無理だぞ？」

「ならばばらくこつちに潜るわ。ふふ、楽しみね…」

シノンの目が確実に山猫になってるよ…俺は戦々恐々としながらも目を右下に落としました。そこには時刻が表示されている。

—そろそろか…

「よし、慣らしは済んだよな？」

「え？まあそうね…」

「ちよつと付き合ってくれ、案内したい所があるんだ」

「？ええ、分かったわ」

俺はシノンの手を引っ張って空に上がる。さーて、流石に準備は終わってるよな？

ALOの内部の一日は短い、ログインしたときは日は天頂にあつたが現在は既に日は落ちて満月がのぞいている。俺とシノン雲の上をゆつたりとしたスピードで飛行していた。一面の雲海が幻想的な雰囲気醸し出している。

「ん、良さそうだな」

俺はメッセージ欄を覗き今しがた届いたばかりのメッセージを読んでいた。

「何か通知？」

「そんなとこだ。ほら、あそこ見えるか？」

俺はウィンドウを閉じて前方に見えるこのALOの象徴を指差した。

「世界樹だ。あそこの上にはイグドラシル・シティっていう街があつてな、ちよつとそこに用事があるんだ」

「大きいわね…」

「他の全てのゲームでも群を抜いてるだろうよ、ほれ、いくぞー！」

「あ、ちよつとお！」

途中でレースになつてしまったが俺とシノンは無事目的地に着いた。そこはイグドラシル・シティの一面にある一軒の住宅だった。

「ハイハイ。」

「そ、開けてみ」

シノンは訝しげにするがドアノブに手を掛けてゆつくりと開けた。

パン！パン！

「え!?!何!?!」

「……………ALLOへようこそ!!……………」

扉を開けた先にいたのは俺のフレンド達：キリト、アスナ、リズベット、シリカ、リーファ、エギル、クラインがクラツカーを手に待ち構えていた。

「あ…もしかして、明日奈?」

シノンは青の長髪をしている女性プレイヤーを指差した。

「うん、そうだよしののん」

「私もいるわよ」

「えーと、里香よね?」

「そうよ、こつちじゃリズベットだけどね」

「えっと、カイ、これって…」

「今日、ソフトを買いに行った時にキリトの奴に連絡しといたんだよ。『シノンがALLOを始めるぞ』って」

「それで俺がアスナ達に連絡したんだ」

「私達がいくら誘っても領かないんだもん、やきもきしたよー」

「ほんとはねー、まっ！カイが誘ったら一発だったみたいだけど」

リズがニヤニヤしながらシノンに言う。

「あう…」

「あーもー！かわいいなあー！」

「おいおいリズ、あんまからかかってくれんなよ？」

「ほーう、いつちよまえに彼氏面？」

「いや、彼氏だし」

「カ〜イ〜！」

そこで地獄からの亡者のような声を発する男がいた。

「お前は…お前だけは味方だと思っていたのにチクシヨ〜！」

「悪いなクライン、お・さ・き・き・に〜！」

「ドチクシヨ〜!!」

クラインは腕で目を隠した。分かりやすいな。

「今夜も開店してるから後で来な、一杯は付き合ってやるさ」

「エギルウ…心の友よ！」

「だが既婚者だ」

「一番の勝ち組じゃねえか！」

クラインの嘆きに場が笑いに包まれる。

「あ、自己紹介が遅れましたね。初めまして、シノンさん。シリカです。同じ猫妖精ケットンどうし、何かあつたらなんでも聞いてください！」

「ええ、よろしくね」

「あー私も！初めましてシノンさん！私はリーファって言います！お兄ちゃん…キリト君の妹です！本当は従妹なんですけどね」

「よろしく、リーファ」

「つと、俺もしなきゃな。初めまして！俺の名前はクライン独身にじゅサラマンダー「火妖精のモテない男だ」俺の扱い酷くねえか!？」

「ほら、シノンも自己紹介」

「あれスルー!？」

「そうね」

「え？会ってそうそうこの扱い？」

流石シノン、分かってる。

「私はシノン、種族は見ての通り猫妖精ケットンよ。武器は弓を使うわ、もし一緒にクエストを受

一刀目

今日も今日とて詩乃は俺の部屋に朝ご飯を作りに来る。？朝はキツイだろうから別に昼とかでもいいんだぞ？」と言つても（作らないでいいと言わないのは常識）詩乃は変わらずに作りに来る。？一日の始まりは私から始めて欲しい」だそうだ。俺の彼女可愛すぎかよ。

「まあ実際助かつてるけど」

「何か言つた？」

「いや？何でもない」

「そう、あ、改ここなんだけど…」

現在詩乃は俺の部屋で冬休みの課題をやつつけている。忘れられているだろうが俺は結構頭がいい。既に大学の範囲は学習済みです。

「——で、こうなる」

「なるほど」

でだ、詩乃さんや、冬だというのにちよつと露出高めの服装はわざとなのかな？暖房効いても風邪ひいちゃうよ？眼福です本当にありがとうございます。

俺がそんな事を思っていると携帯端末に一通のメールが入った。送り主は…和人？

『朝から悪い、さつきスグからMMOトウモロのニュース記事を見せてもらってたんだがどうやらエクスキャリバーが見付かったらしいから取りに行こうと思う。一緒に行かないか？勿論シノンも一緒に。』

「え？マジで？」

「どうかしたの？」

思わず俺は声を出してしまった。すぐに端末を弄つてそのニュース記事を探し出す。

「…あーらら、マジだこりゃ」

「だから何がよ」

「ん」

俺は詩乃にそのニュース記事を見せた。驚愕、そしてニヤリと笑った。こりゃ火が付いたな。

「ねえ改？」

「行きたいんだろ？構わないぞ」

「やった！」

はにかむ様に笑って小さくガッツポーズをする。最近課題とバイトで忙しかったしログイン出来ずじまいだったからな。いい気分転換になるだろ。

「よし、ログインまでは時間あるし切りいいとこまでやっちゃまうぞ」

「ええ、分かったわ。あ、場所は…」

じー、と俺を見てくる。やめてその目はほんとに弱いから。

「…ベッドは空いてるから」

「よし」

詩乃さんや、さつきよりも力強いガッツポーズは何故なんでしようねえ…ああ、持て余す…

所変わってここはキリトとアスナのホーム。課題を済ませたところで俺と詩乃はALOにログインをして来ていた。それなりに遅かったらしく既にキリトが誘いをかけ

たメンバーは来ていた。

「よおカイ坊、遅かったじゃねーの」

「課題をやっつけてたら遅くなっただよ」

「あれ？もう終わったのか？俺まだ七割しか終わってないな」

「う、課題…」

「あらリズ、もしかして…」

「や、やってるわよ？」

「リズさんってば課題を見た瞬間から投げ出すんですよ？それをわたしが言うと『見た』やった、よ！』って言うんですよねえ」

「シ〜リ〜カ〜!!」

シリカの暴露に怒ったリズが一旦作業を中止して言い返す。

「そういうあんただって課題ほとんどやってないじゃない!」

「え？それ大丈夫か？」

中等部でもなかなかの量があったと思っただが…

「わたしは訳あってやってないだけです」

「その訳って何…!」

ハツとリズは何かに気付いたようだ。高速でシリカに近づいていきがっしりと肩を

組みほそぼそと何かを話している。二三言話した後お互いに力強く頷きあっていた。リズはそのまま作業に戻って行った。：なんとなく察したわ。

「…何だったんだ？」

「あー、キリト、ガンバ」

「は？」

どうやら本気で分かってないらしい。

「それよりもキリの字、今日ウマイ事？エクスキャリバー」が手に入ったら俺様の？霊刀・カグツチ」取り行くの手伝えよな！」

「えー…あのダンジョンくっそ熱いじゃん…」

「それ言ったら今日のヨツンヘイムはくそ寒いだろ！」

「うーん、私も？光弓・シエキナー」が欲しいけど…それはカイと行こうかしら」

「開始早々から欲しいって言ってたもんな」

「ええ…開始二週間でもう伝説級武器をレジェンダリーウェポンご希望ですか…」

キリトとクライインが顔を引き攣らせる。

「リズが作ってくれた弓も素敵だけどやっぱり射程がね」

その言葉を聞いたリズが工房から顔をだす。

「あのねえ、本来弓は槍以上魔法以下の射程で使うものなの！普通は100メートル離

れたところから使わないのよー」

「欲を言えばその倍は欲しいわね」

「倍は倍でも10倍だろうけどな」

GGOの感覚でやればそれくらいは欲しい所だろう。

「…シノンの狙撃はえげつなかつたからなあ」

キリトがぼやく。以前一緒に狩りに出た時にシノンはこつちが視認できる出来るギリギリの範囲で一匹残らずかつ一撃も外さずに倒していた。もし範囲無制限のPvPだったら相手は一回も攻撃できずにハリネズミになるだろう。

「…おれ、シノンちゃんとは戦いたくねえわ」

クラインが戦々恐々と呟いた。

「ただいまー!」

「買ってきたよー!」

そこでポーシオン等を買って来ていたアスナとリーファが帰ってきた。アスナの肩に乗っていたユイちゃんが飛び立ち皆の中心で滞空する。

「買い物ついでに情報収集をしてきましたが、まだエクスキャリバーを獲得したプレイヤーはいないようです、パパ」

「ん? そうなのか? ならなんで場所が露見したんだ?」

「どうやら私達が発見したトンキーさん以外の別種のクエストが存在するようです。そしてそのクエストの報酬がエクスキャリバーらしいです」

ユイちゃんの言葉にアスナが小さく顔を顰めて付け加える。

「それにそのクエスト、あまり平和そうにないのよ」

「…もしかしてスローターか？」

「はい、そうです」

「POPの取り合いがすごそうだな」

「事実とても殺伐としているようです」

俺達は苦い顔をした。

「でもよお、ヘンじゃねえ？」

先程から飲んでいた火酒を一樽飲み干したクラインが言う。

「？エクスキャリバー」 ってのは邪神がウジャウジャいるとこの空中ダンジョンにあるんだろ？それがなんたつてNPCの報酬になつてんだ？」

「クラインさんの言う通りですね、なんででしょう？」

「ダンジョンへの道のりとかだつたら分かるけど…」

シリカとリーファが疑問に首を傾げる。

「ま、行けば分かるでしょ」

「それもそうだな」

相も変わらずクールなシノンの言葉に俺も同調する。あとで聞いたが俺が賛同した瞬間にシノンの猫耳がピクツと動き尻尾が揺れたらしい。それに気付いたのはアスナだけでニヤニヤとアスナに笑いながら言われた。

「よし！全武器フル回復う！」

「おつかれさん！」

リズが渡してきたそれぞれの装備を点検し腰に挿す。一通り全員が終わった後俺はキリトを肘でつつき進行を進めさせる。キリトはオホンと咳を一つした。

「みんな！今日は急な呼び出しにに応じてくれてありがとう！人数はトンキーが乗せれる定員より一人多いけどカイが謎の幸運を發揮して解決できるそうなのでそこは気にしないように！」

おい、謎の幸運ってなんだよ。てか皆もさもありなんって顔で頷くな。

「このお礼はいつか必ず、精神的に！それじゃいっちょよ、伝説級武器を取りに行こうか！」

おおー！と言う掛け声に苦笑が混じっていたのは気のせいではないだろう。まあ多分このメンツだと獲れちゃうんだろうなあ…